イヌ子さんのホラ吹き。《あの時の嘘、ほんまやで～》

あきと。

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

東北から山梨に引っ越してきた主人公『小牧あらた』が、主に犬山あおいとの関わりで展開していく物語。野クルのメンバーや他の人物との関わりから、キャンプに興味を持っていく感じのお話です。

目次

第1章　イヌ子の彼氏!?

第一話　「期末テストとクリスマスキャンプ」 ―― 1
第二話　「野クルのイヌ子さん」 ―― 6
第三話　「カリブーとバイク」 ―― 10
第四話　「テスト休みと風邪引きさん」 ―― 19
第五話　「クリキャン大作戦！」 ―― 30
第六話　「野クルへの勧誘？」 ―― 40
第七話　「じゅかいの牧場！」 ―― 47
第八話　「全員集合！」 ―― 56
第九話　「すき焼き！」 ―― 64
第十話　「お風呂と女子トーク」 ―― 76
第十一話　「しまりん団子」 ―― 83
第十二話　「プレゼントと部活動」 ―― 95

第2章　彼女と幼馴染

第十三話　「さん付け禁止！」 ―― 105
第十四話　「初日の出」 ―― 111
番外編　「教育実習生」 ―― 121
第十五話　「ダイヤモンド富士」 ―― 132
第十六話　「あおいの告白」 ―― 141

第3章　山中湖キャンプ

第十七話　「次のキャンプ」 ―― 152
第十八話　「富士山駅」 ―― 156
第十九話　「大きなカリブーとカリブーくん」 ―― 161

第1章　イヌ子の彼氏!?

第一話　「期末テストとクリスマスキャンプ」

１２月ーーー

冬の寒さが辛くなるこの時間、本栖高校の図書室でひとり本を読みながら、この空間で温まってから帰るのが最近の日課となっていた。

ここは放課後になると、あまり利用する生徒もおらず、ほぼ貸切状態。

とはいえ、来週からテストが始まる。それもあり、俺が図書室に来た時には、数人の生徒が勉強をしていたり、本の貸し出しの手続きに何人か入室したりと人の出入りはあった。しかし、日が暮れ始めるのと共に、殆どの生徒が帰路へつく。

現に今も、図書委員として貸し出しのカウンター席に座るお団子頭がトレードマークの女生徒と俺しかこの教室にはいない。

小牧（こまき）あらた　本栖高校1年。

中学を卒業するタイミングで、親の仕事の都合により東北から山梨に引っ越してきた俺は、新しい家から通いやすいこの高校を選んだ。

入学したばかりの頃は、同じ中学からの友達もいなければ知らない人ばかりだった。そんな環境に苦労はしたが、有難い事に近くの席の子が声を掛けてくれたのをきっかけに、仲の良い友人も何人かできた。

そのため、今ではそれなりに楽しい学校生活を送れている。

それにーーー

「ごめん、ちょっといい？」

本の内容に目を通しながら、入学した頃の事に思いを馳せていると、ふと隣から声を掛けられる。

声を掛けてきた人物に目を向けると、先程までカウンターにいたお団子頭の女生徒が机脇まで来て俺を見下ろしていた。

「そろそろ閉館の時間なんだけど」

「えっ」
　それを聞いて壁にかけられていた時計を見やると、すでに１７時２０分を指していた。下校時間が１７時３０分なのに対して、そろそろ図書室も閉館準備を始める時間となっていた。
「すみません！すぐ出ますね」
「いや、これから戸締りだからそんなに慌てなくてもいいよ」
　席を立ってすぐさま読んでた本を閉じて、バタバタと椅子にかけていたブレザーを羽織りながら帰りの支度をする。
「ぼーっとしてたのは俺なんで時間に気付かずごめんなさい！あっ、あとこの本借りて行っていいですか？」
「分かった。ちょっとまっててて」
　机に置いていた本を彼女へ渡すと、すぐにカウンターで貸し出しの処理をしてくれた。急がなくては行けないのに我儘言ってすみません。
　心の中で謝罪をしつつ、帰りの準備を済ませてカウンターへと向かう。
「はい。今週からの貸し出しは、冬休み前までには一度返却をお願いしてるから」
「ありがとうございます！それじゃ、ご迷惑をおかけしました」
　女生徒に見送られながら、一礼してから図書室を後にする。
　廊下でも何度か見かけた事がある子だから、おそらく同級生だと思うが話した事もない相手だったために何故か敬語で会話をしてしまった。
　まぁ、こちらに落ち度があるわけだから正解だったと思う。
　それにしても、今日はこの後とくに用事もないのに、いつもの癖で遅くまでつい残ってしまったな。早く帰って勉強しなくては。
《志摩リン》
　貸し出しの名簿の下の欄に本日分の貸し出しの数と日付、担当者の欄に自身の名前を書いて図書室の閉館業務を終わらせる。
　テストも近いし、私も早く帰らないとな。帰ったら勉強しよ。
　マフラーを巻きながら、先程までいた男子生徒が使用していた席を

見る。
最近になって、よく図書室に顔を出すようになった彼は毎回あの席に座っている。
いつも閉館前には帰っていたのに、今日は珍しく閉館ぎりぎりまで残っていたな。
テスト期間や、その少し前くらいならまだしも、図書室に顔を出す生徒はほとんどいない。いたとしても、着席してまでこの場所で本を読んでいく人も図書委員となってから遭遇したこともなかった。
誰か待ってたのかな？
そんな事を考えながら、図書室の鍵を閉め、閉館の札を教室の扉へと掛けるのだった。
（そういえば、さっきあの人が借りて行った本、アウトドアの本だったような）

ーーーーおよそ数十分前、科学室にて
「オイルこの位か？」
「そんなもんやない？」
自慢のおでこを出すメガネツインテールの大垣千明は、自身が新しく買ったキャンプ道具であるスキレットにオリーブオイルを垂らす。
それを見ていた同じ野クル（野外活動サークル）のメンバー。サイドテールに関西弁が特徴の犬山あおいに問いかける。
対して、確信は持てずとも大体その位が適量だろうとそれにあおいは応えた。
現在二人は、千明が週末に甲府で『オトナ買い？』をしたというキャンプ道具一式の一部である木皿の塗装剥がしと、スキレットのシーズニング作業に取り掛っていた。
シーズニングについて詳しく知らないという人もいるかもしれないが、簡単に言えば、元から表面についた錆止めを落として、オリーブオイルをなじませる「ならし作業」の事である。同時に、空焼きも行うため、取手が超熱くなるので十分に注意が必要だ。
両方とも、より普段使いがしやすいようにこういった作業をしなく

てはならないのだ。
「二人で何の実験してるの？」
すると、科学室に一人の女生徒が入室してきた。
野クルで最初に行ったキャンプの時の話しをしながら作業を続けていると、以前部活中にテントを壊してしまった際に力を貸してくれた斉藤恵那が二人に声をかける。
「あ、斉藤さん」
「お、斉藤」
ジュッ
「ぎゃっ!!」
背後にいた恵那に視線を向けた事により、注意が外れた千明の指がスキレットの熱くなっていた部分に触れてしまう。
火を取り扱う際は本当に気をつけて行動しましょう。

「へぇー、鉄フライパンって使う前こういう事するんだ。面白いね」
二人の作業に興味を持った恵那も参加し、ならし作業が進んでいく。

～シーズニング作業の工程～
①4～5回空焼きを繰り返す。
②オイルが馴染んできたら野菜の切れ端などを炒めます。
③次にお湯を沸かしてタワシでしっかり洗います。
④最後にもう一度空焼きをし、オイルを薄く塗って完了です。
『おおー』
あおいと恵那は綺麗になったスキレットを見て声をあげる。
「こっちもできたぞ」
二人とは別に木皿の塗装剥がしを終えた千明が完成した木皿を見せる。
「ほれーっ」
「おー、オイル塗ると味出るなー」
ブーン、ブーン
「お」

作業を終えた木皿とスキレットを並べていると、スマホが鳴った。
【野クルグループ】
なでしこ
『テスト終わったらみんなでクリスマスキャンプやりませんかっ!!
(??＞v＜??) ノ』
送り主は、最近野クルの新メンバーとして入部した浜松から来た元気いっぱいの転校生、各務原なでしこ。
「クリスマスキャンプやて」
「ナイス提案だな」
「私はクリスマス彼氏と過ごすからムリやなー」
「!?」
なでしこの提案に賛成の声をあげた千明に対し、あおいが残念そうな顔をしながら言う。
「彼氏いたのかきさまーっ!!」
急な冷や汗と共に目を見開きながらも、いつものお約束だろうと思いながら千明は声を荒げる。
「せやでー」
「なんだ嘘かーーー、……え?」
自分が予想していた返答ではない答えが帰ってきた事に、千明の頬に本物の汗をかく。
「いやいやいや、いつもの冗談だよな。イヌ子?」
「いつもは家族とクリスマスやけど、好きな人とかみんなでキャンプすんのもええかもなー」
淡々と話しが進む。
そんな通常運転のあおいに千明は、
「か、家族いたのかきさまーっ!!」
自分でもよく分からないボケをかますのであった。

第二話　「野クルのイヌ子さん」

「へぇー、犬山さん彼氏できたんだ」
「実はなー。最近付き合う事になったんよ」
　すっかり放置された木皿とスキレットをよそに、女子トークは続いてゆく。
「てなわけであき、彼氏も誘ってええかな？」
「ぐぬぬぬ、本当に彼氏できたのかお前……」
　くわっ！と面白い形相をしながら千明はあおいを問い詰める。
「ていうか、なんであたしに言わないんだよー！」
「そう言われてもなー。そういう話にならなかったからや」
「……それもそうだな」
　腕を組み、あおいとの最近での会話を思い出す。言われてみると、普段そういった色恋沙汰の話しをしない事に気付いた。
　あまりにも納得の答えに首を縦に振るしかない。
「だれだれ？同じ学校の人？」
　二人の会話が落ち着くのを待ち、恵那が続いて聞く。
　共学の本栖高校であれば、カップルが誕生するのもそう珍しくはない。それが知り合いの事となれば気になるのは当然だ。
「そうだそうだ！一体どこの馬の骨か、腐れ縁のあたしには教えてもらう義務があーる!!」
　恵那に便乗する様に、ビシッと人差し指を向けて隣にいた千明が机に乗り出してくる。
　恵那も相手が気になるのか、じーっと視線をあおいに向けたままだ。
「あきも会った事あるはずや。あらたくんやで」
　ふぅ、と息を吐き最近恋仲となった相手の名前を口にする。
「……あらたって、今年イヌ子ん家の隣に引っ越してきた小牧のことか？」
　今年の3月、犬山家の隣に小牧あらたを含めた小牧家の四人家族が

引っ越してきたのだ。
　千明自身もあおいからお隣さんが引っ越してきた事は聞いていたし、それが同級生だという事も知っていた。しかも、犬山家の隣人とあらば千明の家からも近いというわけだ。あらたの事は校内でも最寄駅でもよく見かけていた。
　当のあらたとあおいは、高校も同じという事もあり、小牧家が引っ越しの挨拶に訪れた日から友人関係にあった。
「確か同じクラスだったよな」
「せや、入学式の日にクラスで顔合わせた時は驚いたわ～」
「なんかロマンチックだね～」
　千明も知っている人物であったため、なんとなく安心し、胸を撫で下ろす。恵那はニコニコと笑顔を見せた。
「にしても、お前らそんなに仲良かったのか？　あんまり二人で話してる所とか見た事ないぞ」
「まぁ、あきはクラスも違うからなー」
「いつから付き合い始めたんだ？」
「ほんま最近やで、1週間ちょっと前くらいからやな」
「しかし、いつのまにそんな恋愛関係になっていたとはなー。全然気づかなかったぞ」
　ふむふむと恵那が頷く。
「ねぇ犬山さん。どっちから告白したのかとか聞いてもいい？」
「ナイスだ斉藤！あたしも気になるぞ!!」
「ちょっと恥ずかしいなぁ。でも、……あっちからや」
　珍しく顔を真っ赤にして俯き、あおいは答えた。自分から言う事に恥ずかしさを感じて蒸気した頬を冷ますように手をぱたぱたと団扇のようにして仰ぐ。
「へー、小牧。イヌ子の事好きだったんだな」
「でもそれをＯＫしたって事は、犬山さんも？」
　こくりとあおいが頷く。
　そっかぁと恵那も頷き返した。
（あたし、イヌ子がこんなに恥ずかしがっている所初めて見たぞ。本

当に小牧の事好きなんだな）
「あらたくん。いつもな、何かあるとすぐ助けてくれるんよ。私が先生から帰りに頼まれ事を受けて、なかなか帰れなかった日も一緒に遅くまで残って手伝ってくれて、親が用事で家空けてて妹が熱出した時も手伝いに来てくれて、本当に優しくて頼もしいんよ」
　小牧家が引っ越して来て以来、色々と家族ぐるみでの交流などで学校内だけでなく、学校外でも会う機会があった。
　そんな中であおいは、気がつけば彼を意識するようになっていた。
「くっ、普通に良い話しじゃねーか（そういえば、そういう事があったような話しを聞いたような）」
「いいなー犬山さん。すごく大事にされてるんだね」
　あおいはスタイルも良く、おっとりとした関西弁で可愛いと思っている男子もいる事だろう。そんな彼女を惚れさせた相手に（特に千明は）二人とも興味が湧いた。
「イヌ子がそこまで言うなら、小牧にも声かけてみるか。けど、本当にいいのか？クリスマスなら、あたしらとじゃなく二人で過ごした方が」
「ええよー、あらたくんもキャンプ興味あるって言うてたし。それに仲の良い友人と過ごす時間も大切にしようって、いつも二人で話してるんよ」
「寛大なカップルだな」
　思っていたよりも、犬山小牧カップルの仲が良さそうで千明も感心する。
「せや、斉藤さんもクリスマスキャンプどう？」
「えっ、私!?」
　あははと笑う恵那に、あおいが一つの提案を持ちかける。
　ソロキャンをよくするというリンの友達とあらば、キャンプの話とかをする事もあるだろう。ならば、キャンプ自体に興味を持っているかもしれない。
　先程までやっていたスキレットのシーリング作業を手伝ってくれていた時も楽しそうにしていた。

「デイキャンプにすれば寝袋とかもいらんし、一緒にやらん？」
「うーん、寒いの苦手だけど……ちょっと楽しそうだなぁ」
科学室のテーブルに身を任せ、そんな事を口にした。
やはり、少なからずキャンプへの関心はあるようだ。
「決めるのテスト終わってからでもいい？」
「うん。ええよー」
少し考えたのちに、あおいの提案に対しての答えは保留となった。
キーンコーンカーンコーン
まもなく下校だという時間を知らせる鐘の音が学校中に鳴り響く。
「そろそろ私帰るね」
それを聞いて恵那が先に席を立った。
「じゃあね犬山さん大垣さん」
「うん、またなー」
「じゃーなー」
と、科学室を後にする恵那を二人で見送る。
「なんだか、今日は色々ありすぎたな」
「木皿もええ感じになったし、うちらもはよ帰ろー」
「おー、でもその前に」
帰る準備をしようと千明を促すと、なでしこに返信をするという。
そして何故か、スキレットをバットのように持つ千明と共に、キャッチャーミット代わりに木皿を持ちながらしゃがんだあおいは、その姿で写真を撮った。
【野クルグループ】
千明
『次の野クルキャンプは』
あおい
『テスト終わりのごほうび。クリスマスキャンプで決まりやー！』
今頃スマホの向こうで、なでしこが拳を宙に向けて突き上げている事だろう。二人はそう思いながらようやく帰路へとついた。
その後、偶然下駄箱を通りかかった帰り際のあらたと鉢合わせた事で、千明に色々とどやされたのは言うまでもない。

第三話「カリブーとバイク」

テスト最終日の放課後。
「なにー!?なでしこ、お前この二人が付き合ってた事知ってたのか!」
「うん、あきちゃんは知らなかったんだね」
あおいさんに誘われ、野クルのメンバーである大垣さん、各務原さんの二人を加えた四人で帰りの電車に揺られながらの道中。
隣から二人のそんな会話が聞こえてくる。
「逆に何で知ってるんだよ!」
「私、この前二人が一緒に帰ってるの見ちゃったんだ。そこで声をかけて教えてもらったって感じかな（最初はまさか付き合ってるとは思わなかったけどね）」
「転校して来たばかりのなでしこが遭遇して、あたしが最近まで知らなかったって……運悪すぎないか!?」
「うーん、それは運が悪いっていうより、あきちゃんの勘が悪い、のかな？」
えへへと苦笑いのなでしこ。
「なにをー!なでしこのくせに生意気なー!」
それは聞き捨てならないぞと言わんばかりの勢いでギャーギャーと喚く。
「二人とも元気だね」
「せやろー、おかげでいつも楽しいわ～」
あおいさんから聞いていた通り、野外活動サークル、通称『野クル』の面々は賑やかだ。
大垣さんとは何度か顔を合わせているし、家も近所という事で、あおいさんとよく一緒にいるのは知っていたけれど、こうして一緒に帰るのは初めてだ。
最近本栖高校に転校してきた各務原さんも元気そうな女の子だな。
元々今日はこのあとの予定もなく、仲の良い友達たちも部活動があるため、帰宅部の俺は一人で帰ろうと思っていた。

そんな時、放課後一緒に帰らないかと、あおいさんからの誘いを受けた。どうやら、野クルのみんなと寄りたい所があるのだという。その目的地に俺も興味があったので、快く同行している訳だ。
「テスト終わったねー」
いつの間にか口論が終わったのか、各務原さんが両手を挙げて背筋を伸ばしながら言う。
「はー、あとは休みを待つばかりやぁ（余裕）」
「テスト休みがあるのって嬉しいよね（そこそこ）」
「だねー（まぁまぁ）」
「よゆうだったぜー（ギリギリ）」
各々がテスト後の労いの言葉を口にする。
「あれ？三人とも降りなくていいの？駅過ぎちゃったよ？」
そう言えば、と、なでしこが電車の外を確認しながら左右に座る友人らを見る。
どうやら、各務原さんはこれから行く場所についてまだ知らされていないようだ。
「今から『カリブー』に行くで!!なでしこちゃん!!」
気にかけてくれる彼女の肩に手を置いて、反対の手で親指を立てながらあおいは言った。
これから寄る目的地の名を。
「かりぶう？」
普段利用する駅を過ぎて、目的の『カリブー』の最寄りである身延駅にて降りる。
駅を出てから、身延の名物が並ぶレトロな町を抜けると、
「着いたで、ここやここ」
「わーっ！カリブーってアウトドアのお店だったんだ!!」
「アウトドア用品店来たこと無かったやろ？」
「うん!!」
目をキラキラとさせながら各務原さんは先を行く大垣さんと共に店内へと入っていった。
セーブがどうのとか話してたけど、何の事だろう。流行りのゲーム

か何かか？
　そんな二人の後を追い、俺とあおいさんも店の中へ。
「俺もアウトドアの専門店入るの初めてだ」
「ありがとうなぁ、あらたくん。一緒に付き合うてくれて」
「いいよいいよ。俺もキャンプ道具揃えたかったし」
　そう、今回カリブーに同行する事になったのは、あおいさんに放課後誘われた事以外にも、もう一つの理由があった。
　どうやら、クリスマスにキャンプを行うのだという。そしてそのキャンプに、この俺も誘われたのだ。
　とはいえ、キャンプというものに今まで行った事などない。そのため必要となる寝袋やその他の備品を今日は買いに来たのである。
「でも良かったのかな？俺もクリスマスキャンプにお邪魔する事になっちゃって。せっかくの友達とのキャンプなのに」
「もちろんや。それに私は友達とだけやのうて、あらたくんともクリスマス一緒に過ごしたいんよ」
　そう言いながらブレザーの袖を掴まれ、さらっと気恥ずかしい事を言われる。その言葉に、顔が紅潮した。
　ゆっくりあおいさんの方を見ると、耳まで赤くなっているのが分かる。
　相変わらず可愛いな！（口には出さないけど！）
　正直、自分もあおいさんとクリスマスを過ごす事はとても嬉しい。高校に入って出来た初めての彼女。そんな子と付き合い始めてからの最初のイベントであるクリスマス。
　そんなの、もちろん一緒に過ごしたいに決まっている。
　彼女の友人らも一緒とはいえ、それに参加できる事自体嬉しい事に変わりはないのだ。
　だからこそ、こうしてキャンプ道具も見に来たのだ。
「二人ともバラバラやなぁ、あらたくんはどうするー？」
「それじゃあ最初に寝袋から見ようかな」
　先に入った二人はすでに各々が見たいキャンプ用品を見ながら店内を周っていた。

同じくアウトドア用品店に初めて来た各務原さんは心を奪われたように、キョロキョロと右往左往している。
「シュラフのコーナー、あっちやで」
何度かカリブーを訪れているあおいさんに導かれ、キャンプ用寝具のコーナーへと案内される。
そこには様々な寝袋の種類から自立するハンモックまでもが並んでいた。
「寝袋ってこんなに種類があるんだ」
「冬用のマミー型シュラフはこのあたりやね」
そこには、人ひとりの体全体を覆うタイプのシュラフがいくつか置かれていた。
「って、見た目ほとんど同じなのに結構値段に差があるんだね」
実際にいくつか触れながら見ていると、一つ一つの値段にバラ付きがある事に気づく。
「それなぁ。冬用のシュラフって大きく分けてダウン製と化学繊維の二種類があるんやけど」
「どっちの方がいいの？」
「ダウンの方がコンパクトに収納できていいんや。でも……」
「でも？」
「同じ耐寒温度で化繊のものより2～3諭吉ほどお高くなっとります」
「そんなに!?」
その衝撃的な価格を聞いて、思わず持っていたシュラフを落としそうになる。
「私らはネットで化繊のやつ買うたけど、あらたくんはどうする？」
「俺も同じ種類にしようかな。バイトしてるとはいえ、そこまで余裕無いし」
俺は入学してすぐに中型バイクの免許を取るために、アルバイトを始めた。今まで貯めてきたお小遣いとアルバイト代を基に今年の夏休みから教習所に通い、卒業してからも、すぐに中古のバイクを買った。

そのため、今は高級な道具を揃えられるほどの貯金はないのだ。
ちなみに、俺はあおいさんと同じ『スーパーゼブラ』で品出し係としてアルバイトをしている。彼女にバイト先を紹介したのも何を隠そうこの俺だ。
向かいの酒屋さんでは大垣さんも働いているようだが、あおいさんを通じてでしか彼女の事をほとんど知らなかったため、その事は最近知った。
「あっ、これ私たちが使ってるのと同じやつや」
すると、あおいさんがあるシュラフを発見した。
「へー、あおいさんは何色使ってるの？」
「青やでー」
「良いデザインだね。俺もこれにしよう」
「ちなみに、あきが黄色、なでしこちゃんが赤色やな。ここで買えば送料も掛からないしネットよりいいかもしれんよ」
色々な色のバリエーションが出ているデザインらしく、今言われた三色以外にもいくつかの色が並んでいる。
「それじゃあ、俺はこのオレンジ色のやつにしようかな」
迷ったあげく、一番しっくりときたオレンジ色のシュラフを選ぶ。
「それじゃあ、あとはテントやな」
「あっ、それなんだけど、うちの親が昔使ってたテントがあって、まだ使えそうだからそれを持ってこうかなって」
「そうなんや。それじゃあ、最低限必要な物は他にあるやもしれんし、一度あき達にも聞いてみよか」
そうして、各務原さん、大垣さんとも合流する。
「ええのあった？」
「うん！でも手が出ないや」
余程欲しいものがあったのか、しょんぼり顔の各務原さん。
やはり、アルバイトをしていない学生にとって、こういったものはどれも高く見えてしまうのである。
「おー、小牧は寝袋見つかったのか。って、それあたしらと同じやつじゃねーか」

「みんなお揃いでえーやん」
「うん。それと大垣さん、あと必要なものってあるかな？俺が使うテントは家にあるんだけど」
「他に必要なものかー。あ、そうだマット買わないとな」
「せや、すっかり忘れとったわ」
マットは大まかに分けると、フォームタイプ、エアタイプ、インフレーダブルタイプの三種類がある。
各々三者三様の良い点悪い点があるわけだが、
「ま、結局６００円の銀マットしか買えへんのやけどな」
「見慣れたバッドエンドだ」
「でも…、マットってそんなに必要かな？寝袋はフカフカで寝心地いいし…」
銀マットを手に取るあおいさん大垣さんとは裏腹に、各務原さんが疑問を抱く。
キャンプ初心者の俺は買った方が良いはずなので、一緒にマットを手にする。
「地面からの冷気を防ぐ効果もあんだよ。これから気温はどんどん下がるし、冬キャンでマットは必需品だぞ」
「なるほど、キャンプ場は外だもんね。俺も寝る時気をつけよう」
「一応、カイロとかも多めに持っていくのがオススメだぞ！」
大垣さんが分かりやすく説明をしてくれた。
「せやなぁ。イーストウッドの時は底冷えして起きてもうたし」
「だよなー」
そういえば、前回が初めての野クルでのキャンプだったとあおいさんから聞いた。
その時の経験があって必要と感じるなら、二人の言う通り、俺も防寒対策はしっかりしないといけないな。
「寒…かったかなぁ？私はぐっすり眠れたけど…」
うーん、とその時の事を各務原さんが懸命に思い出そうとする。
本人から聞いたが、浜松からこちらに越して来た日、あるキャンプ場の近くのベンチで寝過ごしたところを志摩リンさんとい　うちの

学校の生徒に助けてもらったらしい。
この寒い時期に寝袋無しで外で寝れるとか。そりゃあぐっすり眠れていてもおかしくは無いな。うん。
「ほんと強い子だなお前」
「なでしこ強い子元気な子やで」
そんな事を言いながら皆で笑い合い、目的の物を手にした俺たちは、もう少しカリブーを見ていく事にした。

ーーーーーーーーー

【おまけ】
「身延まんじゅう美味しかったなぁ～」
「そうだね。ちょっと食べ過ぎた気もするけど」
カリブーを出た後、大垣さんの提案で名物の身延まんじゅうを４人で食べる事となった。
おかわりまでしてしまい、正直お腹いっぱいだ。各務原さんは１０個以上もペロリとたいらげていたが、聞いていた通り食欲旺盛な子のようだ。
帰りの電車で『お腹すいたね～』と言った時にはさすがに驚かされた。
そんな二人とは道中で別れ、今はあおいさんと二人で帰っている。
まぁ、家が隣同士なのだから自然とそうなるのだが。
「そういえば、あらたくん」
「ん？」
「免許も取ってバイクも買うた言うてたのに、学校へは乗って行かへんの？」
家が近づいてくると、思い出したように聞かれる。
あおいさんが言うように、俺はＣＢ４００　ＳＵＰＥＲ　ＦＯＵＲ（通称：スーフォア）を時折愛用している。
といっても、学校が休みの日のバイトでぐらいでしか今のところ使用していない。
「うちの学校申請さえ出せば、原付やバイクでの登下校可能なんやろ

？」
　そう。俺たちが通う本栖高校では、自転車以外での登下校も親の了承を得た判子を押した書類さえあれば車両での通学の申請ができるのである。
「そうだね。俺も教習所行き始めた時はそう思ってたよ」
「じゃあ、何で使わへんの？」
「確かにバイクで通えば楽かもしれないけど、そうすると、あおいさんとこうして一緒に帰ったり出来なくなっちゃうからね」
　俺が思っていた事を伝えると、あおいさんは、
「せ、せやね！私もあらたくんと帰れるのは嬉しいで!!」
　と、恥ずかしそうに答えた。
　自分でもちょっと恥ずかしい事言ってしまったと後悔する。困らせてしまっただろうか。
「俺、あおいさんとこうして帰るのもそうだけど、一緒に帰る日に部活が終わるのを待っている時間も結構好きなんだよね。帰りに何話そうとか考えてさ」
　二人は付き合うようになってから、週の何日かは一緒に帰るようにしていた。
　野クルの活動は不定期であるため、ちょうど活動日と重なってしまう日もあるのだけれど、最近見つけた図書室という隠れスポットであらたは時間を潰している。
「ありがとう。そう思ってくれてたんやね。なんか嬉しいわ」
「もちろん、登下校以外では乗ってるよ。せっかく免許も取ったしね」
「いつか後ろに乗せてなー。天気が良くて暖かい日に乗ったら風が気持ち良さそうや」
「いいよ。免許とってからの一年間は二人乗りは出来ないけど、来年の寒くなる時期の前とかにどこか行こうか」
「やった！二人でそのままキャンプするのも楽しそうやなぁ。来年の楽しみが増えたわ～」
　バイク登校の話から、まだまだ先の来年のデートの話しにまでなってしまった。確かに楽しそうではある。

けれど、二人きりで出かけてそのままキャンプという事は、二人で泊まるというわけで。いやいや、何を考えているんだ俺は!?

ふとあおいさんの顔を見ると、ニコニコと可愛い笑顔を浮かべているだけだ。当の本人は、あまり意識していないように見える。

逆に恥ずかしい!!

「それじゃー、また学校でな。あらたくん」

「あっ、う、うん!・またね!!」

気がつくと、あおいさんの家の前まで来ていた。

手を振るあおいさんを玄関まで見届けてから、俺も自分の家へと帰ることにする。

はぁ、もう少し頼られる男として余裕を持った振る舞いをしないとな。

そう思いながら、トボトボと自身の家へと足を進めた。

一方、犬山家では、

「あおいちゃんお帰りー。……て、どうしたん?・顔真っ赤やで?」

「勢い余って口走ってもうた」

「??」

家の玄関で、赤くなった顔を手で覆うあおいなのであった。

第四話　「テスト休みと風邪引きさん」

無事にテストが終わり、学校から与えられた試験休みにする事といえば、
「バイト行ってきまーす」
高校に入学してから何度目かになる試験休み。
普段であれば、その休日を家で過ごそうかとも思ったが、月末のクリスマスキャンプに向けてもう少し稼いでおこうとシフトを入れていたのである。
というわけで、俺はお昼過ぎから夕方まで今日はバイトの予定だ。
「お兄ちゃん待ってー」
玄関で靴を履いてリュックを背負い立ち上がると、後ろから足音と共に聴き慣れた小さな声が聞こえて来る。
「ひかり、どうした？　兄ちゃんこれからバイトなんだけど」
「えっとね、私本屋に行きたいんだ。だから途中まで乗せて行ってほしいの」
振り返ると、お昼過ぎにも関わらず、未だに寝巻きを着用している妹のひかりが、こちらにのそのそと歩み寄って来る。
「ひかりー。いくら今日が創立記念日で学校が休みだからってこんな時間まで寝てると体に良くないぞ」
妹のひかりは近くにある小学校に通う5年生。
隣に住むあおいさんの妹であるあかりちゃんとは同級生で、俺とあおいさん同様に引っ越しの挨拶に伺った日から同じ妹同士で仲が良い。
偶然にも、今日は小学校も休みなようで、仕事に出掛けた父親以外の家族はみんな家にいた。
ただ、そんな妹には困った事がある。
「ううん、ちゃんと起きてたよー。窓から雲の観察をしてたらこんな時間になっちゃった」
「そ、そうか。ほどほどにな」

このように、ちょっと抜けた所があるというか、不思議な子なのである。
うちの両親も可愛いから大丈夫というよく分からない理由であまり気にしていないようで、娘として大事に育てている。正直、そんな親への心配が勝つかもしれない。
「それと、ひかり。前にも言ったけど、免許取ってから一年間は二人乗りしちゃいけない決まりなんだ。だから乗っていくのは諦めてくれないか？」
「そうだった。うっかりしていた」
不思議な子とは言ったが、ちゃんと物分かりのいい子ではある。それなりに勉強もでき、頭も優秀な方だ。現に今も我儘を言わずにしっかりと理解してくれたようで安心する。
「じゃあ、私がお兄ちゃんのリュックに入って隠れるから。それなら大丈夫？」
「…大丈夫じゃないな。おじゃ○丸かよ」
俺のリュックから顔を出すひかりの姿を想像すると、ある教育番組のキャラクターが思い浮かんだ。
「どうしても本屋に行きたいなら、母さんに頼んでみたらどうだ？今日は一日家にいるって言ってたぞ」
「ほんと？分かった」
「それじゃ、バイト行ってくるからな」
「うん。行ってらっしゃい」
そうしてひかりに見送られ、家を後にする。
相変わらずマイペースな子だ。だからこそ、タイプの違うお隣のあかりちゃんとも気が合うのかもしれないな。
ブーツブーツ
ヘルメットを被り、バイクに跨ったところでポケットに入れていたスマホが鳴った。
あおい
『あらたくん今日バイトあるん？』
あおいさんからのメッセージだ。

まだ急ぐ時間でもないし、返信してしまおう。
あらた
『あるよ。１７：３０まで』
あおい
『もし良かったら一緒に帰らへん？私も今日同じ時間までやから』
「あおいさんも今日バイトなのか」
俺もあおいさんも同じバイト先ではあるが、担当する部門が違うためにバイト中、顔を合わせる機会はあまりない。
だから、お互いのシフトも把握していない上に、同じ時間にバイトをしていても気づかない事だってある。
そうか。こうして当日にメッセージのやり取りをすれば一緒に帰れたりもするのか。
あらた
『了解！終わったら連絡するね』
そのメッセージを最後にバイクのエンジンをかける。
アクセルに手をかけ、今日もバイトがんばるぞと思いながら、バイト先へと向けて走り出した。

ーーーしばらくして、各務原家にて
恵那
『この前誘ってくれたキャンプ私も行っていいかな？（，エ，）』
「おーっ、斉藤がクリスマスキャンプ来るってさ!!ほれ」
「ほんとだっ!!」
風邪をひいてしまったなでしこのお見舞いへと来ていた千明が恵那から送られてきた文面を見せる。
「うーっ、ますます楽しみになって来たね!!」
「だなー、まだ何も準備してねーけど」
元々リンと行くはずだったキャンプに風邪をこじらせたせいで行けなかった分、今後予定していたクリスマスキャンプへの期待が膨らむ。
そこで、なでしこにある妙案が浮かんだ。

「あきちゃん…」
「ん？」
「今回はリンちゃんも誘ってみようよ」
「おー。でも、しまりんのやつ来てくれっかなー」
「誘うだけ誘ってみようよ！きっとその方がもっと楽しいよ！」
拳を握りながら、懸命に勧める。
「それもそうだな。けど、そうなると小牧のやつが少し可哀想じゃないか？女子が多い中で男子一人だけって」
「うっ、だ、だめかなぁ」
「まぁ、でも本人はあまり気にしないかもしれないしな。イヌ子にそれとなく伝えといてもらうか」
と、千明はあおい宛にメッセージを送ろうとするが、手が止まる。
「そういえば、なでしこの見舞いにイヌ子も誘おうかと思ったんだが、今日はバイトだったらしい」
「あっ、私連絡もらったよ、行けなくてごめんねって」
「まー、急な話だったからな」
「あおいちゃんと小牧くんって同じところでバイトしてるんだよね？」
「そうそう。あのスーパー、小牧がバイト探してたイヌ子に紹介したんだよ」
「仲良しだね～」
ふふっ、と微笑む。
キャンプが好きとはいえ、年頃の女の子である彼女もまた、二人の恋愛模様に興味津々のようだ。
そして、話に夢中になってしまった千明は、あおいへ送るメッセージの事をすっかりと忘れてしまったのであった。

ーーーそして夕方、スーパーゼブラでは、
「小牧くん時間押しちゃってごめんね。もうあがっていいわよ」
「はい。お先に失礼します」
明日の品出し用に、在庫の整理を終えたところで社員の方に声をか

けられる。
　すぐにタイムカードをきって従業員用の更衣室へと向かう。
「早く出ないと」
　今日シフトで入っていたパートさんの急な欠員により、予定よりも２０分ほど遅れて本日分のバイトは終了した。
　いつもより数倍のスピードで着替えた俺は、リュックを背負ったのと同時に自身のスマホを開く。
　案の定、そこにはあおいさんからの連絡が来ていた。
　あおい
『職員用出口の所で待っとるよー』
　まじか。
　さすがにこの時間になると、外は冷える。
　そうしてすぐに、スマホを片手に走り出した。

「なでしこちゃん、風邪治ったみたいで良かったわー」
　外であらたを待つ間に、風邪をひいたというなでしことメッセージのやり取りをするあおい。
　首に巻くマフラーをくいっと上にあげ、壁に背中を預ける。
「あおいさんっ！」
　すると勢いよく出口の扉が開かれた。
　出てすぐの壁の前にいた彼女を見て、あらたは安堵する。
　久しぶりの全力疾走で、息が乱れた。
　運動不足過ぎるかもしれない。
「あらたくん!?そんな息切らしてどうしたん？」
「……はぁ、はぁ、あおいさんの事、待たせちゃってたから。外寒いし風邪ひかせちゃうと思って」
　息を整えながら走ってきた理由を伝える。
　普段と変わらない彼女の姿を見て安心したのか、力が抜けた。
「そんな急がんでも大丈夫やで、１０分くらいしか待っとらんし」
「いやでも、待たせた事に変わりは無いから。ごめんね」

「ええよええよ。それじゃ、一緒に帰ろかー」
笑顔で迎えてくれた彼女に申し訳ない気持ちになりながら、先を行く彼女を追う。
「さっき連絡しとったんやけどな、なでしこちゃん今日風邪で寝込んでたらしいんよ」
「えっ、そうなんだ。大丈夫かな」
この時期となると、インフルエンザとかが出始める時期でもあるためクリスマスキャンプに影響が出ないか心配になる。
「もう治ったみたいやで。あきも今日お見舞いに行っとったみたいや」
「そっか、あおいさんも気をつけてね。待たせちゃった俺がいうのもどうかと思うけど」
「もー、あらたくんは心配性やな～。ほんま気にせんでええてー」
バイクを押しながら隣を歩く俺の頭を、手袋をしたあおいさんの優しい手が撫でる。
「それにしてもバイクカッコええな～」
「そうかな？」
ちらちらと視線を向けているなと思ってはいたが、どうやら俺の愛車が気になるようだ。
「なーなー、あらたくん跨ってみてー」
「えっ、ここで？別にいいけど」
そうして、道の端でバイクに跨って見せた。
近くに人もいないし、たとえ来たとしてもこの場所なら邪魔にはなるまい。
「おー、様になっとるなぁ。かっこええであらたくん！」
「ははっ、ありがとう」
新鮮な彼氏のライダー姿に興奮し、思わず写真を撮る。
「なでしこちゃん達にも見せてやらな」
そうして、その場でメッセージを送るあおい。
それを見てあらたは、以前あおいと話した事を思い出す。
「そうだ。あおいさんも良かったら後ろ座ってみる？」

「ええの!?」
「エンジン掛けてないし、運転する訳じゃないから、乗るだけなら大丈夫だよ」
バイクに跨ったままの俺の言葉に彼女が素早く反応する。
「それか俺が降りて一度普通に跨ってみる？」
「ううん、後ろの方がええ！」
そう言って彼女は目をキラキラとさせる。
「どうやって乗ればええんやろ？」
バイクの横に立つあおいがどうすればいいのかと、手をワタワタとさせる。
可愛いなおい。
「じゃあ、まずこれに足を乗せてもらうんだけど」
バイク側面に収納された二人乗り時に使用する左右の足掛けをパタリと倒して指示をする。
「ここ？」
「そうそう。んで、ここに手をついて座ってみて」
続いて、俺が座るシートのすぐ後ろにある空間に座るよう手を置く場所等を教える。
教習所に通ってた時に、教官の先生に指導された事を思い出す。
「んしょっと。わわっ!?」
あおいさんが乗った事で少しバイクが揺れた。
「慌てなくていいよ。俺がしっかりとハンドル持って抑えてるから」
「きゃ!?」
「っ!!?」
俺が言葉をかけ切る前にガバッと背中に抱きつかれる。
「あ、あおいさんっ！落ち着いて!!」
さらにぎゅーっとあおいさんの腕に力が入る。
あの、大変申しあげにくいのですが、背中に当たってます。その、柔らかいものが。
「ご、ごめんなあらたくん。ちょっとびっくりしてもうた」
「だ、大丈夫大丈夫（心中穏やかではないけれど）」

ようやく体制を維持できたようで、先程と違い、次は優しくあおいさんが俺の腰へと腕を回す。
「どう？初めてバイクに乗った感想は」
「なんか感動やわ～。初めて乗ったけど、思ったより高いんやね」
あおいさんが座っている所は、現在俺が腰を掛けているところより少し高く設計されている。
「走ったらすごく楽しいんやろな～」
今はまだそれが叶わないのは残念だけど、早く来年にならないかなと心の中で俺も思うのだった。
「そや！あらたくんこのまま写真撮って、写真！」
あおいさんが自分のスマホを俺の目の前に差し出してくる。
「いいよ。撮ろっか」
受け取ったスマホを自撮り画面にして空に掲げる。
それと同時に、後方にいるあおいさんがピースをしながら顔を寄せてきた。
「ほら！あらたくんも一緒にピースや!!」
「うん、じゃあ撮るよー。はい、チーズ」
カシャ
街灯が照らす道の端で、スマホの撮影音が鳴る。
「乗せてくれてありがとな～。写真あらたくんにも送るな～」
「うん、ありがとう（待ち受けにしよう）」
初の乗車体験を終えて、再び帰り道を歩き出す。
「まさかこんなに早くあらたくんのバイクに乗れるなんて。ほんま嬉しいわ」
「それなら良かった。でも、あおいさんと帰れるなら、バイトの時もバイクで来ない方が良いかも」
そんな嬉しそうな表情を見て、俺はあることを悔いる。
「何でなん？便利そうやのに」
「今はまだ二人乗りできないし。なにより、両手が塞がるとあおいさんと手が繋げない」
「っ!?」

一緒に帰れるだけでも当然嬉しい。さっきのちょっとしたアクシデントなんて、むしろ大歓迎だ！
ただ、こんな寒い日にこそ、さりげなく手を繋いだりするもんなんじゃないのかと思った。
とことんツイていない。
「……」
急にあおいは下を向いて黙り込む。
というより、急な彼氏らしい発言に少々、いや、相当動揺している。今顔を上げれば、真っ赤に染まった顔をあらたに見られてしまう。
が、そんなあおいの心情を汲み取れるほど、彼は出来た男ではない。
「せ、せや！　せっかくやし途中のコンビニで肉まん買っていかへん？」
「いいね。それじゃあ、俺が奢るよ」
「えっ、そんな別にええよ。むしろ楽しい思いさせて貰った私の方が」
「奢らせてほしいんだ。待たせちゃったお詫びに」
「……わかった。ありがとうな」
そうして、途中のコンビニで肉まんを二つ買う事にした。
「んー！働いた後の肉まんは最高やなぁ」
「ふふっ、そうだね」
バイクを停めて、その横で二人肩を並べて食べる。
そこで、あおいはある事に気づいた。
「もしかして、あらたくん背伸びた？」
「えっ、そうかな。自分じゃ分からないや」
最近一緒に帰るようになって、二人でいる時間も増え、お互いにちょっとした変化に気づくようになった。
何だか、そんな小さな事にも気づいてくれたことが嬉しい。
「やっぱり男の子やなぁ。育ち盛りやなぁ」
「そんなに食欲旺盛ってわけでも無いんだけどね」
「せや、あらたくんに見せたいものがあんねん。ちょっと持っててもらってもええ？」
「ん？」

すると、あおいさんから食べかけの肉まんを渡される。
彼女は、なにやらゴソゴソとバッグの中を探し始めた。
「これや！」
バッグの中から一枚のチラシを出される。
「歳末お客様感謝キャンペーン？あぁ、うちのスーパーでやってた懸賞か。これがどうかしたの？」
「この一等のおにく！当たってもーたんよ!!」
「なっ、何だってー!!」
それを聞いて、お約束の言葉が飛び出す。
「本当に!?あおいさんが当てたの!?」
「パートさんに勧められて応募したらたまたまなー。今度のクリスマスキャンプに持っていこうと思うてるんやけど」
肉まんを返し、改めてチラシに目を通す。
「国産Ａ５ランクの黒毛和牛肩ロース肉２ｋｇ…。すごいね！こんな高級なお肉、みんなきっと喜ぶよ!!」
「一人４０００円ずつや」
「!!」
そ、そうだよな。こんなに高級なお肉、タダで頂くわけにもいかないよな。けど、４０００円か。
「あの、何回払いまでなら可能でしょうか？」
「うそやでー」
あおいさんの顔は、稀に見る嘘をつく時の顔をしていた。
そもそもあおいさんがみんなからお金を取ろうなんて事は思っちゃいない。
とはいえ、タイミングが良かったため、このように騙されてしまった。
最近見分けられるようになって来たのだが、まだまだだな。
「キャンプごはんが楽しみだよ。ありがとう、あおいさん」
「あっ！あきたちにはまだ内緒にしててなー。次の部活の時にびっくりさせたいんよ」
「うん、わかった」

あの二人も騙されるなこれは。
そう心の中で思った。
「でも、お肉で２ｋｇって結構多いよね」
「大丈夫大丈夫。さっきあきから連絡あってなー。クリスマスキャンプ、うちらの友達の斉藤さんも来るみたいや」
「斉藤さん？あー、隣のクラスの」
「そうそう」
話した事はないけれど、各務原さんが入部した日に壊れたテントを治すのを手伝ってくれた子がいたって言ってたっけ。
確かその子が隣のクラスの斉藤恵那さん。
「それともう一人。なでしこちゃんが、志摩さんも誘う言うてたから問題ないと思うで」
「各務原さんを湖で助けてくれたっていう子だね。同じ学校だったんだよね。会うの楽しみだな」
（あれ？あらたくん図書室にいるなら志摩さんとは会うてるはずやけど。なんや面白そうやから黙っとこかー）
と、あおいはまたホラ吹き顔をこっそりと浮かべていた。

第五話　「クリキャン大作戦！」

テスト休み明けの放課後、野外活動サークル部長殿からの『作戦会議！』という呼び出しを受けて校庭へと集合した。
そこには、いつもの野クルの３人と他にもう一人の人物がすでに集まっていた。
「あらたくん。こちら、前から話してた斉藤さん」
初対面という事で、あおいさんが間を取り持ってくれた。
「はじめまして、斉藤恵那です。よろしくね小牧くん！」
「どうも、小牧あらたです」
先週聞かされていたクリキャンへの野クルメンバー以外の参加者。斉藤さんと初めて挨拶を交わす。
「犬山さんから聞いてた通り、優しそうな彼氏さんだ！」
「そういえば、斉藤さんにはクリスマスキャンプ誘った時にあらたくんの事話したんやったね」
「うん！隣のクラスだから何度かすれ違ったりはしてたけど、話すのは初めてだよね」
斉藤さんに視線を向けられて頷き返す。
明るくて人付き合いが良さそうな子である。
「さて！斉藤隊員と小牧隊員が我が探検隊に体験入隊するという事だが、ウチの探検隊は甘くないぞ!!覚悟はあるか!?」
「おす!!」
「お、おす!!」
何だろうこの小芝居は、しかもそれに乗っかれる斉藤さんもすごいな。
ひとまず、自分もそれに乗っかる事にする。
改めて、クリスマスキャンプへ行くメンバー（一人を除いて）が揃った。
大垣さんが買ったという焚き火台を囲み、お茶をしながらの作戦会議が始まる。

「えー、キャンプの日取りは２４、２５日。場所は五湖周辺て事だけ決まっておりますがー、具体的なキャンプ場はこれから決めてきまーす」
「たいちょう!!おやつはいく、」
「好きなだけ持って来てよし!!」
　さっそく手を挙げたなでしこに対して、質問を言い切る前に千明が答える。
　なんだか慣れているような対応の早さだったな。
「じゃ犬山くん、持ってく物の説明よろしく」
「はいはい」
　話は進み、あおいさんにバトンタッチされ、持ち物の話へと移る。
「基本は前のキャンプと同じやな。あらたくんの持ちもんはこの前揃えたし、テントはうちらのと志摩さんのもあるから、斉藤さんは寝袋と着替えくらいやな」
「わかった」
「リンちゃん来る気になってよかったよね」
「だね！」
　本日は委員会があるという事で、志摩さんは欠席していた。
「ねぇ、斉藤さん。志摩さんって、何の委員会なの？」
　クリキャンへ行くメンバーの中でまだ顔を合わせた事がないのは彼女のみ。
　同じ学校とはいえ、顔を知らないと挨拶のしようもないため、キャンプ当日まで会えないかもしれないという不安があった。
「図書委員だよ。今日も図書室で貸し出しの当番なんだって」
「えっ？」
　それを聞いて、ある人物の顔が浮かんだ。
「もしかして、お団子頭で背の小さな子？」
「そうだよ。小牧くんリンと知り合いなの？」
「ううん、話した事はないよ」
「そうなんだ」
　そうかあの子が志摩さんだったのか。

この前閉館ギリギリで貸し出しの対応をしてくれた時のことを思い出す。最近図書室によく行くようになってから何度か見かけていた。

他の図書委員もいるだろうが、いつも利用する際は、だいたいその子だったので、もしやと思ったのだ。

「あおいさん、教えてくれたらよかったのに」

あおいさんには、一緒に帰る日は図書室で待つ事を伝えてある。だから当然、志摩さんと会った事があるかもしれない事は知っているはずだ。

「あれ、言ってへんかったっけ～」

と、とぼけたような事をいう。

この顔、面白そうだと思ってわざと黙ってたな。

「そういう事は教えなさい」

「ふふっ、ごめんごめん。許してや～」

さすがに小突くのは可哀想なので、掌で頭にポンポンと触れてやる。

付き合うようになって距離が縮まってからというもの、ちょいちょいからかわれる頻度が増えてきたような気がする。

まぁ、それだけ心を開いてくれているのだろう。嬉しいといえば嬉しいが。

「なぁ、なでしこ」

「なぁに？あきちゃん」

「もしかして、あたしらはキャンプ中ずっとこの二人のイチャつきを見せられるのか？」

「仲良しカップルだよね～」

「あたしは耐えれる気しないんだが」

「え～、いいと思うけどなぁ。あおいちゃんも楽しそうだし」

「まぁ、それはそうだが」

何やら大垣さんと各務原さんがこちらを見ながらブツブツと話している。何かまずい事をしただろうか。

「ねぇ、プレゼント交換ってやらないの？クリスマスだし」

『プレゼントこうかん…』
恵那の質問に一同が声を揃えて復唱する。
それを聞いたとたん皆おどおどとしだす。
「あ、マズい事聞いちゃったかな」
「斉藤…本当のクリスマスプレゼントはな、みんなの心の中にあるものなんだぜ」
恵那の肩に手を置いて、良い話風と良い顔をで装う千明。
「せや、私お肉をプレゼントにしてまおー」
「あっ!!ずりーぞイヌ子!!」
反対に、手のひらをポンと叩いて、あおいはひらめいた。
どうやらこの前懸賞で当たったというお肉をプレゼントとして振る舞うらしい。
しかし、
「にくー!!」
「おにくーっ」
と野クルメンバーでそれはずるいと、ギャーギャーと言い合いが始まった。
「お肉って?」
「あおいさんが懸賞で当てたみたいなんだ。しかもかなり高級なやつ」
「おー、ラッキーガールだね」
何の事だろうと分からない斉藤さんへ俺が補足の説明をしてやる。
「そうだ!プレゼントのかわりにおもてなしするってどうかな?」
「おもてなし?」
三人で戯れ合いながら、各務原さんが一つの提案を持ち出した。
「例えば、あおいちゃんはお肉を使った料理でみんなをおもてなし。私は次の日朝ごはんを作ってみんなをもてなすとか!これだったら家から食材持ってくればいいし」
「キャンプで出来る遊び考えてくるとか?」
「あ、それありやなー」
「クリスマス気分に浸れるおもてなしとか?」

「確かに、物とかだけじゃなくてそういうのをプレゼントって言うのもありだよね」
『賛成ー!』
満場一致という事で、プレゼント交換ならぬ、おもてなし合いを皆でする事となった。
「一人はみんなのために!!みんなは一人のために!!ワンフォーオール、オールインワンだよ!!」
「……オールフォーワンね」
「オールワンワン?」
ドンッ!とみんなの前で堂々と言う各務原さんだったが、微妙に言葉が違う事を伝える。結局別の単語を口にしているが。

皆でお話をしながらしばらくして、斉藤さんが飼っている犬も連れていって良いかと言う話題となった。
そして今は愛犬のちくわの写真を見せてもらっている。
「あははっ、これ何やの斉藤さんっ!」
「あはははは、可愛すぎるよ!!」
その可愛さに皆癒されていた所、斉藤さんがスマホペンで何やらいたずらをしたらしい。
「あらたくんも見てみー」
「ん、…ははっ、確かにこれは可愛いね」
寝顔にスマホペンで加筆されたチワワの写真に思わず笑ってしまう。
「ちょっとあなた達!!こんな所で何やってるの!?」
談笑していた所で、背後からの声。それに皆が振り向く。
「鳥羽先生」
俺たちに声をかけて来たのは、産休で休んでいる先生の代わりに最近赴任された「鳥羽美波」先生だ。
「校庭で焚き火なんてして、火事になったらどうするんですか!」
どうやら、お湯を沸かす為に使っていた焚き火を注意しに来たようだ。

今更だが、確かに校庭で火を扱うのは危険かもしれない。
大垣さんらが手慣れたように準備をしていたので自然と疑問に思わずにいた。
「あ、先生。あたし達一応登山部の大町先生に許可取ってからやってます。野外活動サークルの活動って事で」
「えっ、そうなんですか？」
どうやらしっかりと許可は取っているらしい。
俺が来た時には、すでに他のメンバーは揃っており、火をつける寸前でもあったために、そういう手順を踏んでいた事は知らなかった。
さすが高校生。ちゃんと考えて行動しているのだなと感心する。
とはいえ、危険には変わりないという事で、一度焚き火を消し、鳥羽先生に連れられ、大町先生の居る職員室へと行く事に。

「大丈夫ですよー。最初のうちは私が指導しましたし」
「ですが…」
「まぁ、全く心配じゃない訳ではないですが、私も他の部の顧問がありますしねぇ」
ことの一連の話を聞いて、大町先生も鳥羽先生を説得してくれた。
大町先生も、大垣さん達の普段からの活動を見て安心だろうと感じていたのだろう。それでも、鳥羽先生はまだ心配をされているようだ。
すると、大町先生が何やら閃いた顔をする。
「そうだ。いっそ鳥羽先生が監督されたらどうです？」
「へっ!?」
「確か先生、まだフリーでしたよね!!」
「え!?先生が顧問やってくれるんですか!?」
「!!?」
大町先生の提案を聞いて、千明が目をキラキラと光らせる。
「いやー安心しました!!教頭へは私から言っときますね!!」
「!!?!!」
それを最後に大町先生は席を外し（結構なスピードで）、鳥羽先生と

俺たちは残される。
「わーっ、顧問がついたー！」
「やったー！」
みんなで両手をあげて喜ぶ。
俺と斉藤さんは野クルのメンバーではないが、一緒に手をあげて3人と共に喜びを分かち合った。
反対に鳥羽先生は不安げな表情を浮かべていたが、大町先生が向かった教頭先生の席からは、教頭自ら親指を立てて「頼みます！」と言ったようなサインが送られて来ていた。

「というのが、野クルの主な活動です！」
そして、もう一度焚き火をしていた校庭へと戻り、部長である大垣さんから野クルの活動内容について鳥羽先生へ説明をした。
「キャンプ、ですか」
「はい！今度の休みにも行くんだよね」
『ね～っ！』
各務原さんの言葉に皆も乗っかった。
メンバーも女子だけ、顧問の先生も女性という事で、さすがに肩身が狭く感じる。
「あ、次のクリスマスキャンプ。良かったら鳥羽先生もどうですか？」
「えっ、私もですか？」
どうやら早速、顧問として鳥羽先生にもキャンプのお誘いをする大垣さん。
「みんなっ！」
それと同時に、各務原さんが声をあげた。
「見てみて！リンちゃんから連絡きたんだけど、この『朝霧高原』って所すごく良さそう!!」
志摩さんから送られてきたＵＲＬを開いたキャンプ場のサイトを見せられる。
「朝霧高原かぁ～」
「楽しみだねー！」

「ここなら、富士山もバッチリ見えるで～」
「お風呂もあるんだね！」
「芝生が広がってて景色も良さそうだね」
　俺も含め、賛成の声があがる。
　これでキャンプの目的地が決まったようだ。
「（…朝霧だったら）ベーコンとビールよね」
「ビール？」
　会話を聞いて発言をした鳥羽先生にみんなの視線が集まる。
　そういえば、大垣さんの働いてる酒屋さんで「グビ姉」と言うあだ名がつけられているとか聞いたな。
「いえ、何でもないですっ！……あっ」
　５人の視線が集まる中で、鳥羽先生と俺の目があった。
「あの、小牧くんは男の子ですよね？」
「えっ、はい。そうですけど」
　どこをどうみたら俺が女子に見えるのだろう。
　それか、この中に男子がいる事に問題を感じているのかもしれない。
　そんな疑問を抱き、先生の次の言葉を待つ。
「せんせっ！」
「はいっ!?各務原…さん何ですか？」
　先生が言葉を続けようとした瞬間、各務原さんが挙手する。
「あおいちゃんと小牧くんはお付き合いをしてるんですっ!!」
「えぇっ!?そ、そうなんですか!!」
「はい！なので、二人のためにも小牧くんを一緒にキャンプに行かせてあげてくださいっ!!」
「なでしこちゃん……。先生私からもお願いします」
　あおいさんも先生の言葉に不安を感じていたのか、ハッキリと述べてくれた各務原さんを見て頭を下げた。
　それに続いて、大垣さんと斉藤さんまでもが頭を下げてくれる。そうして最後に、俺も頭を下げた。
「いや、あの私は別に反対をしている訳ではなくて」

「えっ？」
だが、先生からは予想していなかった返事が返ってくる。
「男の子一人だと、小牧くんが寂しくないですか？」
『あ』
先生という立場である鳥羽先生は、もしかしたら唯一の男である俺が今回のキャンプへ参加する事に反対なのかもしれないと思ったが、どうやら違ったようだ。
それを聞いて、他の四人もこちらに向き直す。
「そういや、イヌ子にさり気なく小牧に聞いといてくれって連絡するの忘れてたわ」
「すまんすまん」とうっかり顔で千明が謝った。
「あき。もう、さり気ないどころの話やないで」
それはごもっともである。
「なでしこちゃんもありがとうなぁ」
「ううん、私こそ早とちりしちゃったみたいでごめんなさい」
「いや、今の流れは俺も…というか、みんな同じ事考えると思うよ」
良かった。もしかしたら先生から止められるのかもと一瞬ひやりとしたが、逆に心配してくれていたようだ。良い先生である。
どちらにせよ、俺たちの事を想ってくれた各務原さんにも感謝しかない。一緒に頭を下げてくれた二人にも。
「俺は大丈夫です。友達も部活やら家族と過ごすとかで来れそうな人はいないですし。そもそも俺も誘って貰っている身ですので」
「そうですか。小牧くんがいいのであれば私から言う事はありません」
男一人で寂しくないかと言われれば寂しいかもしれない。
しかし、そんな事よりもあおいさんと過ごせる事と、こんなにも楽しい他のメンバーとキャンプができるのだから、きっと寂しさなんてある筈もない。
「それにしてもお付き合いですか。青春ですね…」
「へ？」
「い、いえっ、こちらの話ですっ」

鳥羽先生が俺とあおいさんを見て何か言っていたようだが、よく聞こえなかった。

今は、今度のキャンプへの期待で胸がいっぱいだ。

第六話「野クルへの勧誘？」

『うおおお～！』
青空の下、芝生が広がる高原にて若き男女の声が響き渡る。
「めっちゃ広ええええええっ!!!」
一際大きな声で、叫んでいるのは千明。
その後をあらたとあおいが追走していた。
こんなに天気が良くて、広い野原を見たら走りたくなるのも当然だ。現に釣られて走り出してしまっているのだから。
「ふがっ!?ギャー！」
「大垣さんっ!?」
「あき～！」
テンションが上がりすぎて足元が疎かになっていたのか、目の前で大垣さんの足がもつれて、盛大にコケた。
それはもうゴロゴロと転がって行ってしまうほどに。

「せんせーテント張る場所決まりましたー」
自然と戯れてボロボロとなった大垣さんを二人で介抱し、キャンプ場入り口の駐車場で待つ鳥羽先生に報告する。
「じゃあ私は荷物を運んでおきますので、3人は受付をお願いします」
『了解でーす』
「あ、先生。1人じゃ荷物降ろすの大変でしょうし、俺手伝いますよ」
先生から指示を受けたが、俺たちの荷物がメインのため率先して荷物運びの手伝いを買って出る。
それに、ここまで車も運転してもらったのだ。少しでも楽をしてもらいたい。
「ありがとうございます。それじゃ、お願いします」
「はい。ごめん、あおいさん大垣さん。受付お願いします」
相談も無しに本来の役割を下りた事を二人に謝罪する。
「いいっていいって。小牧こそ、荷物運び頼むな」

「受付はうちらに任せときー」
「あっそうだ。先生っ！」
　二手に分かれるところで千明が先生に声をかけた。
「さっき道の駅で超でっかいベーコン買ってましたよね。今日はあれでお酒飲むんですか？」
「へっ!?」
　そういえば、キャンプ場に向かう途中に寄った道の駅で、先生が何か買っていたようだった。そうか。あれはベーコンだったのか。
　大垣さんの言う通り、おつまみにするつもりなのだろう。
「いえ、お酒はっつ…夜に少し…、って見てたんですか??」
「私達に遠慮しなくてええですよ。先生もキャンプ楽しんで下さい」
「あなたたち……」
　そうして、二人は受付をしに建物の方へ。
「私達も荷物を運びましょうか」
「はい。先生もお疲れでしょうし、じゃんじゃん頼って下さい！」
「ふふっ、お願いしますね」
　再び先生の車へ乗り込み、キャンプサイトの中へと車を走らせた。

「これで全部、ですね」
「小牧くんお疲れ様です。すみません、結局全部降ろしてもらって」
　３人で決めた場所に車を停め、車の荷台に積んでいたバッグや銀シート、折り畳みテーブルに椅子、その他キャンプで使用する荷物を降ろした。
　そこまで量も多くはなく、一つ一つが重いわけでもなかったので、俺が先生に言って颯爽と終わらせた。
「これくらい全然ですよ」
　感謝の言葉をかけてくれた先生に、平均的な力こぶを作って見せた。
「やっぱり男子部員がいると、あの子達も助かりますよね」
「あ、先生。俺部活には入ってないですよ？」
「えっ、そうだったんですか？私はてっきり」

「今回はあおいさんに誘ってもらったので」
鳥羽先生は野クルの顧問になってくださったばかりだ。だから、この前の作戦会議の時にあの場にいた俺の事も部員だと思い込んでいたようだ。
「そうですか。入ろうとは思わないのですか？」
「そうですね～」
正直考えた事がなかった訳じゃない。
今現在、俺は帰宅部だ。高校に入学した時点では、バイト一筋だったし、特別やりたい事も他になかったので部活には入らずにいた。
今のバイトもそれなりに楽しいし、今ではあおいさんもいるから続けている。
でも、目的だった教習所にも、バイクを買う事も叶ったので、部活に割く時間がないわけではない。
ただ、これから部活をやるにしても、入る部は限られる。特に、運動部なんかはこの時期に入部したとしてついて行けるかどうか。
かと言って、知り合いが皆運動部であるため文化部に当てもない。
となれば、あおいさんや最近仲良くなった大垣さん、各務原さんのいる野クルはピッタリだと俺も思う。
「誘ってもらったら考えます。でも、まだ自分からは言えないですよ」
「どうしてですか？皆さんなら喜ぶと思いますけど。現に今日だって」
「俺、キャンプ初めてなんです。野クルはあくまでキャンプをする部活。なのに、キャンプをする前から入部って、まるで『彼女がいるから』って理由だけで入るのと大差ないと思うんです。ちゃんとキャンプを好きでやってる各務原さん達にも失礼だ」
「……」
鳥羽先生は、黙って話を聞いてくれた。
「確かに、キャンプに興味はありました。けど、入部するかどうかは今回のキャンプを終えてから決めます」
入学してから、あおいさん達が野クルを作った事は知っていた。
なにより、野クルが出来た頃にはすでに好きになってたんだ、彼女

の事を。
そんな子が興味を持つ事なら、気にならないわけがなかった。
つまり、キャンプ自体は付き合う前から注目していた。
だって、家が隣でクラスも一緒。
しかも、会って間もないのに分け隔てなく接してくれてたんだぞ！
そりゃあ好きになるだろ!!
だから、あおいさんが困っていそうな時は力になろうとしたし、自分からも話しかけるようになったんだ。
正直、中学までの自分だったら女子の為にあそこまでやらなかったろうな。
「…そうですか。小牧くんは真面目ですね」
「ははっ、よく言われます」
（でも、大垣さん達は今のあなたが入部をすると言っても、ちゃんと考えて決めたのだろうと分かってくれると思いますけどね）
「分かりました。では、私は車を駐車場に戻して来ますね」
「はい。俺も散歩がてらあっちのトイレに行ってきます」
数百メートル離れた小屋を指差して俺は言う。
「小牧くん」
足をそちらへ進めようとしたが、先生に呼び止められて振り返る。
「私はまだあなた達と知り合って間もないですが、野クルの顧問である前に、あなた達の先生です。だから、何かあれば相談してください」
「ありがとうございます」
そうして、今度こそ小屋へ向けて歩き始めた。
他の先生と比べて歳が近いせいだろか。
鳥羽先生の言う通り、まだ少しの時間しか話した事ないというのに、すごく話しやすい。
そう思った。

一方、あおい＆千明コンビ

「風呂付き富士山付きのナイスなキャンプ場が」

「こんな所にあったなんてなぁー」
ロビーで受付を済ませ、景色を見ながらあらたと鳥羽先生が待つキャンプサイトへと向かう。
駐車場を通れば鳥羽先生の車が。
荷台に荷物が置かれてない所を見ると、すでに荷下ろしは済んでいるみたいだ。
「なー、イヌ子」
「なんやー？」
「小牧ってさ、野クルには入らないのか？」
砂利道を抜けて芝生に入った所で、立ち止まる千明。
「どうしたん急に」
あおいは振り返って、足を止めた。
「今日も来てくれたし、キャンプ道具まで買ったんだ。せっかくならこのまま入部して欲しいと当然思うだろ」
「でも、うちの部に入るとは限らんと思うで」
あらたは今日のキャンプを誘った時からすごく楽しみにしていてくれたし、キャンプにも関心を持ってくれていた。
それは、あおい自身も十分感じてはいた。
「イヌ子だって一緒に部活やりたいとは思わないのか？」
意外にも、後ろ向きなあおいの発言に少しばかり違和感を覚え、質問を重ねる。
「私はあらたくんが入部してくれたら嬉しいし、キャンプするのも楽しいとは思う。けど、それは私やのうて、あらたくん自身が決める事やから」
「ん～。そういうものかぁ～？」
納得いかない様子の千明。
私かて、あらたくんとは一緒にいる時間も増えるし、もっとキャンプが楽しくなる。
そういう考えは浮かばんでもない。
「なら、イヌ子から頼んでみればいいんじゃないか！それならきっと、」

「あき。もし私があきの言う通り、あらたくんに入部を勧めるお願いをしたら、どうすると思う？」
「そりゃあ前向きに考えてくれるだろ！」
「せや。あらたくんは私が困ってたり、何かあれば助けてくれる。たとえ、嫌な事でも力になってくれると思う」
本当に彼は優しい。いつも優しい言葉をかけてくれて会う度に幸せな気持ちになる。
今まで何度その優しさに救われた事か。
「だから、そういう彼の優しさを利用するような事だけはしたくないんや」
きっとあらたくんは、私からお願いしたら野クルに入ってくれるとは思う。でもそれは、あらたくんがキャンプを好きかどうかとは別の話や。
「イ、イヌ子。あたしは別にそんなつもりじゃっ！」
「分かっとるよ。あきが私のためにも考えてくれている事。でもな、うちらが好きなキャンプは、ちゃんとあらたくんにも自分の意思で好きになって貰いたいんよ」
あきはきっと、あらたくんが入部する事で私が喜ぶ事や、もっと賑やかな部活になるよう部長としてしっかり考えてこの話をしてくれたんやろな。
「イヌ子、悪い。そうだよな。ちゃんと小牧にもあたし達がやってるキャンプの楽しさを分かってもらわないとな」
「せや。だから、私からは言わんって決めてたんや。私の方こそごめんなあき」
「いや、別にいいって。あたしの方こそごめんな。意地でも入部希望者増やさなきゃいけないって訳じゃないもんな」
どちらが悪いとかではないが、共に謝罪をする。
そして、二人で笑顔を見せ合い、再び、キャンプサイトの中を進んでいく。
「イヌ子って、案外そういうところだけは真面目だよな」
「よく言われるわ」

家では妹のあかりにも似たような事を言われたなと思い出す。
「でも、このキャンプが終わった後、それとなくあたしから聞くっていうのはダメか？元々、斉藤にも聞こうかと思ってたし、イヌ子からじゃなく、あたしからとかなら小牧も部活については話しやすいと思うしさ」
「う～ん。あらたくんの初めてのキャンプの感想は知りたいし、その流れからやったら自然な感じやろうしなー。…いいんやない？」
確かに、あき相手なら私から聞かれるよりかはええかもな。たぶん、あらたくんも自分から入部の話しはしなさそうやし。そのくらいならええか。
正直、自分でああは言っても、彼自身が入部したいかどうかの答えは知りたい。
「分かった。なら、この話はもう終わりにしようぜ！途中から重い感じになって、なんか息苦しくてさ」
「せやなー。私も楽しいキャンプに重い空気を持ち込むのは嫌や～」
「んじゃ！改めて今日から二日間、クリスマスキャンプ楽しもうぜ～」
「おー!!」

そして再び、あらた視点

「ごくごくっ」
「……これは」
御手洗いを済ませ、荷物を置いた場所へと戻ると、受付から戻ったばかりのあおいさん達がいた。
しかし、先程親身になって話を聞いてくれていた先生はというと。
「飲むの早いっすね先生」
「まさかもう始めてしまうやなんて」
すっかり晩酌ならぬ、昼酌を始めていた。
お酒が入ってても相談は聞いてくれるのだろうか。
少し、先生に対しての心配を抱いたあらたなのであった。

第七話「じゅかいの牧場！」

ジュー、ジュー、
大自然広がる青空の下、ベーコンの焼ける音と食欲をそそる香ばしい香りに包まれる。
時間はお昼の１２時を過ぎたばかりだ。
夜になるまでまだ先は長いというのに、鳥羽先生はビールを片手につまみの厚切りベーコンを調理にかかっていた。
「先生に車出してもらおう思うとったんやけどなぁ…」
あおいさんと大垣さんの二人が肩をガックしと落とす。
「何か買い出しにでも行くの？なら俺が、」
二人と別行動だった俺は何か足りないものでもあったのかと思いながら、ただただ先生のお酒への執着心に驚かされるばかりだ。
「あー、違う違う。現地集合の時間より早く着きすぎただろ？ちょっと時間潰そうと思ってな」
「すぐ近くに、じゅかいの牧場ってあったやろ？そこに牧場スイーツ食べに行こうとしてたんや」
「そういう事か。確かに集合までまだ２時間近くあるもんね」
キャンプ場に来る途中に牧場があった事を思い出す。
「だから先生の車でって思ったんだが、これは歩いていくしかないな」
「時間もあるし、いいんやない？あらたくんも一緒に行くやろ？」
「うん。せっかくだから、俺も行こうかな」
ちょうどお昼の時間というのと、先生の焼いてるベーコンのダブルパンチ。少しばかりお腹が空いてしまった。
ここは有り難くお供する事に。
「いってらっしゃーい」
鳥羽先生に見送られ、３人で牧場へと出発した。
それにしても、先生はこんな時間からお酒を飲んで大丈夫なのだろうか。
まぁ、先生にとっても今日は休みだし、英気を養うという点ではい

いのか？
お酒の事はよく分からん。

『うーーーまぁ～～～っ!!』
キャンプ場を出ておよそ１５分。
車で来た道を戻り、牧場の飲食店が入ったエリアで早速スイーツを堪能する。
ほのかに感じる新鮮な牛乳の風味と苺の香りが口一杯に広がる。
一口食べただけで、普段食べているアイスとは違う事が分かった。
一つの小さなテーブルを３人で囲み、各々自分が頼んだスイーツに賞賛の声を上げる。
ちなみに俺は、牧場の牛乳と近くの農家で採れた新鮮なイチゴで作られた苺ソフトを頼んだ。
「暖房きいてる店内で食うアイスうまー！」
「牧場来たらアイス食わななー」
年末ともなると、外の寒さは結構堪える。
それを癒す温かな空間に美味しいものと来たらこれはもう天国と言っていい。
「もう思い残す事はありません」
「あらたくん。まだキャンプは始まったばかりや…」
そうあおいさんに諭されるが、
「あー。動きたくなくなってきた」
「なんかデジャヴやぁー」
と、二人とも満更ではないようで俺と同じく、今のこの時間を満喫していた。
「あらたくんのそれは苺ー？」
「そうだよ！あおいさんも良かったら食べてみる？すごくおいしいよ」
「ええの～？じゃあお言葉に甘えて、」
「はい」

「！」
そう言って俺は自分のスプーンでアイスをひと掬いし、あおいさんの口へと近づける。
「小牧!?…よくもまぁ平然と」
「え？」
大垣さんが、すげぇなお前、と俺を見る。
あおいさんも少し戸惑って見えた。
「……あ」
これ、いわゆる「あーん」ってやつだ。
家でひかりにもたまにしてあげてた為か、自然とこんな事をしてしまっていた。
結構ひかりもスイーツには目が無いからな。
自分が食べている物と違う物の味が気になるらしい。よく家とか外食などでせがまれるのだ。
とはいえ、大垣さんに指摘されるまで気づかなかったのは事実。
そもそもカップルとしては、当然の行為なのだろうが、大垣さんや他のお客さんの目もある以上は、あおいさんもさすがに恥ずかしいよな。
すでに大垣さんには見守られている状況なのだが。
「あ…あーん」
「(おっ、イヌ子食べるのか!?)」
一度スプーンを引っ込めようとした瞬間。
あおいさんが口を開いて差し出したスプーンに迫る。
そして、
「はむっ」
しっかりと口を閉じて、スプーン上にあった苺ソフトを食した。
「…うん。苺味もウマーやなぁ」
「それは良かった」
そう言ったあおいさんの顔は少し赤かった。
やっぱり恥ずかしかったよな。まさか本当に食べてくれるとはな。
嬉しさの反面、恥ずかしい思いをさせた申し訳なさでよくわからな

い感情になる。
ひとまず事を終えたので安心した。
「じゃ、私のもやるわー」
「えっ」
ふぅ、とひと呼吸置いたのも束の間。
今度はあおいさんが俺に自身のアイスを食べさせるという。
「はい、あ～ん」
そして定番のセリフと共に、自身のバニラソフトを先程の俺と同じようにひと掬いスプーンでとって差し出してくる。
なんか嬉しそうな顔してるな。
もしかして、実はさっきのに怒っていて、仕返しにからかっているのか？
いや、それはないか。
いつものホラ吹き顔ではなく目の前には普段の優しいあおいさんの表情が俺が食べるのを待っている。
「あ、あー……ん」
ゆっくりと近づいて、ありがたくアイスを頂く。
もしかして、あおいさんもこういう事やりたいと思ってたのかな。
余計に恥ずかしくなってきた。
店員さん、ちょっとエアコン効き過ぎじゃないでしょうか。
「おいしい？」
「う、うん。やっぱり定番のバニラも美味しいね」
正直、恥ずかしさで殆ど味はしなかった。
（まぁ、見た？奥さん）
（うふふ、若いっていいわねぇ）
（いいなぁ～）
（リア充め）
（見せつけやがって！）
周囲から色々な声が聴こえてくる。
はっきりと聴こえている時点でコソコソ話ではないのだけれど。
「お前ら、せめてあたしがいない所でやってくれよ。こっちの方が照

れる」
「なんかごめんね。大垣さん」
「言うなっ！彼氏のいないあたしには眩し過ぎただけだ!!小牧が天然彼女喜ばせ野郎なのは、今に始まった事じゃ無いしなっ!!!」
「えー…」
　迷惑をかけてしまったかと思って謝罪をしただけなのに、酷い言われようだ。
「あきは大袈裟やて」
「イヌ子もイヌ子だぞっ！ここぞとばかりに見せつけやがって！」
「今のは不可抗力やー」
「何おぅ！嬉しそうな顔してたくせにっ！」
「なっ！え、ええやないの別にっ！」
　ギャーギャーといつもの野クルで見る風景がバージョンｉｎ牧場で繰り広げられる。
　止めに入ろうかとも思ったが、原因が自分にあるために、火に油を注がぬよう静かに自分のアイスを食べ進めた。
　ウマっ!!

「う～、寒ぅ～」
「暖房あるとこおったから、なおさら寒いわー」
　スイーツを堪能し、フードエリアを後にする。
　どうやら、各務原さんと志摩さんも予定より早く到着したようで、すでにキャンプ場内にいるとの連絡があった。
「戻ったら早速焚き火するズラー」
　ポケットにカイロを仕込ませていたとはいえ、やはり外に出ると身体全体が冷える。
　焚き火…、この前の校庭でやったものよりも臨場感があるんだろうな。楽しみだ。
「あ、こんな所に薪売っとる」
「キャンプ場にも売ってたけど、ここで揃えてく人もいるのかもね」

通って来た道を戻ろうとしていると、建物の角に積み重なった薪が置かれている。
「ていうか、こっちの方が安いかな。もしかして」
「確かキャンプ場は1束４３０円やったわ！」
薪が置かれている所には、1束３００円の貼り紙もあった。
元々キャンプ場で買う予定だったが、同じ1束なら、こちらの方がお買い得である。
「よし！それじゃ、ここで買ってこうぜ！」
「でも持って帰るのしんどいで、これ」
「俺が持つよ」
俺が早速前に出て1束を抱き上げる。
「うっ」
思ったよりも重いな。がんばっても2つが限界か？
よくよく見ると、1束7キロの表記が書かれている。
俺の様子を見てかあおいさんが優しく言う。
「あらたくん無理せん方がええよ。いくつ必要になるかも分からんし」
「確かに、ちょっと厳しいかも」
その言葉に甘え、一度足下に薪を置いた。

「じゃー先生呼んで車で運んでもらう……のは無理か」
大垣さんがスマホを取り出し、鳥羽先生に連絡を取ってくれようとする。
しかし、飲酒済みの先生の顔を思い出し、3人とも断念する。
「んー他に何かいい方法は……はっ、志摩さんはどうやろ！」
「ナイスだイヌ子！さっそくしまりんに聞いてみよう!!」
そうして、唯一原付でキャンプ場に訪れていた志摩さんを頼る事に。
ーー待つ事数分。
「志摩さん。薪何束あった方がええと思う？」
「1束2～3時間だから、3束くらいじゃない？」

大垣さんからの連絡ですぐさま駆けつけてくれた志摩さん。
俺でさえ夏の終わりに免許を取ったばかりだ。
それも、女性でこの時期に原付限定とはいえ、免許を持ってるなんて、よほど旅が好きなんだな。
確か学校にも原付で通っているのだとか。
ヘルメットを被っている彼女を見て、ふとそんな事を思った。
「あ、ここは私払うよ。夕飯ごちそうになっちゃうし…」
「まじで!?」
「ホンマに?ありがとー志摩さん!」
すると、志摩さんが薪の支払いを買って出てくれた。
「あの、志摩さん」
「ん?あぁ、小牧くん、だっけ」
志摩さんとはクリスマスキャンプ前の登校日に図書室を訪れた際に挨拶をさせてもらった。
まぁ、普段あまり喋る子ではないようで、その時もそんなに言葉を交わす事はなかったけど。
「ありがとう。流石に男の俺でも重かったから。それに薪代まで」
「ううん、それになでしこから聞いてたから。おもてなし?するんでしょ。なら、私からはこれで」
大垣さんが持つ薪を指差して言った。
「大将!!持ち帰って家宝にさせて頂きやすっ!!」
「この後燃やすんだよ」
大袈裟に頭を下げる彼女にツッコミをする志摩さん。大垣さんも、さりげないボケをするのがムードメーカーたる所以だったりするのだろうか。
「それにしても、最近図書室に来てた人がまさか今日のキャンプの参加者だったとはね。しかも犬山さんの彼氏って…世間狭いな」
「はは、だね」
「でも、アウトドアの本借りてたし興味はあるのかなとは思ってたけど」
この前志摩さんと図書室で話した日は、ちょうど俺が借りてた本を

返却しに行った時だった。
「改めて、今日と明日はよろしくね。志摩さん」
「うん、よろしく」
そして、会計を終えて志摩さんの原付へと積み込みをする。
「よし、これで全部っと」
大垣さんが最後に原付の足場に薪を立てて3つの薪の束を乗せた愛車に志摩さんが座った。
3束って事は、21キロ程あるわけだけど、大丈夫だろうか。
「いやー運んでもらうばかりか金まで出してもらって、涙がちょちょ切れるってなもんでェ!!」
「それじゃ、私先に戻るね」
一足先に、志摩さんが原付を走らせ牧場を出る。
「あれっ?しまりーん1束忘れてるぞーっ!」
大垣さんが置いたはずの薪が1束駐車場に残っている事を、急いで志摩さんに伝えた。
「重すぎるからそれは大垣が持って来てー」
「えっ!?あたし!!?」
確かに、あの重さでは無理もないな。
かと言って、俺がいるのに女の子に持たせるわけにはいかない。
「大丈夫だよ大垣さん。俺が持つから」
「小牧〜〜」
膝をついて崩れ落ちる大垣さんの前に屈んで声をかける。
顔を上げた大垣さんが俺をうるうるとした瞳で見る。
そんな泣かんでも。
「あっ、小牧くんはダメ。それは私を呼びつけた大垣に持たせて」
「えっ、でも、俺手空いてるし」
意外と手厳しいな志摩さん。
俺が薪に触れた瞬間、まさかの阻止をされる。
「なら、犬山さんと手でも繋いでキャンプ場まで戻ったら?」
『!?』
そんな事を言い残して志摩さんは再び原付を走らせた。

見かけによらず大胆な事を言う子だな。
ぎゅっ。
すると、、不意に左手を優しく握られる感触が。
「志摩さんからのお達しならしゃーないな。ほな、このまま戻ろっかあらたくん」
「あおいさんっ、…でも」
「私と手繋ぐの…嫌なん？」
にっこりと笑って手を繋いできたあおいさんの表情が曇る。
「そんなわけないよっ！超嬉しいし、俺も繋ぎたかったよ!!」
その顔を見て、泣かせてしまうかもしれないと思い、すぐさま俺も握られ手をしっかりと握り返す。
そんな顔されたら断れる訳がないじゃないか。
むしろ自ら手を繋いでくれて大変光栄です。
「よかった、私もや。ほな行こかー」
「うん」
「（志摩さんも、まさかこんな粋なことしてくれるやなんて）」
そのまま志摩さんの後を追うように駐車場を後にする。
先程まで寒かったのに、一気に体温が上がった感じがした。
よし、この現象を『天然産の恋愛カイロ』と名付けよう。
そんな野暮な事を考え、景色を楽しみながら2人で来た道を戻っていく。
一方。
「……あたしは？」
冬の寒い風が千明の前を落ち葉と共にヒューッと通り過ぎて行った。

第八話　「全員集合！」

「うぐぐぐ」
　壮大な自然と、舗装された道路との間にあるガードレール横を歩きながら、必死に薪を運ぶ千明を心配そうにあらたが振り返る。
「本当に良かったのかな。俺が持たなくて」
「バイトでお酒運んだりして力付いてきた言うとったし大丈夫やと思うで」
　手を繋いで隣を歩くあおいさんが言うように、結構酒屋さんは結構力を使う仕事だとスーパーのパートさんから聞いていた。
　確かに、俺たちが働くスーパーでもお酒は置いてるし、何度も運んでいたからその大変さはよく分かる。
「それに本当に無理なら志摩さんも頼まんと思うし、あきだって助けを求めるはずや」
　そういえば、大垣さん自身は重いとは言っていても、助けてまでとは言っていなかったな。
「なんか悪いなぁ。バイトだと若い男子が率先して重いものって運ぶから、こうして見てるだけっていうのも」
「そんな事あらへんよ。それに、あらたくんにはいつも助けられてるし、頼りすぎるのも良くないやんか」
「そんな。俺なら全然平気だよ？」
「あかんでー。あらたくんの事は荷物運びとして呼んだ訳やないもん。一緒にキャンプを楽しみたいと思ったから誘ったんよ」
　そのあおいさんの言葉を聞いて大事な事を思い出したような気がした。
　男が1人ということもあり、なんでもやらなきゃと知らぬ間に手伝う事ばかり考えていた。
「そうだね。じゃあ、今回は大垣さんに任せよう」
「せや、キャンプはまだまだこれからやであらたくん！」
　そうして、時折り大垣さんを気にかけながらも、無事キャンプ場ま

で戻って来たのでだった。

「あ、来た来た」

「おー、みんな集まっとるねー」

鳥羽先生と共に荷物を降ろした辺りには、先程手伝ってくれた志摩さん、それに各務原さんも斉藤さんも集まっていた。

鳥羽先生はいびきをかきながら帽子やら毛布やらでなんかぐちゃぐちゃになっている。

それにしても、みんな相当楽しみだったのか予定よりも早くに集合する事ができた。

「おまたせー」

「三人共おはよー」

「おはよう斉藤さん」

「ぜぇー、はぁー、お、おはっ…ぜー、ぜー」

薪を降ろした大垣さんはすでに虫の息だった。

「おっ！お二人さん、手なんか繋いじゃってお熱いですな～」

「せやろ～。牧場からずっとやもんねー」

「う、うん」

俺とあおいさんが手を繋いでいたのを見て冷やかしてくる斉藤さん。

流石はあおいさん、からかい慣れているからなのか動じていない。

「名残惜しいけど準備もしなきゃやし」

「そうだね」

そうして一度手を離す。

あおいさんのいう通り少し名残惜しいけど。

「各務原さんは何してるの？」

何故か彼女は、先生が座る椅子の下を膝をついて覗き込んでいる。

「ちくわがイスの下から出てこないんだよぉ～」

「ちくわ？ほんとだ丸まってるね」

同じくしゃがんで中を見せてもらうと、横になって尻尾をふりふりと可愛く振る生き物の姿が。

そういえば、斉藤さんが愛犬を連れてくるという話だったな。
実際に見てみると、とても愛らしい。
「そいつ狭い所好きなんだよ」
斉藤さんが、しょうがないなぁ、と言った顔で説明してくれる。
「確か、チワワって元々狭いとこが好きな習性なんだよね」
「へぇー、そうなんだ」
「良く知ってるね小牧くん」
「うん。いとこの家で飼っててさ」
そんな話をしていると斉藤さんが鞄からちくわのおやつを出す。
「ちくわー、おやつだぞー。ほらほらソーセージ」
ひょこ！
「あっ！出たっ!!」
「ウサ耳や!!」
「何故にうさぎ？」
そんな疑問を抱いたが、他のみんなはちくわの可愛さに夢中である。
「なでしこちゃんこれ持って」
「え？」
すると、おやつが各務原さんに手渡される。
「全力ダッシュ!!」
「えっ？えっ？うん!!」
そうして斉藤さんの掛け声で各務原さんが走り出し、ちくわがそれを追いかける。
「わーっ！」
「食うか食われるか。弱肉強食だよ、なでしこちゃん」
「楽しそうやなぁー」
あっという間に一人と一匹は高原の向こうへと駆けて行ってしまう。
「んじゃ、なでしこが弱肉強食ってるうちにテント立てちまうぞーっ」
『おーっ！』
いつの間にか復活した大垣さんの提案により、テントの設営が始ま

ろうとする。
「わーっ」
ていか、各務原さんはあのままでいいのだろうか。

とまぁ、そんなこんなでテントをさくっと設営。
みんな手慣れているからかあっという間に設営が完了し、複数のテントが並ぶ。
おお、実にキャンプっぽい風景だ。
俺の使うテントもあおいさんに手伝ってもらい、簡単に建てる事が出来た。
「斉藤さん。それがこないだ言うてたシュラフ？」
「うん、そうそう」
「俺も見ていい？」
「もちろんいいよ～」
異性の私物である為、一応の確認を取る。
「うわ！暖か!!ウチらのとは段違いやん!!」
「うおっ！ほんとだ！しかも低反発でふわふわしてる」
これが5万円もするダウンシュラフ…。
『いいなぁ～～っ』
大垣さん、志摩さんを含めた4人で斉藤さんに羨ましいとの視線を向ける。
「そうだリンの道具も見せてよ」
「いいけど、別に普通だぞ」
「俺も見てみたいな。ベテランの道具」
「私もぉ～」
先にテントを建てていた志摩さんは、俺たちがいる所より少し離れた場所にキャンプ道具を広げていた。
「おおっ!!これ暗いとこでも簡単に設営できるっていういいテントじゃん!!」
「このイスはむっちゃ軽くて小さなるやつやー!!」
「登山とかで使うコンロも持ってんだね」

着いてみると、どれも目を惹く道具ばかりで皆興味深々である。
かという俺もその一人だが。
「どれもコンパクトにできるし、バイクに乗る時は運びやすそうだね」
「うん。元々おじいちゃんから貰ったキャンプ道具ばかりだし、本人もバイク乗りだったからさ」
「そうなんだ。家族とはキャンプしないの？」
「私は基本ソロキャンプだから。小牧くんこそ、持って来たテントかなり良いやつだったみたいだけど」
「うちも両親がアウトドアでさ、昔使ってたやつなんだ」
三人が道具に触れて楽しむ一方、志摩さんとの会話が広がる。
普段話さないタイプのようだけど、好きな事であればこうして会話が続くのかもしれないな。
「なーなーイヌ子さんよ」
「何やろあきさん」
「お宅の旦那が他の女性と楽しそうに話しておりますぞ」
「あらたくん…、私というものがありながら」
じとーっとした視線を向けられ、そんな話が耳に入って来た。
「あ、犬山さんごめん、私そんなつもりは…」
「大丈夫だよ、志摩さん」
「えっ？」
「よく見て、あの二人の目。あれは嘘をついてる時の目だから」
「……うん」
完全に二人は俺たち、特に俺をからかおうとしているのだろう。
それに、あおいさんはそこまでやきもちを妬く子ではない。
まぁ、少しは妬いて欲しいけれど。
「男の子があらたくんだけやしな。必然的に喋るのは女の子だけやから、なんやからかいたくなってもうた」
「だよなー。ちょっと前の小牧だったら騙せたと思うんだけどなぁ～」
そして二人は何故か不服そうに冷静に対処したことへの不満を述べる。

「それより、今は志摩さんの道具を見にきたんでしょ？」
俺はそんな二人に途中だったキャンプ道具拝見の続きを促す。
というか、俺もまだちゃんと見ていない。
「こうしてみると、俺もアウトドアのイス欲しくなるなぁ」
「あらたくんも？私もや！バイト代入ったら一緒に買いにいかへん？」
「いいね。色違いとか良さそう」
「せやね！楽しみやなぁ～」
先程あおいさんが気になっていたイスを改めて見てみると、とても座り心地が良さそうである。
確かにキャンプ場でのんびり過ごすには必須アイテムとなりそうだ。
「イヌ子のやつ、ちゃっかりのろけてんじゃねーか」
「ほんと二人仲良しさんだよね～」
「（これが恋人同士の会話）」
それを見て三人は、そんなゆるい二人の空気に当てられていた。
「まってよー！ちくわー!!」
そんな空気とは裏腹に、先程から野を駆け回っていた各務原さんとちくわが帰ってきた。
「はぁ、はぁ。ちくわ早いよー」
「なでしこちゃんお疲れ様～」
そんな彼女に斉藤さんは労いの言葉をかけてやる。
「お腹も空いたぁ～」
ぐぅぅっと、各務原さんのお腹が鳴る。
「さっきスモア食べただろ」
「走り回ったらお腹空いちゃったんだよリンちゃ～ん」
「くっつくな」
ぐりぐりと志摩さんのほっぺたに自身のほっぺたを擦り付ける。
この二人も仲が良さそうだ。
「じゃ、戻ってお茶でもしようぜ！」
『さんせー！』

そうして、一旦最初に建てた場所へと戻ることに。
イスで寝ている先生も長時間ほったらかしにしておくわけにもいかないしな。

「私ここあ持って来たよ」
「私はコーヒー持って来たぞ」
皆が飲み物の準備を進めている中で、俺も準備していた物を鞄から取って来た。
「良かったらこれ、俺からみんなに」
『うわぁー!』
梱包したクッキーを皆へと配る。
ちゃんと一人一人用に袋に詰めてリボンまで付けたクリスマス仕様だ。
「もしかしてこれ、手作りかっ!?」
「まぁ、一応。俺からのおもてなしって事で、お茶菓子として作って来たんだ」
一番驚いていた大垣さんに今回用意して来た意図を伝える。
「あらたくん、料理上手やもんね」
「小牧くんも料理とかするんだ!?」
各務原さんは確かキャンプご飯を作るのが好きと言っていたし、普段から家でも作ったりしているのかもしれない。
「うん。うち両親共働きだし、妹もいるから俺が夕飯作ったりする事もあるんだ」
「女子力高っ」
ぼそりと志摩さんが言う。
褒め言葉だよな？一応。
「犬山さんは小牧くんが料理できるの知ってたんだ？」
「うちの妹が熱出した時なぁ、手伝いに来てくれて色々作ってくれたんよー」
「へぇ～」
あおいさんの家で親御さんが居ない時に、あかりちゃんが熱を出し

た。その際、あおいさんに頼られて連絡を貰った事を思い出す。
　あの時は好きな子に頼られたのもあって、気合が入り過ぎたお粥や料理を振舞ったのを覚えている。
「でも、あらたくんが作ったお菓子を食べるのは初めてや」
『いただきまぁーす』
　飲み物も淹れ終わり、お茶会が始まる。
「このクッキーうめぇっ!!」
「ほんとだ。ココアともよく合うね」
「これが女子力…」
「チョコの香りが口一杯に広がってウマーやなぁ」
「小牧くん!!すごく美味しいよ!!!」
　良かった。五人とも口にあったようだ。
　早起きして作った甲斐がある。珍しく早起きしたひかりに見つかり、ひかりにもあげたが美味しそうに食べていた。
「あらたくんほんま料理上手やね！」
「そうかな？」
「謙遜する事ないで。私も夕飯作るのがんばらなっ！」
　そういえば、今夜はあおいさんが自分で当てたお肉で作った料理を振る舞ってくれる。
　あおいさんの手料理を食べるのは初めてだ。すごく楽しみである。
「あおいさんは今晩何作るの？」
「せやねー。今日はクリスマスちゅー事で」
　ごくりと皆も固唾を飲み、耳を傾ける。
「すき焼きや」
「そっか。すき焼きかぁ」
「すきやき…」
「スキヤキ…」
「すき焼き…」
「スキヤキ…？」
『(何故にＳＵＫＩＹＡＫＩ???)』
　あおいさんの言葉に皆頭にはてなが浮かんだ。

第九話　「すき焼き！」

キレイな赤富士と夕焼けを見ながら、暗くなる前に夕飯の支度が始まった。

まず、鍋に牛脂を広げ牛肉に軽く火を通す。

次に砂糖、醤油、酒を入れてひと煮立ち、具材はえのき、椎茸、しめじ、まいたけ、なめこ、エリンギ、きくらげ、松茸、マッシュルーム…。

「キノコ鍋作ってんのか？」

あおいさんが説明をしながら料理を始めた所、当初のすき焼きとは離れた具材が出て来た。

（本当の）具材は椎茸、えのき、ネギ、焼き豆腐、しらたき、春菊を乗せたら蓋をして暫し待つ。

「正統派なすき焼きってレシピだね」

「関西風やでー」

正しい材料を聞いて、ｔｈｅすき焼きといった感じのレシピだなと思った。

「あき、スキレットでこの玉ねぎ炒めといてくれへん？オリーブオイルとニンニクで」

「うん？何かもう一品作んのか？」

「まぁ、そんなトコや」

そうして、大垣さんも自身の持ってきたスキレットで調理にかかる。

「俺も何か手伝おうか？」

「あとはあきがやってくれてる玉ねぎだけやし、大丈夫やで。すき焼きも煮込めば終わりや」

そもそもすき焼き自体、人数を割く料理でもないしな。具材も事前にカットして来たみたいだし。

「やっぱり暗くなってくると冷え込んでくるもんやなぁ」

「高原だからね。これからもっと下がるかも」

「あ、あらたくんありがとうな～」
ぐつぐつ煮込まれるすき焼きを見ているあおいさんにブランケットをかけてやる。
山の上という事もあり、日中に比べて気温がだいぶ低くなり始めた。
「みんな、こうするとぬくいですぞ。ふひひひ」
「出たな怪人ブランケット」
ブランケットで体全体を覆い、隙間からひょっこり顔を出す各務原さん。
志摩さんの言う怪人ブランケットってなんだ？
結局、俺含め先生までもブランケットにくるまり暖を取る。
これはもう怪人が勢力を拡大した秘密結社ブランケットって所だな。
「リンちゃん。年末は何するか決めてる？」
「年末はバイトかな」
「私もバイト探してるんだけど、近くに全然ないんだよねぇ」
怪人ブランケット状態になりながら各務原さんがバイトについて話し出す。
「バイトの求人甲府ばっかだしな」
「俺も最初探すの苦労したなぁ。高校生の求人少なくってさー」
「うちらはホンマにラッキーやったわ。たまたま近所でバイト決まって」
「いいなー」
入学してすぐに俺もバイトを探したけど、全然見つからなかった事を思い出す。
俺の場合は、母さんがゼブラに買い物行った時に募集の張り紙をもらって来てくれたのがきっかけで見つかったけど、今はあおいさんも入ってバイトの人員募集は終了している。
大垣さんの所も同様だ。
「なでしこちゃん。だったら私と一緒に年賀状のバイトやんない？」
「えっ？」

むむぅ、と唸っている各務原さんに斉藤さんが情報をくれる。
「年始までの短期なんだけど、まだ募集してるよ」
「ホントに!?やるやる!!やります!!」
「それじゃあ早速エントリーしようか」
思いもよらぬ展開から、一気にバイトに就けそうな状態となった各務原さん。
「そっか。長期はなくても、今の冬休み期間なら短期で募集してる所はあるんだ」
「そういえば、クリスマスケーキの販売員募集とかもあるやんね」
しかも、電話じゃなくてネットから応募出来るのも初めて知ったぞ。時代の進歩ってすげなぁ。
と、ジジくさい事を考えてしまう。
「よし!そろそろ頃合いやな」
そんな話をしているうちに、鍋の方がだいぶ煮立ったようだ。
「あらたくん。みんなに卵配ってもろてええ?」
「ん、了解」
あおいさんの指示で卵や小皿の配膳を済ませる。
料理の手伝いができない以上、せめてもの行為を務めさせて頂きます。
ボワっ
「出来たで、晩ごはん!!」
再びあおいさんの横へ戻ると、鍋の蓋が開き一気に湯気と共に美味しそうな香りが溢れてくる。
『おおーっ!!』
鍋の中には食欲をより引き立てる色合いのある具材がグツグツと煮込まれている。
外に居るだけあって、湯気がはっきりと目に見えて立ち昇った。
みんな各お皿に卵をパカッと割り、すでにすき焼きを出迎える準備は万端だ。
「それでは、」
『いただきまーす!!』

料理を担当されたあおいさんの号令に続いて、皆で手を合わせ挨拶をする。
皆待っていましたとばかりに鍋に向けて箸を滑らせた。
まずは肉…と行きたいところだが、ネギから戴くとする。
汁がしっかりと染み込んだネギを一つ自分の小皿に乗せて卵と絡ませる。
そして少し息を吹きかけ覚ましてからゆっくりと口へと運んだ。
「(…ウツマ、これはうまいぞ)」
肉の味もしっかりと染み込んでネギの味も噛み締めるほどに広がっていく。
焼き豆腐も…ウマい！
しっかりとした歯応え、やはりすき焼きには形の崩れない焼き豆腐が一番だ。
そしていよいよ、メインのお肉…。
「んむ～っ!!」
「肉超うめぇー!!」
「……」
「もぐもぐ」
反応がバッチリ分かれているな。
全身で表現するタイプの各務原さんと大垣さん。
黙々と味わうタイプの志摩さんに斉藤さん。
あおいさんも普段は後者である。
しかし、今夜は一味違った。
「ほら、あらたくんも遠慮せんとお肉食べ～」
ズイッと俺の口元に、自身の箸で掴んだお肉を溢さぬように左手まで添えて差し出して来た。
「ほら、小牧！あーんだぞっ、あーん！」
日中に、一度見ていた大垣さんは他のみんなもいるからか、昼の時とは逆にからかってくる。
「あの時のお返しや。あーん」
やっぱり牧場での事恥ずかしかったんだな。

ていうか、根に持っているというべきか。
「…あーん」
そうして潔く口の中へとお肉を入れるのだった。
「!?」
きめ細やかでしっとりとした牛肉と、卵のまろやかさがマッチして…ウマい。
ありがとう、牛…。
「超絶美味いです」
ひとまず味の感想を口にした。
嘘偽りなく今までの人生の中でトップクラスに上手い。さすがは高級肉！
「小牧くんはあーんしてあげないの？」
すると、まさかの方向からの襲撃。
斉藤さんが俺を見てニヤニヤしている。
くっ、この子もそっち側の人間だったか！
「…じゃあ、はい。あおいさん、あーん」
「あー…ん！」
可愛い小さな口がもぐもぐと動く。
そして、あっという間にコクりと飲み込まれていった。
「なんか自分で食べるのに比べて格別やわぁ～」
「それは良かった」
まぁ、付き合い始めてもうすぐひと月だ。
初めて会った時から数えれば、もう半年以上も経っているわけで、いざやってみるとそこまで恥ずかしさは自然と感じなくなっていた。
「でも、流石に不意打ち喰らうと恥ずかしいね」
「せやろー。私も今日そんな感じやったんよ」
確かに、過ぎた後のむず痒いような恥ずかしさがある。
しかも同級生で女子ばかりのこの空間は、不特定多数の人がいるよりも効果的面である。
はかったな、あおいさんめ！
「すっごく美味しいよ！あおいちゃん!!」

「どういたしましてー」
からかう大垣さんと斉藤さんに、おそらく無表情ながらにそれを楽しんでいる志摩さん。そして食べるのに夢中の各務原さん。
なんだか、もう少し肩身の狭い空間になるかもと思ったけど、全然大丈夫な1日だったな。
まぁ、まだ夜は長そうだが。
「しくしくしく」
しかし、そんな雰囲気とは裏腹に悲しい表情を浮かべた女性が1人。
「ど、どうしたんです先生？」
そんな先生を見かねて、あおいさんが驚いて声をかける。
「すぎやぎに合う日本酒忘れぢゃった…ひぐっ」
「あ、そうですか」
めちゃくちゃ涙を流しながら食べる鳥羽先生。
あおいさんも口に合わなかったのではないかと心配するほどだった。
あれだけ飲んでいたのにまだ飲むのか…。
「なぁイヌ子、どうして晩メシすき焼きにしようと思ったんだ？」
「うん。実はなー」
大垣さんの疑問は俺も気になっていた。なぜ数ある肉料理の中からすき焼きを選んだのか。
耳を傾けながら食を進める。
「お婆ちゃんになー、すき焼きは特別な日にみんなで頂く食べ物や言われて納得してもうて決めたんよ」
「言われてみれば確かに！すき焼きって祝い事とかに食べるもんね」
「ばーちゃんに言いくるめられたのか～。小牧も含めて」
「えっ、違うの!?」
俺も納得していたがどうやら少し違うと大垣さんに言われる。
さすがはあおいさんのお婆様、嘘かそうでないのかよく分からない事を突いてくるとは。
「でも、こんな風にお鍋囲むの日本の年末って感じがして、すごくいい

と思う」
「せやなー」
各務原さんの言う事にも、納得させられる。
クリスマスは元々異国の文化だけど、それは別にしても確かにすき焼きは日本の年末にすごく合うような気がする。
「そうだ、忘れてた！」
そんな話をしながら斉藤さんがスクッと立ち上がる。
「私、クリスマスっぽい物持って来てたんだよ～」
そうして、ある物が皆に手渡された。

「年末戦士！」
『サンタクレンジャー！』
サンタクロースのコスプレを纏い、みんなで決めポーズを取る。
サンタクロースだから当たり前だけど、レンジャーといっても全員レッドだけどな。
「あらたくん似合うとるでー」
「あおいさんも良く似合ってるよ」
「2人でも写真とろ～」
そうして、あおいさんがスマホを掲げてツーショットを撮る。
何気にクリスマスの思い出の写真にもなるな。斉藤さんには感謝しないと。
「一気にクリスマスムードや」
「斉藤さん、これどうしたの？」
「まぁまぁ、よいではないか」
斉藤さんに聞いても上手くかわされてしまう。
どこで買って来たんだろうか。
ある程度盛り上がり、すき焼きを改めてその格好のまま囲む。
『……』
「なんか仕事終えたサンタが打ち上げしてるみてーだな」
多分みんな似たような事を思ってるんだなと、ひと目で分かった。
「あっ、そろそろ具材追加しない？」

鍋を見た斉藤さんがはっと具材が少なくなっている事に気が付く。
七人で一つの鍋をつつけば具材の減りはあっという間だ。
「いや、こっちのはもうおしまいや」
「えっ、でもまだお肉こんなにあるよ？」
「こっからは、こいつでお色直しや!!」
スッと、あおいさんはトマトを皆の前に取って見せた。
どうやらこれから別のメニューを作るようだ。
「あきがあらかじめ炒めておいたタマネギに、トマトとバジルを加えて更に火にかける！」
さっきまでの日本食に比べて一気に調理する食材が洋風へと変わり、美味しそうな野菜の匂いが広がる。
「そんで野菜がのうなった鍋に移して煮込めば…」
再び具材の満ちた鍋に蓋をして煮込む事数分。
「トマトすき焼きの出来上がりやー!!」
『トマトすき焼き!!?』
先程まで緑が多かった鍋が一気に赤で彩を飾る鍋へと変身した！
「んまっ！」
「トマトうまっ！」
早速口にした各務原さんと大垣さんが口を揃えて言う。
それに続けて、俺もトマトを一つ自分の皿へと移す。
そして、
「（食欲をそそるトマトの酸味と牛肉がマッチして）…美味しい」
「んふふー」
と、ニコニコした顔でみんなの反応を楽しむ彼女に俺は声をかける。
「あおいさん、よくこんなレシピ知ってたね」
「すき焼きに決める前に色々なレシピ見とってなー。もしかしたら洋風の食材もすき焼きに合う思うたんよ。みんな喜んでくれて嬉しいわ～」
「俺、初めてあおいさんの手料理食べたけど、毎日食べたいくらいだよ。…うん、お肉にもトマトの味が染みて美味い」

「そ、そう?それは良かったわ(あらたくんはまたみんなの前で恥ずかしい事を)」
皆で第2ラウンドの鍋を楽しむ中で、また先生がしくしくと泣き出す。
「ワインがあうのに…、ワインがあうのにィ、…うぐぐぐ」
「はいはい、忘れてしもたんですね」
「先生、せめて鼻かんで下さい」
さっきの事もあり、あおいさんは綺麗に受け流す。
俺も号泣しながら食べる鳥羽先生にティッシュを渡してやった。
材料を追加したにも関わらず、あっという間にお鍋は無くなっていった。
それほどに料理が美味かった。
「犬山さんごちそうさますごく美味しかったよ」
「んふふ、おそまつさま」
食べている最中、ほとんど喋らず味を噛み締めていた志摩さんが賞賛の声をあおいさんに伝える。
うん、志摩さんの言う通りすごく美味しかった。お外で食べるという相乗効果もあって、今までにない充実した夕飯だったな。
「…けどな。まだ終わりやあらへんねん」
何!?さらにまだ何かあると言うのか!
しかし、もうお腹はいっぱいである…。
「トマすきのシメ。チーズパスタが残っとんのや!!」
「チーズパスタ!?」
一番に各務原さんがその言葉に食いつく。
「シメ食べるひとー」
「はいいィッ!!」
そうして案の定手も挙げた。
「すげーなおまえ」
「私一口だけもらおうかな」
「私も」
「俺も」

どうやら、各務原さん以外は皆俺と同様に既に満腹のようだった。
本当に各務原さんの食欲はすごい。これで今の体型を保てる人って中々いないのでは？
「あらら？ガス切れしてもーた」
長時間鍋を煮込んでいた為か、ガスが切れてしまう。
確か、コンロは各務原さんが持って来てくれていた。なら、替えのガスも持って来ているはず。
「各務原さん、新しいガスある？」
「あーっ!!!」
うん。多分忘れたんだなこの反応は。
各務原さんはシートの上に倒れ込んでしまった。
「替えのガス持って来るの忘れた…」
「先生が持ってるバーナーのガス使えるんじゃない？」
「ホント!?」
さすがキャンプ慣れしている志摩さん。代用品もすぐに思いつく。
ボウッ
「やったついた!!」
「…あかん。こっちもや」
しかし、点いたのは一瞬ですぐに火は消えてしまう。
「そんなーっ！先生、ガスボンベもう無いんですかっ!?」
「そんなモノはないっ!!」
先生はもう呂律がギリギリな程に酔ってらっしゃいますね。
「はっ!?コンロがもう使えないとゆー事は…、明日の朝ごはん何も作れないって事じゃ…」
がくりと再びシートに倒れ込む各務原さん。
チーズパスタはしょうがないとしても、明日の朝ごはんの担当は各務原さんだ。しかも、本人があれだけ作るのを楽しみにしていたのにあまりにも可哀想だ。
「…俺、買ってこようか。キャンプ場出てしばらく行ったところにコンビニあったよね」
「小牧くんっ！」

「でも、ここからやと時間かかるで？道路も暗いし危なない？」
「そうか。じゃあ、先生…は絶対無理だし」
何で今日に限ってバイクが無いんだ。免許だけあっても宝の持ち腐れ…。
ん？バイク？確か志摩さんって今日。
「ガス何本あればいいの？」
そんな頭に浮かべた彼女がマフラーを巻いて立ち上がる。
すでに羽織っていたサンタ衣装も先程までの装いへと変わっていた。
「私が買って来る」
「リンちゃん!!」
かっ、かっこいい！
普段からクールな志摩さんだが、一層その姿がかっこよく眼に映る。
「ひぐぅぅ、ありがどぅぅ」
「泣くなよ…」
「あ、あおいちゃん！お肉と割下ってまだ残ってる？」
「うん？少しならあるで」
「リンちゃん。お金出すからガス２本とチューブしょうがお願い!!」
そうして、各務原さんからの要望を受けて志摩さんが一旦キャンプ地を離れていった。
「小牧くんもありがとう」
各務原さんから、先程立候補した事への感謝を向けられる。
「ううん。結局志摩さんに行ってもらっちゃったし、俺は何も」
「そんな事ないよ！本当に優しいんだね小牧くん。あおいちゃんに聞いてた通りだ」
「えっ？」
「あおいちゃんがね。小牧くんはいつも助けてくれて本当に頼りになる男の子だって言ってたんだよ！」
…そうか。俺、ちゃんと頼りになってたんだ。
頼られる人になりたいってずっと思ってたけど、すでになれてたの

かな。
「な、なでしこちゃん!?あんま恥ずかしい事言わんとって!」
「え～?」
そうして、志摩さんの帰りを待ちながら、さらに夜は更けていくのだった。

第十話　「お風呂と女子トーク」

「楽しかったよちくわ…、また遊ぼうね!!」
「もう聞こえとらんで、なでしこちゃん」
　星々がキラキラ光る夜空の下で、車で帰るちくわを見守る一同。
　日中走り回って疲れたのか、毛布にくるまり後部座席に着席したちくわは、すでに夢の中にいた。
「各務原さん、チワワは寒いの苦手だからしょうがないよ」
「ちくわ～」
　惜しんで涙を浮かべる各務原さんを慰め、車がキャンプ場を出て行くのを見届けた。
「やっぱりこの寒さはキツいよね」
「うん、だから一晩泊まるのはちょっとね」
　斉藤さんも少し寂しそうだ。
　迎えに来たのは斉藤さんのお父さんだったみたいだけど、すぐにちくわを確保して出て行ったから、ちゃんと挨拶も出来なかったな。
「そんじゃまぁ、あたしらはお風呂入ろうぜー」
　サイトに戻ると、大垣さんからこのあとの予定が伝えられる。
「私となでしこで焚き火の番してるから、先にお風呂入ってきて」
「うん、ありがとなー」
「あれ？先生は？」
「酔い覚ましてからお風呂入るって、呑みながら言ってた」
「いつまでも入れねぇ…」
　鳥羽先生は、ちくわの見送りはせずに、お酒を嗜み続けている。
「小牧くんも先に入って来なよ」
　女子グループが入浴を終えるまで待ってようかと思っていたのだが、志摩さんに勧められる。
「えっ、でも女子だけで大丈夫？俺最後で大丈夫だよ？」
「お風呂の開放時間もあるし、酔ってるとはいえ先生もいるから大丈夫…だと思う」

「リンちゃんと私にまかせて！」
「そう？二人がそう言うならお先しようかな。なるべくすぐ戻るよ」
「うん、了解」
「いってらっしゃーい！」
そうして、入浴の準備を終えたあおいさんらを追いかけて共有浴場に向かった。

建物内に入ると、ゆっくりと歩みを進める三人の背中が見えた。
「おっ！小牧も来たのか？」
「うん、志摩さんに言われて」
大浴場のある施設内の中で、大垣さんが先に俺に気づいて振り返る。
そして、廊下を歩く三人と合流した。
「でも、すぐ戻るよ。殆どお客さんが居ないとはいえ、女子だけで残すのはやっぱり心配だし」
「先生もあんな状態やったしなぁ」
「じゃあ、また後でね小牧くん」
男湯と女湯で分けられた地点で、あおいさん、大垣さん、斉藤さんと別れた。

「これは贅沢だなぁ」
ふぅー、っと一息ついて湯船に脱力しながら浸かり、リラックス。
外の寒い空気で冷え切った身体を温めながら、今日1日の疲れを癒す。
普通の銭湯に比べれば、そこまで広いわけではないけれど、足も伸ばせて極楽だ。
いつまでも浸かっていたい気持ちはあるけれど、早く戻らないとな。
志摩さんには心配するなと言われたけど、そういうわけにもいかない。
男として、皆を危険に晒さないよう配慮はするべきだ。

「にしても、いつ渡すか」
昼間に皆にあげたプレゼント。
リュックの中にまだ一つ、渡していない包みが残っていた。
あの時一緒に渡しても良かった気もするが、なんか少し違う気がして今の今までリュックにしまっている。
「あおいさん。喜んでくれれば良いけど」
そんな独り言を言いながら、俺は湯船から上がった。

一方、女湯。
「小牧くんの作ったクッキー美味しかったよねー」
「ありゃあ女顔負けだぜ～。あいつ女子力も高いんだな」
三人肩を並べながら、恵那と千明が今日の事を振り返っていた。
「でも、犬山さんの晩御飯もすごく美味しかったよ！」
「えへへ、ありがとなー。あらたくんは普通の料理も上手なんよ」
「なぬっ！あいつ、実は女なんじゃ…」
「んな訳あるかい」
そういえば、初めてあらたの事を話した時も、この三人でいる時だったなと、数週間前の事をあおいは思い出す。
「ねぇ。犬山さんは小牧くんにクリスマスプレゼントとか用意してるの？」
「ふえっ!?な、なんで？」
湯船に浸かり、力が抜けていたせいか変な声が出た。
「小牧くんのクッキーも、犬山さんのお肉も、なでしこちゃんが言ってたおもてなしでしょ？だから付き合ってる同士では何かやらないのかなって」
斉藤さん…。
たまに鋭い事に気がつくんやなぁ。恐ろしい子や。
「…うん。一応、用意はしとるよ？」
「やっぱりそうなんだ！いいなぁ～青春だねぇ」
「プレゼント…。あー、あのマフラーな」
「!?」

浴槽の壁に背中を預けていたが、千明の発言を聞いてバシャっと水音をたてて身体を起こす。
「あきっ!?なんで知っとるん！」
およそ1週間ほど前から、今日のためにあらたに向けてマフラーをこっそり編んでいた。
もちろん、野クルのメンバーやキャンプの参加者には内緒でだ。
なのに、千明はそれを知っていたのだ。驚かずにはいられない。
「ふっ、あまりあたしを甘く見ない事だな…って、いててて！痛ひっ！」
「冗談はええからっ」
ふふん、と自慢げに話す千明の頬を人差し指と親指で摘んで引っ張る。
「ててっ、…お前、放課後こっそり部室で編み物してただろ？ありゃどう見てもマフラーだった」
「…見られとったんやな」
頬をさすりながら、千明は理由を話し始める。
「まぁ、偶然だけどな。盗み見るつもりは無かったんだが、部室にアウトドア雑誌置こうと思って放課後に立ち寄った時にな。たぶん、なでしこは知らないと思うが」
「なでしこちゃん。嘘つくの下手やからな」
千明はともかく、なでしこであればその現場を見た次の日にでもボロを出しそうだ。
しかし、そういう風には見えないところを見ると、偶然見たという千明以外に知る人はいなかったのだろう。
「マフラーかぁ、しかも手作りなんだね。すごいなぁ」
恵那もプレゼントが気になるようだ。
「うん、せっかくやから作ってみたんよ。でも、そんな良い出来のもんやないで？あらたくん…喜んでくれればええんやけど」
「大丈夫だよ！小牧くんも犬山さんから貰えたらすごく嬉しいと思う！」
「せやろか。初めてやから下手やし、ちょっと不安や」

「イヌ子、手先器用だろ？大丈夫だって気楽にいけよ」
「だって、こんな事するの初めてやもん」
サイトに置いて来たあらたへのプレゼントを想像し、喜んでもらえるか心配になる。
初めての彼氏と過ごすクリスマス。緊張しない人などいるはずもない。
「おぉう、イヌ子が女子の顔をしている」
「小牧くんもそんな犬山さんに惹かれたのかな？」
「からかわんといて、２人とも」
自分でも顔が赤くなっているのが分かる。
「でも、あらたくんが用意してるかは分からへん。せやから、私だけ気合の入ったプレゼント用意しとるんやとしたら、どないしよ」
「いや、あいつ絶対用意してるだろ。相手は小牧だぞ」
「うん絶対用意してると思う」
千明と恵那は確信を持った表情を浮かべている。
最近、今回の件でよく話すようにもなった千明と、知り合ったばかりの恵那でさえも、あらたという人物がどういう人間なのかは十分に理解していた。
「確かにあらたくんは可愛い顔して時折かっこいい所も見せるし、頼りになる男の子やけど…」
「おい、急に惚気んな」
意外と余裕あんじゃねーかと嗜められる。
「はぁ、いつ渡すのがええんやろか」
「じゃあさ！先生達がお風呂から戻ってきたら、少し二人で散歩とかして来なよ。その時に、」
「いや、斉藤。サプライズだぞ、プレゼント持って散歩するよりかは、あたしらが席を外した方が良くないか。その方が自然だ」
「確かに！さすが部長だね！」
「いやー、それほどでも～」
「部長は関係あらへんやろ」
と、そんなトリオ漫才を湯船の中で繰り広げる。

「…あかん、色々考えてたらのぼせて来たわ」
「だなー、そろそろ上がるか」
「そうだね。長湯も良くないし」
そうして、三人共湯船から上がり、火照った身体のまま、テントへと戻る事にした。

同時刻、小牧家では。
プルルルルッ。
「ひかりー、お母さん手が離せないから電話出てー」
「は～い」
小牧家に電話の着信音が鳴り響き、ひかりがリビング入り口前に置かれた受話器を取る。
「もしもし～、ひかりです。あっ、間違えました～。小牧です」
普段はこういう時、兄であるあらたが対応していたが、今夜は学校の友達とキャンプで居ない。
そのせいか、ひかりは電話の対応にも慣れていなかった。
『ひかりちゃん？あらた居ないの？』
「お兄ちゃんはいません。どちらの方ですかー？」
受話器から聞こえる声に聞き覚えがあるような無いような、そんなあやふやなひかり。
『えー、ひかりちゃんひどいなぁ～。私だよ！わ・た・し』
「んー？わたしさん？存じ上げません」
『いや、そうじゃなくてさ。…そうだね、ひかりちゃんはそういうタイプだもんね』
がっくしと、電話の相手が肩を落とすが、ひかりはそんな事知る由もない。
『ゆりなだよ！ひかりちゃんとあらたの従姉妹のゆりな！』
「ゆりなお姉ちゃん？…あっ、わぁ～、ゆりなお姉ちゃんだ」
『忘れてたの？意外と私たち付き合い長い筈なんだけどな』
「ううん、お姉ちゃんの事は覚えてるよ。ただちょっと抜けてただけ」
『それは忘れてるのと変わらないよ…』

残念がっている様子の電話の相手にひかりは話しを戻させる。
「ゆりなお姉ちゃん。お兄ちゃんに用事なの？」
『ううん、居ないならひかりちゃんでも大丈夫。来年のお正月に私がそっちに遊びに行く事を、叔母さん、ひかりちゃんのお母さんに伝えて欲しいの』
「ゆりなお姉ちゃん遊びに来るのー？やったー」
『うん。お父さん達は都合悪くて無理みたいなんだけど、私は行けるからさ。もう高校生だし』
「じゃあ、お母さんに伝えておくねー」
『うん。叔母さんには一度お母さんが連絡してるみたいだけど、改めて伝えておいてくれるかな』
「分かった～」
『それじゃあ、またお正月にね』
その言葉を最後に電話を切った。
『（あらた。バイトだったのかな？）』
一方、電話をかけたゆりなは、いつもこの時間であれば出てくれていたはずの従兄妹が出なかった事に疑問を抱くのであった。

第十一話　「しまりん団子」

パチパチと薪の燃える音が静かな高原に響く。
そんな焚き火に当たりながら、母親にメールを俺は書いていた。
どうやら、東北にいる従姉妹のゆりなが正月に家に遊びに来るというのだ。こっちには親戚もいないし、うちの親も仕事があるから来年は挨拶回り出来ないかと思っていたけど、一人とはいえ親戚が家に来るなら歓迎しないとな。
「っと、薪足さないと」
そんな中、火が弱まっている事に気づいて、数本の薪を足す。
先にお風呂から戻った俺は、各務原さん達と焚き火の番を交代した。
鳥羽先生も、無事酔いが冷めたようで2人と共に大浴場へと向かった所だ。
おそらく、今夜はまだみんな起きているだろうし、この焚き火もフルに活用される事だろう。
そろそろあおいさん達も戻ってくるはずだろうし、ちゃんと暖が取れるよう火力の調整が必要だ。
「あらたくーん。ただいま～」
「あっ、おかえりなさい」
焚き火を見つめていると、あおいさん達が帰ってきた。
「ごめん大垣さん。勝手にお湯沸かしちゃってた」
「おー、全然問題ないぞ。あたしらも飲み物もらっていいか？」
「うん、淹れとく」
三人がテントに荷物を置いている間に、コップにお湯を注ぐ。
「小牧くん。男湯はやっぱり1人だけだった？」
「うん、貸切だったよ。…はい飲み物」
「ありがとう」
最初に戻ってきた斉藤さんにココアを渡した。
お風呂に入ったとはいえ、外の寒さを舐めてはいけないのだ。

「あらたくん。私もー」
「あたしもくれー」
そこに、あおいさんと大垣さんも戻ってくる。
２人にもココアを渡すと、そのままあおいさんは俺の隣に座った。
隣からふわっとせっけんの香りがする。
「どしたん？」
「いやっ、何でもないよ！」
「？」
無意識に彼女の方を見てしまっていた。
あおいさんと視線が重なり、すぐさま正面へと向き直る。
この独特な感じ、同じ男の人なら分かってくれるだろう。…分かってくれるよね！
「あれ、２人とも何してるの？」
焚き火の反対側に座る大垣さんの髪を斉藤さんが結っている。
「しまりん団子作ろうと思って」
「しまりん団子？」
しまりん…。ああ、志摩さんと同じ髪型って事か。
気がつけば、斉藤さんの髪型はお団子ヘアーへと変わっていた。
いつの間に。髪のセットが得意なのだろうか。
「おもしろそうやん。斉藤さん、私もやって貰ってもええ？」
「もちろん！ちょっと待っててね」
すると、パパッと大垣さんの髪を完成させて、あおいさんの元へと移動する。
「おおっ！」
自分が男だから良くわからないけれど、たぶん手際が良くて早いんだろうな。
現に、やってもらっていた大垣さんが手鏡を見ながら驚いている。とても綺麗なお団子である。
「犬山さん、髪綺麗だね」
「ほんま？なんや照れるわ～」
下準備？と言うべきか、斉藤さんがブラシを使ってあおいさんの髪

を解いている。
俺はそれをじっと眺める。
「痒い所はありませんか～？」
「ありませーん」
いや、それ髪洗ってる時に言うやつじゃん。
「なぁ、小牧ちょっと聞いてもいいか？」
「何？」
「小牧が好きな女子の髪型ってあるのか？」
大垣さんの質問に、斉藤さんの手が止まり、あおいさんもこちらを見る。
「髪型？」
「ああ、ロングとかショートとか。あとはパーマとかか？男子でそう言う話するだろ？」
確かに、クラスの男友達と異性に対しての好みのタイプとかそういう話は何度かした事があるな。
「んー、俺はあおいさんならどんな髪型でも好きだけどな。どれも似合うと思うし」
「えっ、…あ、いや」
「でも、いつもの髪型が1番かな」
脳内であおいさんの髪型を色々とシミュレーションをしてみるが、言わずもがなどれも可愛い。
けど、見慣れているいつもの髪型が1番好きだ。
「まてまて小牧」
「えっ？」
素直に答えると、大垣さんがぶんぶんと手を振って制す。
「あたしが言ったのは、その、イヌ子の事じゃなくてだな…」
「たぶん、小牧くんから見て一般の女性の髪型でどういうのが好きかって事だよね。犬山さんの事は関係なく」
「ま、正解っちゃ正解なんだろうけどな」
斉藤さんが補足の説明をしてくれた事により、ようやく自分が口走ってしまった事に気づく。

「へぇ～、あらたくんは私ならどんな髪型でも似合う思うてくれるん？」
「…ごめん。今の忘れて」
ニコニコとからかってくるあおいさん。
両手で顔を隠して自身がまた恥ずべき事をしてしまったと後悔する。
「ほらっ、出来たよ小牧くん」
斉藤さんに言われて、そっと手を顔から外すと普段とは違うお団子ヘアーのあおいさんが視界へと写される。
「どう？変やない？」
「…似合ってる」
ついさっきの事ではあるけれど、素直に思った事を口にする。
やはり、頭の中で考えるのとリアルで見るのとでは全然違うな。頭のてっぺんがふわふわしてそうで、すこぶる愛らしい。
「触ってみたらどうだ？」
お団子の部分を見ていると、大垣さんがそんな事を言う。
「全然ええよ」
本人も笑顔で答えてくれるが、少し戸惑う。
「でも、大丈夫？せっかくセットされてるのに」
「少し触ったくらいじゃ崩れないから大丈夫だよ」
髪を直接整えていた斉藤さんが言うのであれば、心配しなくても良さそうだ。
「それじゃあ、お言葉に甘えて」
「ふふっ」
緊張してたのがバレたのか、彼女に笑われた。
だってしょうがないじゃないか。普段することの無い事なのだから当たり前だ。
「綿みたいにふわふわしてる」
「それは褒めてるのか？」
「そのつもりなんだけど、違った？」
「いや、あたしも分からん」

正直、褒めれているのかは全然分からなかった。
でも、自分では良く思っているのは確かだ。
「せや！あらたくんもやってもらえばええんやない？」
「えっ？」
「おー！おもしろそうじゃんか!!やっちまえ斉藤！」
「ええっ！」
「ラジャー！」
「なんで俺まで!!?」
ガシッと左右からあおいさんと大垣さんに腕を掴まれ身動きが取れなくなる。
「いやっ、俺男だし！ていうか、そもそも髪だってそんな長く無いしっ」
「大丈夫だよ。小さめの作るから、まかせて！」
「ちょっ、斉藤さんっ!?まって、2人も何でそんな乗り気なの！」
結構力を入れている筈なのに、全然2人の腕を振り解けない。
とはいえ、本気で力を入れる事さえ出来れば外せるかもしれないが、怪我に繋がるかもしれないので無闇に動くわけにはいかなかった。
ていうか、2人ともそれが分かってててがっしりロックしているんじゃないのか？
「あおいさんっ！」
「大丈夫やで。私もあらたくんならどんな髪型でも好きや」
「大垣さんも、どうして！」
「そんなの面白いからに決まってんじゃねぇか！いいからお縄につけい！」
説得を試みるも、それも叶わない。
少しづつ近づく魔の手から逃れる事はできなかった。
「そんな～～～っ」
俺の虚しい叫びが朝霧高原にこだました。
「しくしくしく」

男としてあられもない髪型になった俺は、焚き火の前で体育座りをしながら涙を流していた。
「ふふっ、そんな泣かんでも可愛らしいで、あらたくん」
「可愛いとかの問題じゃないよ～」
彼氏としての威厳はどこへ行ってしまったのだろうか。
結局抵抗できずに他の三人と同じ、こじんまりとしたお団子を頭に作られてしまったのである。
『カシャッカシャッ』
「ちょっ！三人とも写真に撮らないでよ！一枚１０円だよ!!」
「めちゃ安じゃねーか」
すかさず大垣さんからのツッコミ。
「…まぁ、別にいいよ。本気で嫌だったら流石に俺も言うし」
「帰ったらひかりちゃんにも写真見せてええ？」
「それは本当にやめてください」
兄としての威厳だけはせめて保たせてほしい。
「でも、あらたくんは普段からそんなに髪型いじらへんもんね」
「セットは時間かかるからね。基本はいつも同じ」
確かにワックスとかのヘアセット関係の物は持ってはいるけれど、いつも男子高校生らしいナチュラルなセットしかしていない。
「技術もそんなにないし」
「私も流石に男の子のヘアアレンジはできないなぁ」
斉藤さんも俺の髪型を見て言う。
「ただいまー」
するとそこへお風呂へ行った各務原さんらが戻ってきた。
「おかえりー」
「あっ!!みんなリンちゃんみたーい」
すぐに各務原さんがみんなの髪型に気付き、羨ましい目を向ける。
「小牧くんも可愛いね！」
「せやろー。良かったなあらたくん！」
「いや、なんか複雑です」
褒められているけど、嬉しくはないな。うん。

「小牧くん、斉藤に遊ばれたんだ」
「…うん、色々あって逃れられず」
「お気の毒に」
この気持ちを理解してくれたであろう志摩さんに肩をポンと叩かれる。
もしかして、志摩さんも斉藤さんからなんらかのヘアアレンジいたずらを受けた事があるのだろうか。
「いーな、いーなー」
各務原さんは欲しいおもちゃを見るような表情で羨ましがっていた。
「なでしこちゃんも、しまりん団子やる？」
「やるーっ!!」
「なんだそのネーミング」
ワクワクした状態で、髪を任せる各務原さんと、ネーミングに違和感を感じている志摩さん。
「なんだか、名物みたいな名前だよね。しまりん団子」
「売ってみたら結構儲かるんやない？」
そんな事を隣に座るあおいさんと話す。
「はい、できた」
あっという間にヘアセットは完成。
「むふぅ、どぉ？」
「ぷっ、ぷぷっ…」
自慢げに髪型を皆へ見せびらかす各務原さん。
しかし、俺を含めた全員が笑いを堪えるのに必死である。
そう、彼女本人だけは気づいていなかった。
1人だけ、しまりん団子ではなく、頭の上にハニワが出来ていた事に。
正直、俺がお団子頭にされるよりも、その髪型の方がレベルは上だった。
「空の星、すごく綺麗」

髪型を元に戻し、皆で肩を並べて夜景を楽しむ時間が過ぎ去る。
「お風呂もあってええ景色で、ホンマ最高の場所やなぁ」
「そうだね」
横に座るあおいさんと笑みを交わし、互いに身体を預けてくっつく。
そういえば、こんな風に星を見て過ごすロマンチックな事、今までの人生ではじめての経験だ。
「私、冬キャンプなんて初めてだったけど、すごく楽しめたよ」
斉藤さんが星を見ながらそんな事を言った。
「俺も、初めてのキャンプがこのキャンプ場で良かった」
今日一日、初めての事ばかりで本当に貴重な体験をさせてもらったなと改めて振り返る。
「お前ら、しまりんさんにちゃんとお礼言っとけよー」
「いやいやいや」
志摩さんは照れるからやめろと言う。しかし、元々こんなに良いキャンプ場を教えてくれたのは志摩さんだ。
改めて、感謝は伝えるべきであろう。
「さんはい!!」
『あーりーがーとーうーごーざーいーまーしーた』
「小一みたいなお礼やめろ」
皆で声を揃えて言ったが、確かにこれは工場見学後とかにやる挨拶のそれだ。
「ねぇ今から何しよっか?」
「まだ9時だから寝るにはちょっと早いよね」
各務原さんと斉藤さんがこれからについてどうするか皆に聞いた。
斉藤さんの言う通り、他の皆は分からんがまだ寝れる気がしない。
「なら、散歩でも行かないか?せっかくこんなに星も綺麗なんだし」
「え、ちょっと危なくないか」
大垣さんの提案に志摩さんが待ったをかける。
「しまりん、なでしこ、ちょっといいか?先生も」
「私も、ですか?」

さっきまでとは違い、ゆったりと座って寛いでいた鳥羽先生までも呼び出される。
すっかりと酔いも冷めたようで、先生の足取りがしっかりしている事に安心する。
すると、何やらこしょこしょと4人で少し話し始めた。
散歩なら先生もいれば安心だな。さすが大垣さん。
けど、そんな所で話す必要はあるのかな？
「……」
「へー！さすがあきちゃん!!」
「ばかっ！声デケーって」
「あわわっ、ごめんごめん」
何を話していたのかよく分からないけど、話し合いが終了したようだ。
「鳥羽先生も来てくれるってよ。散歩いこーぜ！」
「いいね～」
斉藤さんも賛成のようですくっと立ち上がる。
「あー、でも、焚き火したままだと危ないなー」
焚き火に指を指す志摩さん。
なんか、喋り方ちょっと変じゃないか？気のせいか？
「（ちょっ、しまりん！演技下手すぎだろ！）」
「（だ、だって、こんな事、私やった事ないし！）」
「（大丈夫だよリンちゃん！あとは私に任せて！）」
志摩さんの言う通り、火を放置するのは危険だ。
消して行っても良いだろうけど、また着けるのも少し面倒だ。
「なら、俺が残るよ。先生、ここは俺が見てるんで皆んなの事お願いします」
「は、はい！任せてください」
「？」
なんだか先生もちょっと様子がおかしい。まだ少しばかり酔いが回っているのかもしれないな。あれだけ飲んでいたのだから。
俺は空いたお酒がテーブルに並んでいるのを見て思った。

「でも、小牧くんだけに任すのもな～」
何やら各務原さんも普段と口調が違うような声で話す。
まだ知り合って日は浅いけれど、違和感を覚えた。
ていうか、各務原さん。何をそんなにあおいさんの方をチラチラと…。
「あっ、そう言う事か」
『何が!?』
「えっ、いや、何でもないです」
声に出てた。
何となくだけど、大垣さん達が気を遣って何かをしようとしてくれている事は分かった。
おそらく、先程コソコソしていたのもそれの事だろう。
「(なでしこー！お前も大概じゃねぇか！)」
「(え～！完璧だったと思うよ！ねぇ、リンちゃん)」
「(いや、お前犬山さんの方見過ぎだろ)」
「(そんな～)」
急に三人があたふたとしだした。
うん。これは流石に気付くよ。
でも、せっかく皆んなが気を遣ってくれるなら甘えさせてもらおうじゃないか。
「じゃあ、あおいさんも一緒に残ってくれる？一人だと心細いしさ」
「えっ、うん。もちろんええよ（絶対気づかれとるで、あき）」
「(犬山さん、がんばってね)」
「(ありがとう。気いつけてな)」
そうして、俺とあおいさん以外の全員は一度焚き火から離れキャンプ場内の建物がある方へと歩いていった。
「……」
「……」
しばらく静かな時間が続く。
せっかく2人きりになれたけど、こうしてみると今日あおいさんと2人きりになるのはこれが初めてだ。

「あの、」
「さっきな」
意外にも沈黙を破ったのはあおいさんだった。
俺も口を開き、言葉を発っしようとした所だったが、彼女の方が早かった。
「お風呂で、うちらの事2人きりにしようってあき達が話してくれてたんよ」
「やっぱり。なんかみんな変だったもんね」
「流石にあらたくんも気づいたやろ？私もいきなり始まったから驚いたんやけどな」
「ははっ、でも優しいよね」
「ふふっ」
2人でさっきの皆んなの様子を思い出し、思わず笑ってしまう。
「でも、あきは私のために率先して動いてくれたみたいやな」
本当に優しいな。大垣さん。
中学からの知り合いだって聞いてたけど、本当良い友達なんだな。そんな友達がいるは羨ましい。
「俺もあおいさんと2人で話したかった。一応、ほら、クリスマスだし」
「あらたくん…」
焚き火から視線を外して、こちらを見たあおいさんの瞳をじっと見る。
大垣さん達は、あおいさんの事を思って席を外してくれた。でもやっぱり、こういうのは男の俺から動かないといけないよな。
俺はあおいさんの言葉を待たず、立ち上がった。
「あおいさんに渡したい物があるんだ。プレゼント」
「わ、私もや」
目的の物があるテントに足を向けると、あおいさんもすぐに俺を追いかけて自身の荷物のあるテントへと入っていく。
嬉しいな。あおいさんも準備してくれてたんだ。俺も用意をしていた甲斐があった。

２人になった時点で予想はしてたけど、みんなが作ってくれたこの時間を大切にしよう。

今からが、俺とあおいさんの、２人で過ごす初めてのクリスマスだ。

第十二話　「プレゼントと部活動」

「メリークリスマス」
　テントから各々プレゼントを持ってきた後、温かい飲み物を淹れ直したカップで乾杯をする。
　お風呂上がりにみんなが戻ってきた時の為に、お湯を多めに沸かしておいて正解だった。
「ふ～、なんだか不思議やわぁ」
「何が？」
　ココアを飲みながら、あおいさんが言う。
「去年の今頃なんて受験で忙しかったのに、まさか彼氏が出来て、一緒にこんな風に過ごせるなんて夢にも思ってへんかったな～って」
「そうだね、俺もだよ。親の転勤で引っ越しが決まってバタバタしてた時期だったし。去年の俺が今の自分を知ったら驚くと思う」
　今年入学したとはいえ、知らない環境での進学はもはや転校と差ほど変わらない。
　引っ越し自体初めてだったし、友達が出来るかも不安だったのに、彼女が出来るなんて。
　人生何があるか分からないな。
「……」
「……」
『…あのっ』
　少し間が空いて、声が重なった。
「あおいさんからどうぞ」
「いやいや、あらたくんから先にどうぞ」
「いえいえ、」
「いやいやいや、」
　お互いに譲り合いながら、何往復かしたのちに俺が先に用件を伝える。これがＴｈｅ日本人の譲り合いの精神。
　おそらく、互いに同じ事を言おうとはしていたんだろうけど。

俺は、足元に置いていた包装されたプレゼントをあおいさんへと手渡した。
「改めて、これクリスマスプレゼント」
「ありがとう。私も、はい、プレゼント」
そうして、2人でプレゼントを交換する。
俺もお礼を言ってあおいさんから受け取った。
「やっと渡せた～」
安堵の声を漏らす。
緊張から解放された。そんな感じがした。
「私もなんか、肩の荷が降りたような気がするわ～」
「俺も。正直朝からいつ渡そうとかずっと考えちゃってたからさ」
「あき達には感謝せんとな～。さすがに皆んなの前やと、ちょっとなぁ」
「あーんとかしてきたのに？」
「それはお互い様やろ～」
肩を並べて今日起きた出来事を押し付け合う。
「せっかくやし、開けてもええ？プレゼント」
「もちろんいいよ」
そして、あおいさんが先に包装された包みを開けて、中からプレゼントを取り出した。
「わぁっ！可愛い手袋や！」
包みの中からは、モフモフとした茶色い手袋。
ウールの生地を使い、手首には小さなリボンがあしらわれたデザインの物だ。
先週、甲府の方へ赴き女性が好きそうな商品が並ぶお店で買ってきたのだ。
男1人だったから少し勇気が必要だったけど、彼女の喜ぶ顔が見られて満足である。
「普段使える物がいいかなと思って。これからもしばらく寒いのは続くし」
「ほんまありがとう。大事にするわ」

さっそく両手に着用し、手をグーパーと開いて見せる。
可愛いかよ。
でも、サイズの心配もなさそうで良かった。
「指先がスマホも触れるようになってるみたいだから便利だと思う」
「そうなん？…ほんまや！確かにこれは便利やなぁ」
俺の言葉を聞いて、スマホをスワイプし商品のハイテクさを実感している。
テレビショッピングかってくらいの反応だ。
「じゃあ、次俺」
「うん！」
あおいさんから受け取った包みを今度は俺が開ける番となる。
改めて見てみると、俺が渡した物よりも一回りは大きい。
一体何が入っているのか、心をワクワクさせる。まるで子供に戻ったようだ。
「あ、あのな」
包みを開ける途中、あおいさんが心配そうにゴニョゴニョと口を動かしていた。
俺もそうだけど、自分が選んだプレゼントを開けられるのって緊張するんだよな。
でも、どんな物であってもあおいさんから贈られる物であるなら、すごく嬉しいし、大切にする。
「あっ」
袋を開けると、赤い毛糸のマフラーが姿を現した。
「ご、ごめんなー。下手くそで」
「えっ？」
「それ、初めて編んだんやけど」
「ええっ！手編みなのっ!?」
俺の驚いた声に、こくりと小さく頷く。
膝の上に置いたマフラーを広げると、特に目立ったほつれもないし、普通に売り物として見てもおかしくない出来だと思う。
しかし、彼女は不安そうにこちらを見ていた。

「せっかくなら、作ってみよう思うたんやけど、時間もかかったし上手にできたかどうか…」
「全然心配する事ないよ！すごいよあおいさん！」
綺麗に作られたそれをじっくりと観賞した後に、ゆっくりと自分の首へと巻いた。
先程まで外の風が当たっていた首筋を覆い、暖かい。肌触りもすごく良い。
「これなら寒い冬も乗り切れるよ。ありがとう」
「よかった～」
ようやく安心したのか、不安そうな顔が柔らかな笑みを見せる。
俺のために時間をかけて丁寧に作ってくれた事が何よりも嬉しかった。
「もうずっとこのマフラー使って生きて行こう」
そう心に決めた。
「それは大袈裟やない？」
抑えきれない嬉しさに、感情が声に出ていた。
「でも、私もこれからはあらたくんから貰った手袋使わせてもらうな！」
あおいさんの手が、シートに着いていた俺の手に重なった。
それに応えるように、手をひっくり返し、きゅっと手を握り合う。
「えへへ」
照れたように笑う彼女の手の温もりが、手袋越しにも伝わってくる。
『(気に入ってくれたみたいで良かった)』
と、綺麗な星空を見上げながら同じ事を考えていた事は、互いに知る由もない。
「好きやで。あらたくん」
「俺も、あおいさんが大好きだよ」
２人の想いがこれからもずっと続きますように。
しばらくして、散歩に出ていた皆が帰ってきた。

「あおいちゃん！小牧くん！ただいま～」
先頭を歩く各務原さんが手を振り、俺たちもそれに応えるように軽く手を振り返す。
時間にして３０分くらいだったろうか。
そんなに時間は経っていないというのに、濃密な時間だったなと改めて思う。
「おぉっ！プレゼント交換したのか～」
いち早く、俺が先程までしていなかったマフラーに大垣さんが気がついた。
「よかったな～、イヌ子。無事渡せたみたいで。おっ、もしかして、それが小牧からのプレゼントか？」
俺たちの向かいに腰を下ろした大垣さんが、あおいさんの手元に注目する。
大垣さん、すぐに変化に気づくなんてさすがの洞察力。
「せやで～。可愛ええやろ？」
あおいさんが手袋を着けた手を見せつける。
なんか恥ずかしいな。俺が女子にプレゼントする物のセンスが問われているかのような感覚に陥る。
「へぇー、手袋か。中々のセンスだな小牧」
「結構可愛いの選ぶんだね」
まじまじとあおいさんの手を見る大垣さんと志摩さん。
「だ、駄目だったかな…」
褒められているのか怪しい反応に不安を感じる。
初めて家族以外にクリスマスプレゼントを贈ったために、周囲の反応が過剰に気になるのだ。
「ううん、すごく良いと思う」
「だな～。周りでこういった事してる奴らがいなかったから比較とかは出来ないが、あたし個人としてはいいと思うぞ！」
しかし、その考えは杞憂だった。
よかった。プレゼントって当たりはずれは無いと思ってたけど、喜んでくれるかどうかというのは別な気もするしな。

ふと、安心していると次は斉藤さんと各務原さん、さらには鳥羽先生までも手袋に視線を向ける。
「それじゃあ、これが犬山さんからのプレゼントですね」
「は、はい。そうです」
座っている俺の前に先生が屈む。
「お互いクリスマスに合うプレゼントで素敵ですね」
先生はにっこりと俺ら二人を見て褒めてくれた。
「恵那ちゃんから聞いたけど、手作りなんだよね！すごいよね！」
「ね～、私だったら作れないもん」
2人もあおいさんがくれたマフラーに賞賛を送る。
なんだか、彼女が褒められるのって自分の事のように嬉しいな。
「斉藤さん達は知ってたんだ。プレゼントの事」
「あきに部室でマフラー編んでたの見られたみたいなんよ」
「みたい？」
「ついさっきまでその事黙ってたんや。お風呂でプレゼントの話になった時に聞いてびっくりしたわ」
「あー、大垣さんならやりそうだね」
その後、大垣さんの提案により、みんなでしばらく動画鑑賞をしたのちに各々テントで寝る事となった。
俺は一人で自分が持ってきたテントに入ると、意外と疲れていたようで、すぐに眠りについてしまった。
疲れを忘れる程に、今日1日のキャンプはとても有意義な時間だった。

「……さむ」
むくりと身体を起こすと、腰から肩が固まっているのが分かった。加えて、寝袋から出ようとすれば、一瞬で温もりが外の寒さに吹き飛ばされる。
慣れない寝袋での睡眠は身体がバキバキな状態で朝を迎えた。
時計は6時を回っている。
昨夜寝る前に各務原さんからキャンプの朝の日の出がとても良い

と聞いて早くに起きようと思っていたが、ベストな時間に目が覚めたようだ。
どうやら、まだ外は薄暗い。テント内からでもまだ日が出ていない事が分かった。
テント内で着替えていると、外から話し声が聞こえてきた。どうやら、他のみんなも起きてきたようだ。
先程からジュージューという音と、香ばしい匂いがしているという事は、朝食担当の各務原さんはさらに前から起きていたようである。
「あっ、あらたくん」
テントを出ると、最初にあおいさんが声をかけてくれた。
その彼女の手には昨夜自分がプレゼントした手袋があった。かという俺も、頂いたマフラーを着用して外へ出ている。
「あおいさん、みんなもおはよう」
『おはよー』
皆が囲うテーブルまで近付くと俺以外の全員が揃っていた。
鳥羽先生も昨日あれだけお酒を飲んでいたのに二日酔いにもなっていないようだった。さすがはグビ姉。
そして、テーブルの上には湯気を纏った美味しそうな朝食が既に並んでいた。
「どうぞー、おかわりたくさんあるからねー」
ちょうど各務原さんと、手伝っていた志摩さんの朝ごはんが完成したようで、みんなで手を合わせる。
『いただきまーす』
メニューは玄米ごはんと、焼き鮭に、野菜と納豆の味噌汁。
各務原さんが言うに、「ニッポンの朝ゴハン」なのだそうだ。
さっそく、温かいご飯を口へと運ぶ。
焼き鮭美味っ！
「はぁー、味噌汁あったかー」
「うま！これ昨日のお肉？」
「うん、割り下と生姜で大和煮にしてみましたー」
「鮭と玄米あうなぁ」

「うむ」
朝食のメニューの説明を受けながら次々とご飯を食べ進める。
手が込んだ上に、栄養のバランスも考えられた日本食。どれもすごく美味しい。
「あらたくん。よく眠れた？」
「うん。テントで寝るの初めてだったけど、ぐっすりだったよ。身体が少し痛いけどね」
「私も最初そんな感じだったんやけど、だいぶ慣れたみたいや」
「あたし寒くて途中でカイロ追加したわー」
朝ごはんを食べながらみんなで会話をするのも、食事の楽しみの一つ。
しかも、友人達と朝ご飯を共にするのも初めての体験だった。
「あ、日が出てくるよ」
高原が明るくなり、富士山の蔭から眩しい太陽が姿を現す。
……。
「まぶし…」
「まぶしいねぃ」
もの凄く景色は綺麗なのだが、日光が眩し過ぎて目を開けるのが厳しい。
それでも、こんな景色は中々お目にかかれない。
「なぁ小牧、今回のキャンプどうだった？」
大垣さんが朝日から視線を外し、俺に聞いてくる。
「うん！すごく楽しかった。みんなと来れて良かったよ」
それもこれも、あおいさんがキャンプに誘ってくれたおかげだ。
「あおいさん、俺にも声掛けてくれてありがとう」
「こちらこそ、一緒にキャンプできて楽しかったで」
「それでな、小牧…」
なにやら言いたげな顔をする大垣さん。
何だろうか。
「よかったら、このままあたしらの野クルに入らないかっ！」
「えっ」

予想だにしなかった言葉に驚きの声が漏れる。
そんな中、全員の視線が俺に集まった。
「えっ！小牧くん野クルに入ってくれるの!?やった～!!」
「いや、まだ入るって言ってないだろ」
各務原さんが嬉しそうに両腕を挙げるが、志摩さんの言う通り、俺はまだ答えを出していない。
「イヌ子の事とか色々あると思うが、そういうの無しに小牧自身の答えを聞かせてくれ！」
大垣さんの真剣な目。
女子だけの部に男子が入る事はあまり無いだろう。俺自身、誘われない限りは入部の事は考えていなかった。
でもまさか、部長である大垣さん自らに勧誘されるとはな。
「俺は…」
あおいさんの顔を見ると、こちらに気付き、ニコッと笑みを返してくれた。
（あらたくんがどうしたいかどうか。素直に答えればええんやで）
そんな風に言われている気がした。
「俺、今回のキャンプ本当にすごく楽しかったよ。また行きたいなって。一人でじゃなくて、こんな風に思い出が共有できる人達と来たいって」
みんな静かに俺の話を聞いてくれた。
「でも、本当にいいのかな？女子だけの中に俺が入るのって」
俺は、現在野クルのメンバーである3人に聞く。
「いいに決まってるよ！私は賛成!!」
各務原さんが1番に手を挙げて賛成の声を上げてくれた。
「あたしも異論はないぞ」
「私もや。あらたくんが来てくれたら、私はもちろん。みんな嬉しいと思うで」
各務原さんと大垣さんは頷く。
「分かった。…入るよ。むしろ俺からお願いさせて」
深々と頭を下げる。

「俺を野クルに入れてください！」
　すると、
「おう！こちらこそよろしく頼むぞ、小牧隊員！」
「やった～！部員が増えたよ！やったねリンちゃん！」
「分かったって。てか、私は部員じゃないし」
「そっかー、小牧くんは入部するんだ。私はまだ帰宅部辞められないよ～」
　暖かく迎えてくれる歓迎の声があがる。
　まさか、キャンプの最後にこんなに良い話しを頂けるとは思ってもみなかった。
「それじゃ、入部届を頂かないとですね。学校が始まったら職員室に来てくださいね」
「あ、はい。分かりました」
　鳥羽先生も笑顔でそう言った。
　先生には元々、入部の件について聞かれていたし、俺が正式に部に入る事になった事も喜んでくれているようだった。
「っ!?」
　突然、正面からの衝撃を受ける。
「あおいさん!?」
　ちょっとびっくりしたが、何とか倒れる事なく彼女の身体を受け止める事ができた。
「これからもよろしくな！あらたくん！」
　そう彼女は耳元で言いながら、思いっきり両手を広げてぎゅっと抱きしめてくれる。
　昨日は、周囲の目があるところでこういう事をするのが恥ずかしいという話をしていたのにな。
　俺は彼女の腰にゆっくりと手を回して、優しく抱きしめ返した。
「うん！よろしくね」
　そんな俺たちを見ている他の全員は、何も言わず暖かな目で見守っていた。
　その後、皆から色々な冷やかしを受けた事は言うまでもなく。

第2章　彼女と幼馴染

第十三話　「さん付け禁止！」

「今年も終わりやな～」
隣を歩くあおいが言う。
今年最後のバイトを終えた俺と彼女は寒空の下を、手を繋ぎながら家を目指し帰っていた。
あおいさんの手には先日のクリスマスキャンプでプレゼントした手袋が、そして俺は当人から贈られたマフラーを首に巻いている。
「明日からあおいさんは高山だっけ？」
元日から3日まで休みを貰ったあおいとあらたは各々冬休みの予定が入っていた。
「せやでー。家族で親戚の家に遊びに行くんや」
「いいよね。飛騨高山」
「リンちゃんもグループチャットで同じ事言うとったな」
「そっか。他のみんなもお休みなんだっけ？」
「あー、あきだけ元日から4日くらいまでフル出勤なんやて」
「ｏｈ…」
言われてみれば、挨拶事が行われるお正月にとって、大垣さんが働く酒屋さんは稼ぎ時でもあるからしょうがない。
「でも、初日の出は見に行けるんだよね？」
「そうみたいや。その後にバイト行く言うてたわ」
「でも良かったのかな。俺やひかりまで一緒しちゃって」
あおいからもお隣さんである、あらたとひかりの兄妹も有難い事に初日の出を見に行く事に誘われていた。
「もちろんや。なんならあきもそのつもりだったみたいやし、もうあらたくんも同じ野クルの仲間やん」
前回のクリスマスキャンプで正式に野クルとして迎えられた俺はこうしてあおいさんだけでなく、他の野クルのメンバーとの交流が増

えてきたのだ。
だが、今回は残念ながら各務原さんが浜松に帰ると言う事で、メンバー全員が揃うわけではなかった。
「ありがとう。ひかりもあかりちゃんと初日の出見るの楽しみにしてたから、妹さんから大きい車まで借りて運転してくれる鳥羽先生にも感謝しないとね」
「快く引き受けてくれて良かったわ～」
初日の出を見に行くメンツは小牧兄妹、犬山姉妹、大垣さんに鳥羽先生という中々の人数のため、先生が普段使用している車とは違う車で外出する事となっていた。
クリスマスキャンプといい、今回といい、鳥羽先生は本当に生徒想いの優しい方である。
「6時頃に先生が迎えに来てくれる言うてたから、うちの前集合でええかな？」
「うん、分かった」
今日はこの後家に帰って夕飯を食べ、明日に向け早く寝るつもりだ。
ぼーっとする事が多いひかりの準備を手伝うのが大変な事を考えると、余裕を持っていた方がいいだろう。
「あらたくんは正月に家族でどこか出掛けたりはせんの？」
家が見えて来たところであおいが言った。
特に出掛けるという事はなかったが、来客がある事を伝えていなかった事を思い出す。
「うん。親戚はみんな東北で親も休みが元日だけだから、ゆりな…従姉妹が遊びに来る事くらいかな」
家を前にして彼女の足が止まった。
「あおいさん？」
急に足を止めた彼女を心配し声をかける。
家までもう少しだというのに、どうしたのだろうか。
「従姉妹…って、女の子？」
「え、うん。そうだけど」

「いくつなん？」
「同い年、だけど…？」
「ふーん。そうなんや」
　すると、あおいは口を尖らせて再びスタスタと歩き始める。
　なんだかさっきまでより、少し歩くスピードが早いような。
「あのっ、あおいさん？もしかして、何か怒ってます？」
「別にー」
「いや、怒ってるよね！声に感情がこもって無いんですけど!?」
　ピタッと足を止めて振り返るあおいさんには、怒りマークの様なものが見えた気がした。
　顔は笑っているのになんか怖いです！
「別にあらたくんが、私の事はさん付けで、そのゆりなちゃん？って子の事を呼び捨てにしている事なんてぜーんぜんっ、気にしてへんよ～」
　いや、絶対気にしてるじゃないですか。
　と、心の中で思いつつも、これ以上怒らせない為に口にはしなかった。
「ゆりなとは幼馴染でもあるからさ。あとは親戚ってだけで、別に何かあるってわけじゃ」
「へー、じゃあ、いつになったら私の事は呼び捨てで呼んでくれるんやろな～」
　ズイッと一歩前に出るあおい。
　あらたはそれに少し気をされながらも、頭の中で色々と考えていた。
　初めてあおいさんと会った時。というか、女性は基本さん付けで、苗字呼びだし、下の名前で呼ぶなんて家族やゆりなを除けばあおいさんだけなんだけど、どうやらそういう問題でも無さそうだ。
「あおい…ちゃん？」
　ぷいっ。
　え～、そっぽ向かれたんですけど。
「その従姉妹の子が呼び捨てなら、私も呼び捨てにしてくれんと嫌や」

顔を背けてはいるが、頬が少し膨らんでいるのが分かった。
その可愛さに思わずほっぺたを突きたくなるが、余計に怒られそうなのでここは我慢する。
「じゃあ、…あおい」
こっ恥ずかしい気持ちになりながらも、ボソッと彼女の名前を口にする。
「……」
しかし、一向に彼女はこちらには向き直ってはくれない。
「あおい？」
「……」
「……あのー、そろそろこっち向いてくれないかな？」
もう一度名を呼んでみても反応がないので、手を添えて耳元で聞こえるように言うと、ようやくこちらに振り返ってくれた。
しかも、顔が真っ赤だ。なんだ、ちゃんと聴こえているじゃないか。
「機嫌治った？」
「……うん」
こくりと頷く彼女。
そんなあおいの姿を見て、思わずぎゅと抱きしめる。
「あらたくん!?」
自分でもいきなりこんな事をしてしまうなんて思わなかったが、自然とそうしていた。
胸の中で恥ずかしそうに声をあげる彼女を無視してそのまま頭をぽんぽんと撫でてやった。
ほんと俺の彼女可愛すぎる。
「いきなりハードル高い事させられたお返し」
「…だって、あらたくんが付き合い始めてからもずっとさん付けやから。……ほんまやったらちゃん付けでも嬉しかったんやけど、ゴニョゴニョ…」
と、少しずつあおいさんの……。いや、あおいの声が小さくなっていく。
普段冗談を言う事があたり前の彼女がたまにこうなるのを見ると、

いつものお返しに少しいじめたくなってしまう。
そんなギャップも俺は好きなんだけれど、それは本人には内緒だ。

◇◇◇◇◇

「うーん……むにゃむにゃ」
「おーい、ひかりー。そろそろ起きろー」
年を越して朝を迎えないうちに出掛ける時間が近づいて来ていた。
夕飯を食べて少ししてから俺よりも早く寝ていたひかりは、今も夢の中にいる。
そんな妹の肩を揺すって声をかけ続けた。
時刻は朝の５時４５分。
もうすぐであおい達と約束していた時間となろうとしていた。
「早く起きないと初日の出見に行けなくなるぞ～」
「…初日の出～？」
そこでようやく身体をむくりと起こし目を擦りながら言葉を話し出した。
「あ～、ポチこんな所にいたんだね。ヨシヨシ」
「誰がポチだよ」
そう言いながら、ベッドの横に膝をついていた俺の頭を撫でてきた。
完全に寝ぼけてるなこれは。
ちなみにポチというのは、ひかりが愛用している犬の抱き枕の事である。
どうやら、夢の中でポチと遊んでいたらしい。夢の中はなんでも有りだからな。生命の宿ったポチとでも遊んでいたのであろう。
その本体はというと、ひかりの横にベターッとくたびれていた。
「ひかりー。頼むー、起きろ～」
「んー？」
肩を揺すりながら、ほっぺたをぷにぷにとしてやると、ようやく重たい瞼が開かれる。

「あ～、お兄ちゃんだ～」
「うん、やっと起きたな。そろそろ迎えが来るから準備するぞ。初日の出見に行くから」
「そうだった～。初日の出～」
珍しく行動が早い（完全に寝坊してたけど）。
ひかりは立ち上がって顔を洗いにパタパタと洗面所を目指してかけて行った。
「父さん達寝てるから静かに、って聞こえてないよな」
俺が言葉を言い切る前に、ひかりが階段を降りていく音が聞こえた。
なら、先に玄関で待ってるか。
そうして、着替えに部屋へと戻ってきたひかりに声を掛けて一度外へ出た。
「さむっ！」
まだ日が昇っていないために冷えた外の空気が一気に身体を包み込む。
カイロや上着で対策をしてはいたけれど、外の寒さはそれを上回っていた。
「お兄ちゃん、お待たせ～」
予想よりも早く、ひかりが玄関のドアを開けて外へ出てきた。
「おー、早いな」
「えへへ、あかりちゃんも一緒だから楽しみ」
俺は少し乱れたひかりのマフラーを直してやりながら褒める。
ひかりも今日の初日の出は誘われた日から楽しみにしていたのかワクワクとした表情を浮かべていた。
再び立ち上がって家に鍵をかけてから、あおいの家の前へと移動する。

第十四話　「初日の出」

あおいの家から鳥羽先生の車で出てから数分、大垣さんの住むマンションの駐車場へと辿り着いた。
ポケットに潜めた温かいカイロを握りしめて、一度外へと出る。
「おーす、イヌ子に小牧。あけおめー」
「あけましておめでとう。今年もよろしくね、大垣さん」
「あけましておめでとー。むっちゃ寒いなぁ」
車を降りるとすぐに大垣さんがマンションから出て来た。
メンツが揃った事により、野クルメンバーによる年始の挨拶が交わされる。
「先生もあけおめっス」
「あけましておめでとう。大垣さん」
「いやー、車出してくれてサンキューです」
「特に用事も無かったですし、構いませんよ」
大垣さんの言う通り、鳥羽先生も貴重なお休みだというのに、こんなに朝早くから車出しを買って出てくれた事は大変ありがたい。
そのため、俺やあおい達を迎えに来てくれた際にも改めてお礼を伝えた。
「大垣さん。今日もアルバイトあるんだよね？」
「まぁな。いいよなー、お前らは休みが貰えて」
「あはは、まぁ俺は特に出掛ける用事は今の所無いんだけどね」
「じゃあお前があたしの代わりにバイト行け！」
「それは無理だよ」
服の襟を掴まれながら、ガクガクと頭を揺らされる。
ちょ、朝早いからやめてください。貧血で倒れちゃうかもしれない。
「あき。初日の出見てからバイト行くん？」
あおいの言葉により、大垣さんの手がパッと離される。
「おう！イヌ子はこの後高山か？」

「お昼からなー。観光してくるわー」
「かーっ、いいねぇ」
あおいに続いて車に乗ろうとする千明。
それを見て、車の中にいたはずの同行者2人ががいない事に俺は気付く。
瞬間。あらたの横をささっと追い越す小さな人影があった。
「あきちゃん！あけおめーっ!!」
「キャアアアアアアアッ!?!!」
駐車場に大垣さんの甲高い声が鳴り響く。
あおいの妹であるあかりちゃんが、大垣さんの上着を背後からガバっ、とたくし上げてもう片方の手で掴んでいた雪玉を侵入させたのだ。
こんなクソ寒い中アレやられたらタダじゃ済まない。ご愁傷様です。
見ての通り、あかりちゃんも姉同様。ちょっとした悪戯っ子である。
かという俺は、新年早々そんなあかりちゃんに、お年玉を要求されたわけだが…。
「ち…チビ犬子」
上着の裾を掴んでバサバサと衣服に入った雪を追い出す千明。
それを見て、嬉しそうにあかりちゃんはピースする。
声を震わせながら、あかりちゃんの名前、ではなく、お得意のニックネームで呼んだ。
チビ犬子か。俺も初めて会った時そっくりだと思ったが、確かにあおいをちっちゃくしたら、あかりちゃんと瓜二つだろうな。
ていうか、実際子供の時だったら本当に似ていたのではないのだろうか。
今でさえそっくりなのだから。
「ね～。お兄ちゃん」
「なんだ、ひかりも車降りてたのか？」
「うん、あのね。あかりちゃんが持ってた雪玉ひかりが作ったの。か

た～いやつ」
なるほど。ひかりも共犯だった訳か。
「おっ！もしかして、その子が小牧の妹か？」
俺と一緒にいるひかりを見た大垣さんが、こちらへと向き直る。
そういえば、妹がいる事は教えてたけど、会うのは初めてだもんな。
しかし、ひかりはというとササッと俺の後ろへと隠れた。
「うん。ほら、ひかりも挨拶」
「あ、あけましておめでとうございます。ひかり、です。はじめまして！」
俺が挨拶をするよう促す。
ひかりは基本人見知りが激しい。
あおい達とは家も隣で顔を合わせる機会があるから慣れたようだが、相変わらず初対面の人に対しては緊張してしまうようだ。
ちなみに、鳥羽先生の時も少しぎこちなく挨拶をしていた。
「おう！よろしくな～。こっちはあまり似てないのな」
「まぁ、妹だしね」
性別が一緒の犬山姉妹に比べたら、俺達は差ほど顔は似ていない。
俺は父さん似だし、ひかりは母さん似だ。
ただ、ちゃんと血は繋がっているので、正真正銘の兄妹だ。
「なーなー、あきちゃん！お年玉ちょーだい!!」
「んなっ!?」
「たくさんバイトしとるてあおいちゃんにきいたで!!」
すると、あかりちゃんが両手を出して、にこーっ、とした子供らしい明るい笑顔で大垣さんにお年玉をせがんだ。
俺もやられたが、さらに雪玉を背中に入れられるというプラスアルファな事をされたにも関わらず、追い討ちを掛けられるとは、大垣さんも災難だ。
「いたずらばっかするような奴にやるものは無い！」
しかし、千明はビシッと断った。
なんだろう。不思議としっかりと断れる大垣さんがカッコよく見える。

さっきの雪玉のせいで少し寒そうにしてるけど。
「えぇ～、にーちゃんはくれたんやけどなぁ～」
「なん、だと…」
バッ、と背後にいた俺を信じられないという目で見てくる。
「こ、小牧はお年玉あげたのかっ!?」
「うん。元々用意はしてたし。ひかりも貰ったしね」
「まじか、イヌ子までも…、大人だな」
「そ、そう?」
さっきまでの目とは違い、尊敬の眼差しを向けられる。
「あおいお姉ちゃん。ありがと～」
「ええで～。ひかりちゃん可愛いもんなぁ。ちょっとだけやけど、好きな物買うてな!」
「うん!」
車に先に乗ったあおいに近付いて改めてお礼を言うひかり。
そんな俺の妹の頭を、あおいは優しくなでなでとする。
ひかり自身も、こんな風に優しくしてくれるあおいの事を大変好いているみたいだ。
鳥羽先生が迎えに来る前に貰った時も、ちゃんとお礼を言っていたし、そんな妹の成長した姿を見て誇らしかった。
「んぐぐ、じゃあ、あたしもあげるべきか…。まてよ、小牧の妹もいるし2人分か…」
「あー、大垣さん。あかりちゃんのは冗談だよ?」
「せやで。あきは気にせんで大丈夫や」
一応、ひかりにも渡そうとは思っていたが親に止められていた。あおいの家も同様だった。
その辺りは親がするもの。なのだそうだ。
でもまぁ、彼氏彼女の妹くらいであれば少しくらい問題ないだろう。
なにせ、俺もあおいも自分でお金を稼げるようになった訳だし。
ただ、大垣さんからも貰うとなると、兄や姉として申し訳なく思う。
「いや!お年玉とは言わないまでも!キッズ2人には、これから行く

山で売店の食べ物を奢ってやんよっ!!」
『おぉ～っ！』
一同が部長の男気？いや、女気？に拍手を送る。
「本当にいいの？大垣さん」
「いいって事よ。バイトもしてるし、あたしからのほんの気持ちって事で。でも、あんまり高いもんはダメだぞ！」
「分かった。ありがとう」
「ありがとな～」
俺もあおいも、そう言ってくれる大垣さんに感謝を伝えた。
そうして、ようやく初日の出が見れるという身延山に向けて、先生の運転により車が発進するのだった。

◇◇◇◇

「さむーっ！むっちゃさむっ!!」
冬の寒さを感じながら、山を登るロープウェイを待つ。
「あかりちゃん、私のカイロ使って」
「わー！あんがと～!!でも、ひかりちゃんの方が寒くなるんやない？」
「いっぱいあるから大丈夫だよ」
寒そうにしているあかりちゃんにシュバっと大量のカイロを見せるひかり。
よくポケットの中にそれだけの量のカイロを仕込んでいたな。
どうりで家を出る時にカイロのストックが少ないなと思ったわけだ。

「そういえば初日の出なんて何年ぶりやろ」
「言われてみるとそうだなー」
ロープウェイに乗り込み、山を上り始めると、あおいがそんな事を言う。
今回の発案者である大垣さんも久しぶりなようだ。
「あらたくんは初日の出とか見に行くん？」

「東北にいた時は毎年家族で海まで見に行ってたよ」
「それはまた豪華だなー」
「海からの日の出も綺麗なんやろうな～」
「うん、だからこうして山の上から見るのは初めてなんだよね。すごく楽しみだよ」
去年までの事を思い出して、ひかりの方を見ると、あかりちゃんとガラスにへばり付き、ロープウェイが昇って行くことに興奮していた。
なんとも微笑ましい光景だ。
日の出を見に行く事自体は、毎年行っていたと言っても過言ではない。
ただ、山から見るのと海から見るのとでは、全く別物だろう。
その事に、自分自身もワクワクしていた。
「なら、いつか海にも一緒に見に行こうな！あらたくん!!」
グッと拳を握るあおい。
「だね。こっちの地方の海からの日の出も興味あるかも」
「つってもなぁ～。どちらにせよ、車とかでないと行けないよなー」
そう大垣さんが言い、三人で鳥羽先生を見る。
「なら、来年は海まで見に行きましょうか」
『先生！』
あらたを除く2人は先生に、ひしっと抱きつく。
流石に俺は、そんな風に喜びを体現する事は出来ないが、笑顔で答えてくれる先生を改めて尊敬した。
「でも、来年であれば小牧くんもバイクで犬山さんと二人で見に行く事もできるんじゃないですか？」
「あ、そういえば」
先生が言う通り、来年にもなれば、バイクの二人乗りが解禁される。
「一応、教師としては免許を取ってから1年が経っても、あまり二人乗りをオススメする事はできませんが」
「でも、せっかくならみんなで見に行きたいです。あおいも同じ意見だと思いますよ」

ちらっと先生からあおいに視線を向ける。
「せやね。今度は、なでしこちゃん達も一緒やとええね」
「そうですか。なら、またその時に考えましょうか」
「そうっすねー…って、時に小牧」
皆で来年の予定を考えていると、大垣さんが不思議そうに俺を見てきた。
「お前、イヌ子の事呼び捨てで呼んでたっけか？」
「そういえばそうですね。もしかして、何かあったんですか！」
鳥羽先生までも興味を持ち、ことの件について追及してくる。
特に鳥羽先生は、俺たち二人の関係に興味津々なようだ。
「あー、あおいからの希望で昨日からです。呼び捨てになったのは」
「だって、私というものがありながら他の子と仲良うしとるからやでー」
「何!?けしからんぞ小牧！修羅場か！修羅場なのか!!」
「どういう事なんですか小牧くん！黙って見過ごす事はできませんよっ!!」
あおいの言葉に過剰に反応する２人。
大垣さんはいつも通りの面白そうだ、という表情で、先生は本当に心配の表情を浮かべて距離を詰めてくる。
そんな様子を、ホラ吹き顔のあおいは遠目に嬉しそうに見ていた。
「いや、それは誤解というかなんというか…」
目的地に着く前に、従姉妹のゆりなについて、２人にも話すことにした。
「そういう事だったんですね。安心しました」
「なんだ～。ドロドロな関係を期待してたのによー」
「いや、そんな期待されても」
なんとか誤解が解けた所で、ロープウェイは停車する。
気がつけば山の上まで上りきっていたみたいだ。
施設の中に移動すると、すでに日の出を目的に来たであろうお客さん達で賑わっていた。
「売店もうやっとるんや」

「外寒いし助かるね」
「せやなー」
中へ進むと、お土産やら食べ物が売られていた。
子供達もいるし、こうした施設が開かれているのはありがたい。
新年早々働いている皆さんも、お疲れ様です。
「あきちゃんお団子買うてー」
「しょうがねーなー。んじゃ、これがお年玉っつー事で。小牧妹も食うか？」
「食べたいです～」
ひかりも手を挙げて大垣さんに団子をねだる。
そして、あかりちゃんを先頭に、お団子売り場へと移動する事に。
さっきまで緊張していたひかりも、だいぶ慣れてきたみたいだ。
「よもぎ一本ください」
「俺もよもぎで」
「じゃ、あたしはゆばで」
俺とあおいは自然の風味が味わえるよもぎを、大垣さんは高級そうなイメージのある湯葉が練り込まれたお団子をチョイスする。
「では、苦死を切って幸運を願います」
と、お団子屋さんのお兄さんがお団子が刺さった串の端っこをハサミで切った。
「苦死を切るために串を切るんだな」
「ダジャレや」
そして、皆注文したお団子を受け取る。
「ふふん！」
あかりちゃんが自慢げに、ぺかーっと、２本のお団子を両手に持って掲げる。
ひかりも同じく両方の味を手に持っていた。
「まさか２本づつ頼むとは…」
「２人とも育ち盛りやからなぁ」
「ありがとね、大垣さん」
「おー、気にすんな」

さて、お団子を貰ったは良いものの、どこで食べるかと辺りを見渡すとある事に気づく。
「あれ、鳥羽先生は？」
「さっきまで一緒やったけど」
あおいも気がつき、背伸びをしながら周りを見渡した。
「そこで甘酒配ってますよ」
すると、人混みの中から片手に甘酒を持った鳥羽先生が戻ってきた。
アルコールではないとはいえ、「酒」という単語への嗅覚は流石である。
結局、俺たちも先生に導かれ甘酒を貰い、外にあった木製のベンチに腰を掛けてから、甘酒とお団子を味わった。
その後、先生の提案で日の出前にお参りを済ませる事となった。
長い階段を登ると、意外にも参拝者はそこまでは多くなく、スムーズに自分たちの番が回って来る。
チャリンチャリンと各々がお賽銭を入れて、手を合わせる。
ちなみに俺は毎年、良いご縁をという事で五円玉を納めていた。
「あきちゃんがお年玉たくさんくれますように」
「んっ!?」
「にひひー」
あかりちゃんがイタズラ顔で、しかもわざと声に出して言った。
本当に良い性格してるなこの子は。
「日の出まであと１０分、そろそろやな。なぁ、あらたくんは何お願いしたん？」
スマホで時計を確認したあおいはあらたを見て言う。
「とりあえず俺や家族、あおいや友達のみんなが健康に暮らせますように、って感じかな。あおいは？」
「私も似たようなもんやで」
「そっか（本当は、これからも、あおいと楽しい時間を過ごせますように。とも願ったけど）」
「うん（ホンマは、あらたくんとずっと一緒にいられますように、とも

願ったけど）」
境内から身延山山頂へ移動してから数分。
「出てくるで」
「うん」
正面の山々の隙間から、どんどんと周囲に明るい光を放ちながら、とても綺麗な太陽が姿を現した。
「綺麗やなぁ」
「クリキャンの時も朝日が綺麗だったけど、ここからの景色も富士山と相まってすごいね」
「めっちゃレビューみたいな事言うやん」
本当にそう思ったのだから仕方ない。
「おーい。下りるぞー」
「えっ？」
しみじみと余韻に浸っていると、いつの間にやら、大垣さんが少し離れた所から手を振っていた。
「もう？」
「グズグズしてると初詣の客がいっぱい上がって来てヒドイ事になるぞ」
言われてみれば、先程までに比べるとこの辺り一帯の人の数が増えて来ている。
上がるのは楽だったのに、下りるのには苦労しそうだ。
「それに、次の初日の出も見に行かねーとさ」
にしし、と笑みを千明は浮かべた。
『次？』
何の事かさっぱりな俺らは、皆同じ疑問を口に出して言った。

番外編　「教育実習生」

教育実習に入ってから2週間が過ぎた。
大学四年生になると、約1ヶ月の実務教習が設けられる。
いわば、今までの三年間で培ってきた学びを活かす集大成と言うわけだ。
「あ！先生ーー！」
不意に声をかけられて振り向く。
そこには、5年1組の生徒2人の姿があった。
俺が実習生として、面倒を見てもらっている担当の先生が受け持つクラスの生徒達である。
下駄箱付近を通った俺に気付いて声を掛けてくれたようだ。
「小牧先生さようならー」
「はい、さようなら。気をつけて帰るんだよ」
『はーい！』
元気良く返事をする男女2人の生徒は手を振りながら昇降口をかけて行く。
俺もそんな2人に軽く手を振ってから再び目的の職員室へと戻る事にした。
「小牧先生」
下駄箱から移動して、職員室の扉を開けようとすると、名前を呼ばれ立ち止まる。
先程の生徒達とは違い、大人の声だ。
「校長先生。お疲れ様です」
振り返ると、そこにはこの学校の校長である古畑先生の姿が。
「お疲れ様です。どうですか？実習の方は」
「とても勉強になります。担当の先生もそうですが、生徒のみんなも元気で優しくて1ヶ月でここを離れるのが勿体ないくらいです」
「ははは、そうですか。それは良かった。早川先生からも、物覚えの良い学生さんだと伺ってますよ」

「そんな事は、」
こうして目上の人に褒められると、照れてしまう。
あらたは校長直々のお言葉に内心喜んだ。
「おっと、お呼び止めして申し訳ない。それでは私はこれで」
「はい」
校長先生も職員室の方に用があったのだろう。
扉に手をかけて先に中へと入っていく。
俺も続いて職員室へと入り、自分が使わせて頂いているデスクの方へと向かった。
「早川先生、頼まれていた荷物理科室に運んでおきました」
「おっ、もう終わったんですか。さすがですね」
俺の隣に座るのは、教育係として面倒を見て頂いている早川先生。
先程までは、先生からの頼みで明日使う教材を運んでいたのだ。
「本当に助かりました」
「いえ、他に何か手伝う事はありますか？」
「そうですね。では、今日提出してもらった宿題の採点をお願いしてもいいですか？これが答えが書いてある用紙なので」
そう言われて、プリントと答えの用紙を手渡される。
「それが終わったら、今日は終了という事で」
「分かりました」
用紙を受け取り、本日最後の課題に取り込む。
小学生の問題だけあって、答えの用紙を見なくとも採点ができそうな問題が殆どだ。
だからといって、採点にミスをする訳にも行かないのでしっかりと答えと見比べながら採点を進めていく。
じはらくして、残り数人といった所で、早川先生に声をかけられる。
「そういえば、ひかりは最近どうです？元気にしてますか？」
「はい。この前美術部のコンクールで賞を貰ったみたいなんですよ。今日も部活で遅くなるみたいです」
「そうですか。昔から絵を描くのが好きな子でしたからね」
そう、何を隠そうこちらの早川先生はひかりやあかりちゃんの小学

生時代に担任をされていた先生でもある。
偶然にも、俺はそんな2人の母校に、教育実習生として通わせて頂いている訳だ。
初めて世間の狭さを実感している。
「早川先生、採点終わりました」
そんな世間話をしながらも、採点を続け、与えられた仕事を終わらせる。
「ありがとうございました。それじゃあ一応、こちらでも確認しますんで、今日はあがってもらって大丈夫ですよ」
赤ペンを記入したプリント等を早川先生へと返却をする。
「それではお先に失礼します」
俺は帰り支度を済ませて席を立ち、早川先生や他の先生方に挨拶をした。
「はい、お疲れ様でした。来週もよろしくお願いします」
そうして、学校を後にして職員用の駐車場へと足を運んだ。
高校卒業前に車の免許も取り、今では通学やらバイトの時にも車を利用していた。
もちろん、高校から使っていたバイクも家に置いてある。休みの日など、天気がいい日はツーリングにも行っていた。
「ん？」
車の鍵を開けて座席に座り、バタンとドアを閉めた所でスマホが鳴った。
あおい
「あらたくん、今大丈夫？」
連絡をくれたのは、犬山あおい。
俺の大切な恋人だ。
高校一年の冬から付き合い始め、今でもその関係は続いている。
現在、あらたとあおいの2人は同じ教員を目指し、共に地元の大学の教育学部にまで通っていた。
まさか2人とも同じ夢を持つようになるとは、付き合い始めた時には想像も付かなかった。

あらた
「大丈夫だよ。今ちょうど帰る所」
あおい
「よかった～。私もさっき終わった所なんやけどな。明日休みやし、良かったら夕飯一緒に食べに行かへん？」
「夕飯か。そういえば、各務原さんが甲府にお勧めのお店があるって教えてくれたっけ」
何日か前に、なでしこからキャンプの写真を送られた際に、新しくできた飲食店の情報をもらった事を思い出す。
あらた
「了解！それじゃ、俺の車で行こうよ。一旦家に帰ってから出掛けるって事でいいかな？」
あおい
「賛成～。ほな、また後でな～」
そうしてスマホの画面を閉じ、車を自宅に向けて走らせた。
◇◇◇◇

一度家へと帰り、スーツから普段着に着替える。
実習が始まった事で、着慣れないスーツを着る機会が増えた。
高校までの制服とは違い、汚れや皺が付かぬよう気づかう点が多く、正直少し面倒だ。
しっかりとスーツをハンガーにかけてから、再度出掛ける用意をする。
今日は両親共に仕事でまだ帰ってきてはおらず、家には誰も居なかった。
一応、置き手紙をリビングのテーブルに残し、玄関へ。
すると、
「あ、お兄ちゃん。ただいま」
ちょうど靴を履いていたところで、玄関の扉がガチャリと開き、妹のひかりが帰ってきた。
俺たちが通っていた本栖高校の制服に身を包んだひかりは、そのま

ま靴を脱いで家に上がろうとする。
「あれ？どこかにお出掛け？」
最近はスーツで出掛ける事が多かったあらたが、私服で家を出ようとしている事に気づいたひかりが言った。
「うん。これからあおいと」
「あおいちゃんと？デート？」
「デートっていうか、普通に２人で夕飯食べてくるだけだよ」
「お兄ちゃん。それは世間ではデートっていう」
「……それもそうだな」
「鈍感」
あおいとの関係が長年続き、昔に比べデートというものを過剰に意識する事は無くなっていた。
子供の頃とは違い、ぼーっとする事が少なくなったひかりは、もっともな発言をする事が増えた。
当たり前といえば当たり前の事だが、兄としてはちょっとだけ寂しい。
「とりあえず、今夜は俺の分の夕飯はいらないから」
「うん、お母さんには私から言っておく。楽しんできてね」
「それじゃ、いってきます」
にっこりと笑い見送る妹に、昔の面影を感じる。
成長しても、変わらないものはある。

車を自宅からあおいの家の前に移動させて、待つ事数分。
スマホを操作していると、車の窓ガラスを軽くコンコンとノックされる。
顔をあげると、そこにはいつも大学に行く時や出かける際によく見るシャツにロングスカート姿のあおいが立っていた。
「あらたくん、おまたせ」
「お疲れ様。あおい」
車の窓越しに、助手席に座るよう促す。
「やっぱりあらたくんも着替えたん？」

「うん。スーツのままだとちょっと息苦しい気がして」
「ほんまそれなー。肩とか凝るもんなぁ」
それはスーツだけのせいではないような。
チラッとあおいの方を見る。
「どうかしたん？なんか変？」
視線に気付いたあおいは、どこかおかしな所が無いかと服を確認する。
「ううん、そんな事ないよ。いつも通り可愛いと思う」
「……それ、実習の時とか他の女の人に言うへんやろな？」
「えっ、言ってないよ」
「そう？ならええわ」
それを聞いて、何故か上機嫌なあおい。
「あらたくんカッコええから、たまに心配になるんよ」
「それなら俺だって、あおいが他の男に言い寄られたりしてないか心配だよ。高校の時だって何人かに告白されたって言ってたじゃん」
「それはあらたくんもやろ？バレンタインデーの時とか凄かったやん。それに私はちゃんと断ってたし」
「俺だってチョコとかは受け取れないって返したり断ったりしてたよ」
「……」
「……」
お互いに言ってて少々恥ずかしくなる。
いつまで経ってもこの空気感だけは慣れない。
しかし、互いがどれだけ想っているのかは、それ以上言葉にせずとも分かった。
「そ、それより、夕飯どこで食べよか」
あおいが先に沈黙を破り、話題を変える。
「前に各務原さんから甲府の方に新しい飲食店教えてもらったからさ、そこなんてどうかな？」
「なでしこちゃん？あぁ、この前のソロキャンの写真送ってもらった時にそんな事言うてたなぁ」

どうやら、他のメンバーにも連絡をしていたらしい。
「ほなそこにしよか」
「それじゃあ、しゅっぱーつ！」
「おーっ！」
◇◇◇◇
「ごはん美味しかったなぁー、あらたくん」
「そうだね。メニューも豊富だったし、また行きたいね」
「せやね」
夕食を終えた2人は、あらたの運転で帰りの道中にいた。
「そういえば、そっちの実習はどうなん？」
窓の外を見ていたあおいがこちらを向いて聞いてくる。
「うん。楽しいよ、やっぱり色々勉強になる」
「早川先生が担当や言うてたよな」
「そうそう。優しくていい先生だよね」
俺が実習を受けている小学校があかりちゃんの母校という事は、昔からこっちに住むあおいにとっても同じ母校なのである。
その当時から早川先生は長年勤めているのだそうだ。
「あおいは？学区的には隣の小学校だけど、やっぱり雰囲気とか違うの？」
信号が赤になり、車を停車させる。
そして、こちらも同じ質問を投げかけた。
「うん。クラスも少ないし、生徒数もそこまで多く無いから落ち着いた雰囲気やと思う。教育担当の先生も優しいできるお姉さんな感じやな」
「そっか」
俺が早川先生に指導して頂くのと同じように、あおいも同性の先生から、色々と教えてもらっているようだ。
2人は、大学を卒業する年になり、本格的に将来について話す機会が増えてきた。
車を走らせながら、話を続ける。
「あおいは、こっち方面での就職希望？」

「うん。やっぱり地元が1番やし、実家から通えたらベストやなって。あらたくんは？」
「俺もこっち希望かな。最悪でも山梨県内であれば嬉しいんだけど」
「お互いどうなるか楽しみやな」
　互いに期待を膨らませる。
　俺個人としては、あおいと離れて遠キョリになるのだけは避けたい。
「あとは、卒業論文の事とかも考えんとな」
「そうだね。実習が終わればそっちに集中しなくちゃいけなくもなるし」
　現状２人の成績であれば教員免許の取得は難しく無いところまで来ていた。
　単位もすでに殆どが取れており、残すは大学４年の必修科目のみ。
「そういえば、小学校の生徒さんとかはどう？あらたくん身長も高いし、人気あるんやない」
　あおいの言う通り、俺は高校から身長が伸び、付き合った当初同じぐらいの身長だったあおいとの差は、今や１０センチ以上となっていた。
「どうだろう。でも、一緒に遊んだりお話も沢山してくれる生徒も多いから嫌われては無いと思う」
「相変わらず消極的やなぁ」
「そう言うあおいはどうなの？子供達に変な嘘吹き込んだりしてないよね？」
「そんな事せえへんよ。嘘つくのはあらたくんだけで十分や」
「なんでだよ」
　冗談や。と笑いながら言うあおい。
　ほんとそう言う所は昔から変わらないなこの子は。
「でもそっか。楽しんでるんやなぁ」
　ふぅ、と息を吐いた彼女の様子を見て違和感を覚える。
「もしかして、何かあった？」
「え、なっ、なんで？」

あおいは驚いた顔をする。
この反応は、やはり何かあったのだろう。
本人もそんな事を聞かれるとは思っていなかったようだ。
「彼氏として側に居るようになって何年経ったと思ってんの。それくらい分かるよ」
俺はそんな彼女に笑みを浮かべて言った。
「悩みって程の事やないんやけどな」
「俺で良ければ聞くよ。どんな些細な事でも。俺だっていつもあおいには助けてもらってばかりだ」
上手くいかない時、困った時。いつもあおいは俺の話をちゃんと聞いてくれて、側にいてくれた。
だから、俺もそんな彼女からの相談も真剣に一緒に考えるし、力になりたいと思ってる。
「だから、話してみなよ」
「……あのな、」
そうして、ゆっくりとあおいは話し始めた。
事の発端は、あおいの実習先の数人の生徒にあるようだ。
どうやら、あおいの事を先生と呼んでくれないらしい。
「他の子らはな、ちゃんとあおい先生とか犬山先生って呼んでくれるんやけど、何人かは呼んでくれないんよ」
実習生とはいえ、学校内では先生として扱われる。
そのため、職員の先生方や生徒からも名前に先生を付けて呼ばれるのが普通の事なのだが、それがあおいの悩みの種らしい。
「ちなみになんて呼ばれてるの？」
「…あおいちゃん」
「あー、…なるほどね」
正直、ちょっとだけ生徒の気持ちも分かるような気がした。
「どないしたらええんやろうか。先生として頼りない言う事なんやろか」
「そんな事は無いと思うよ」
「どうして？」

なぜ断言できるのか不思議そうに首を傾げるあおい。
「俺もさ、中学の時とか小学生の時に、俺たちみたいに教育実習生の人が来た事あるんだけど、やっぱり先生達と比べても生徒側と歳が近いのもあるし、接しやすいと思ってたんだよね」
現に当時俺の周りでも、実習生の事をちゃん付けだったりあだ名を付けて呼んだりする事もあった。
もちろん、先生っぽくないとか、そういう事ではない。親しみやすさの意を込めて、そう接する生徒もいるというわけだ。
だから決して、頼りないとかそういう話ではないと思う。
ただ、いざ自分がなってみると不安に感じてしまうのは確かなこかもしれない。
「そういうもん、なんやろか」
「前向きに考えてみようよ。それは心を開いてくれてる証拠だと思うよ。別に言う事を聞かない生徒達って訳でもないんでしょ？」
「…そやな。いい子達やと思うで」
「なら、きっと大丈夫だよ。まぉ、式典とか礼儀作法が関わる行事とかだと、ちゃんと先生って呼ぶように注意しなくちゃいけない事もあるだろうけど」
あまりにもあだ名呼びが多くなってしまうと、変な癖が付いてしまう恐れもあるので適度な配慮は必要だと思う。
そこらへんの基準が難しい。卒業論文に取り上げても良さそうなくらいの議題だ。
「なるほどな～。考えてみると色々な意味があるんやね」
「っと言っても、あくまでこれは俺の意見に過ぎないわけだけどさ。でも、あおいが頼りないとかそんなんじゃないって事だけは言い切れる」
真剣な面持ちで彼女に向かって言う。
「だから、自信持って。あおい先生」
俺の言葉を聞いて安心したのか、落ち込んだ雰囲気の表情から、明るさが戻ったのが分かった。
「うん。まだ二週間近く残っとるし、先生って呼んでもらえるよう頑

張ってみる」
「その息だよ！」
「話聞いてもろて、なんやスッキリしたわ～」
両手を上げて伸びをする。
その姿を見て、俺も一安心する。
「ありがとう」
「ううん。あおいは笑った顔が1番だから」
「ほんま、いつもありがとう。大好きやで、あらたくん」
それを聞いて危なくハンドルが誤作動を起こしそうになる。
なんとかそれを耐え、引き続き安全運転を遂行する。
珍しく気持ちを言葉にしてくれた事が、何より嬉しかった。
「顔赤いで？」
「そんな事ない」
脇見できないので本人も赤くなっているのではないかと考えたが、確かめられないので、なんだか悔しい。
実際、自分の顔が紅潮しているのは分かっていたので、強く否定する事は出来なかった。

「せめて、名前やのうて苗字でもええから一度は先生って付けて呼んでもらえたらええな」
それを聞いて、俺は一つ思うところがあった。
「苗字だと、これから先不便になるかもしれないな」
「どうして？」
「だって、いづれは同じ苗字になるんだし」
「えっ、それって…」
それはいつになるかまだ分からない。
だけどそれは、そう遠くない未来の話。
「ほんまあらたくんは……」
その後も、たわいもない話をしながら、2人で楽しく帰路へとついた。

第十五話　「ダイヤモンド富士」

「なるほどダイヤモンド富士かぁ～!!」
　山道を登る車の中であおいがスマホを片手に言う。
《ダイヤモンド富士》
　富士山火口から昇る日の出で、ダイヤモンドのように見えるためこう呼ばれます。
　そして、ダイヤモンド富士は富士山の高さがある分通常より遅い日の出になります。
「今向かってる富士川町高下での日の出って、いつくらいなの？大垣さん」
　同じく横からスマホを見ていたあらたが千明に聞く。
「身延山での日の出は７時ぐらいだっただろー。確か高下だと７時５０分頃みたいだ」
「その間に移動して日の出を２回見るって事なんですね」
　車を運転しながら話を聞いていた鳥羽先生も、大垣さんの狙いに納得したようだ。
「へぇーおもしろーい。楽しみやなぁ、ひかりちゃん！」
「うん。ダイヤモンド…すごく綺麗だと思う」
「あきちゃんやるやんかー!!」
「へへーっ」
　千明が自慢げに腕を組む。
「だけど、この山道だと結構ギリギリになりそうですよね」
　窓の外を見ると、道路にはまだ溶けきっていない雪が、ちらほらと目に入った。
　車通りが少ないとはいえ、先生もここまで安全運転で走行してくれている。
　だが、この山道はかなり時間をロスしていそうな気がしていた。
「大垣さん時間は？」
　先生も同じ考えなのか、時間を気にしている。

「あと3分です」
「…間に合うかしらっ」
スマホの時計を見ると、すでに４７分を回っていた。
大垣さんの情報だと多く見積もっても、あと数分しかない。
「先生なら、きっと大丈夫ですっ」
運転席のすぐ後ろに座っていたあかりちゃんが、身を乗り出して檄を送る。
「フッ…そうですね」
鳥羽先生のメガネがきらりと光って見えた。
「必ず間に合わせて見せますっ!!」
その掛け声と共に、車がスピードを上げた。
『うわあああぁっ!!』
突然の加速により、車が揺れる。
一応、法定速度は守っているようなのだが、カーブを急ハンドルで曲がるせいか遠心力が凄い。
「っ!あらたくんごめんなっ」
俺と同じく後部座席に座るあおい。
あおいは、曲がるのと同時に遠心力に負けて、体重をこちらに預けてきた事を謝罪する。
右腕から、ふくよかな感触が伝わってくるが今はそんな事を心配する余裕はない。
「大丈夫だよ…って、うわぁっ!?」
次は反対に遠心力が掛かり、逆にあおいに覆い被さるような体制になってしまう。
なんだこの「頭文字〇」のようなドリフトさばきはっ!
こんな車内壁ドンは、ときめきのかけらもない。
「楽しいねー。あかりちゃん!」
「きゃははっ!ジェットコースターみたいやね!」
前の座席に座るキッズ２人組はアトラクションを楽しんでいる様子。
「あ、あらたくん。大丈夫?」

「うん…。なんかごめん」
ようやく車が安定したところで着席し直す。
「あ、先生!!そこを曲がったらもうすぐですっ!!」
ふーっ、ふーっ、と呼吸をする鳥羽先生。
そんな先生にあおいがナビをする。
最後のコーナーを曲がると、正面から陽の光が姿を現し始めた。
『見えたっ…、これが…、ダイヤモンド富士初日の出…!!』
坂を登りきると、そこには煌びやかな陽光を放つ太陽が富士山の火口……、
ではなく、遥か高い所に位置していた。
「すごい…、昇っちゃってますね」
車を降りて、最初に口を開いたのは鳥羽先生。
皆は何も言わず、駐車場から見える太陽を見つめていた。
「……」
「……」
「……あっ」
その沈黙を、スマホを見ていた千明が破った。
「ダイヤモンド富士の日の出。７時２０分だったわ…」
うん。それなら、こんなに日が昇っちゃってるのも納得だ。
そうして、それを聞いた全員の視線が千明に集中する。
「間違えちった!!」
それに応えるように、千明はおどけて誤魔化した。
『～～～～っ！』
「どわぁぁぁっ!?」
しかし、犬山姉妹はその対応に黙ってはおらず、揃って雪玉を投げつけ始めたのだった。
まぁ、自業自得かな。

◇◇◇◇

「それじゃ、行ってくるな～」
鳥羽先生と大垣さんと別れ、一度家に帰った俺は、あおい達犬山一

家の見送りに来ていた。
「うん、気をつけてね」
「お土産楽しみにしとってな！」
「にーちゃん達も一緒に来ればええのに～」
　車に先に乗っていたあかりちゃんが窓から顔をひょこっと出して言う。
「こら、そんな無茶言わんの！」
　それを聞いたあおいが妹に注意する。
「え～っ、もっとひかりちゃんと、にーちゃんと遊びたかった～」
「家族水入らずの時間を邪魔はできないよ。あかりちゃん、帰ってきたらまた遊ぼう。ひかりにも言っておくから」
　当のひかりはというと、帰って早々眠いと言って、今は布団の中で寝ている。
「ほんま！じゃあ帰ってきたらまたゲームしよな！」
「うん」
　それを聞いて安心したのか、あかりちゃんは顔を引っ込めた。
「ごめんなあらたくん。あかりが我儘いうて」
「ううん、あかりちゃんはひかりの大事な友達だし、俺にとっても妹みたいなものだからさ。あおいも、帰ってきたらひかりと遊んでやって」
「それはもちろん！」
　グッと拳を握って答えてくれた。
「でも、」
　スッと、俺の耳元にあおいが顔を近づけて来る。
　それに思わずドキッとしてしまい、身体が硬直する。
「私がいないからって、浮気しちゃダメやで」
「!!?」
　と、小声で言われた後にフッ、と耳に息を吹きかけられる。
　すぐさま、バッと耳を押さえて離れるとあおいはニコニコと笑っていた。
「し、しないよっ！」

「ほんまに～？」
そう言いながら、あおいは意地悪な顔をしてまた距離を詰めてきた。
「だって、あおいは俺のっ」
「俺のー？何なん？」
「～～～っ！」
流石に、彼女のご両親にも聞こえてしまう距離で言うのは恥ずかしく、言葉に詰まる。
とはいえ、うちの両親とあおいの両親共に、俺ら2人の関係を知ってはいるのだが、俺にも羞恥心というものがあるわけで。
「あははっ、ごめんごめん。ちょっといじわるしてもうたわ」
「分かってるなら聞かないでよ…」
俺は掌で顔を隠しながら言った。
やはり、どうしても俺の方が恥ずかしい思いをさせられてしまう。
「でも、さっき言ったのはほんとやで！ゆりなちゃん今日から来るんやろ？」
「うん」
そう、今日の夕方には従姉妹のゆりなが新年の挨拶に家を訪ねてくるのだ。
だが、俺はゆりなの事は親戚や幼馴染、という事でしか考えられない。
ましてや、あおいが心配するような恋愛的感情は持っていなかった。
「でも、大丈夫だよ。離れてても、俺にはあおいがいるんだから」
「わっ」
俺はそう言いながら、あおいのニット帽を下げた。
顔を見られたくなかったからだ。
「とりあえず、高山には気をつけて行ってきてね！」
「ふふっ。それじゃ、帰ってきたら2人でも出掛けような」
「うん、分かった」
「じゃあ、いってきます」

「いってらっしゃい」
そして、あおい達犬山家の皆さんを見送った。
新年早々、からかわれすぎだろ。
そう思いながら家に戻り、あおいとのデートの予定を考えるのだった。

◇◇◇◇
「あけましておめでとうございます！」
家のリビングで、新年の挨拶が交わされる。
日が暮れてしばらくすると、家のチャイムが鳴った。
その訪問者は予想通り、東北から遊びに来た従姉妹の小牧ゆりな。
ゆりなは玄関から母さんに案内されて、このリビングに通されて今に至る。
「おお、ゆりなちゃんあけましておめでとう！元気にしてたかい？」
ゆりなの姿を見て立ち上がった父さんが、ソファへと招き入れる。
「はい！おじさんとおばさんもお元気そうで」
礼儀正しく一礼してから、ゆりなは腰をかけた。
「あらたも久しぶり！」
「うん、久しぶり」
ほぼ1年ぶりの再会にも関わらず、二人はごく普通に挨拶を交わす。
「あれ？ひかりちゃんは？」
リビングにひかりの姿が見当たらない事に彼女は疑問を感じていた。
「寝てる。今朝初日の出見てきたから眠いみたい」
「そうなんだ」
「けど、そろそろ起こさないと夜寝れなくなっちゃうよな。ちょっと起こしてくる」
「相変わらずお兄ちゃんしてるんだ」
「別に普通だよ」
そうして、ひかりを起こしてから、ふらふら歩く妹と手を繋いでリ

ビングへと戻る。
「ひかりちゃーん。おはよう！」
「おはよ～う。あれ？ゆりなお姉ちゃん？」
目をくしくしと擦りながらソファに座るゆりなを確認するひかり。
「ふわぁ～。まだ眠い」
「結構寝てたけど、まだ寝れるのか」
放って置いたら春まで寝続けてしまうのではないかと心配になりながらも、一度ひかりにもソファに腰を下ろさせて手を離す。
「あかりちゃんは～？」
「もう高山に行ったよ。帰ってきたら一緒に遊ぼうねって」
「わーい」
「あかりちゃん？」
俺たち兄妹の話を聞いていたゆりなが口を開いた。
「隣に住んでるひかりの同級生の子」
「へー、友達がお隣さんっていいね」
「うん！」
ゆりなに撫でられながら、ひかりが元気に返事をする。
喋っているうちに、少しづつ目が覚めてきたようだ。
「はい、ゆりなちゃん。紅茶で良かった？」
「あ！ありがとうございます」
お茶を淹れてきた母さんにお礼を言い、俺もカップを受け取る。

「そういえば、身延山からの初日の出はどうだったんだ？」
お菓子を摘みながら、ゆりなからの近況報告や、東北にいるおじさん達の事を話していると父さんが聞いてきた。
「すっごく綺麗だったよ～」
「うん。山からの日の出初めて見たけどすごく良かったよ。あと、ダイヤモンド富士ってのがあるみたいなんだけど、それは時間が合わなくて見れなかった」
「ほぉ～、山からの日の出も良さそうだな。母さん、今度一緒に見に行ってみるか」

「そうね～」
　それを聞いて、ゆりなが目をパチクリとさせた。
「えっ、家族で見に行ったんじゃないんですか？」
「私たちは行ってないのよ。行ったのはあらたと、ひかりだけよ」
「さっき話したあかりちゃん達と見に行ったんだよ。部活の顧問の先生に車出してもらって」
　そう言って、俺は紅茶を啜る。
「部活？あらた部活入ってんの？」
「うん。野外活動サークルっていうキャンプとかアウトドアをする部活。まぁ、去年の年末に入部したばかりで日は浅いけど」
「へぇ～、楽しい？」
「うん。部員の皆んなも面白いし楽しいよ」
「それじゃ、その人達と見に行ったんだ」
　それを聞いて納得したゆりな。
「あかりちゃんのお姉ちゃんがあらたと同級生で、同じ部活なんだよ」
　すると、俺の隣に座る父さんが付け足して説明する。
「あっ、だからそのあかりちゃんも一緒だったんですね」
「ふふっ、お父さんったら」
　それを聞いた母さんが、含みのある笑い方をする。
　この後の一言で、空気が変わった。
「ただの同級生じゃないでしょ？」
「む、それもそうだな」
「？」
　母さん達の会話にゆりなは首を傾げる。
「だって、あおいちゃんはあらたの彼女でもあるじゃない」
「っ!!?」
　驚いた顔をしたゆりなは次の瞬間、足元に紅茶の入ったカップを落とした。
「ちょっ!?ゆりな!!?大丈夫!?」
「火傷してないかい!?」
　ゆりなの近くに座っていた俺と父さんが、いち早く動いた。

「だ、大丈夫です。少し靴下が濡れちゃったけど」
幸い、紅茶も殆ど飲み干していたうえに、そこまで高い位置からではなかったのでカップも割れる事はなかった。
「よかったわ～。ゆりなちゃん、靴下洗濯するから一度脱いでもらってもいい？一応足も洗いにお風呂場に行きましょ」
「はい、すみません」
そうして、ゆりなは母さんに連れられて一度洗面所の方へと移動する。
残った俺と父さんはカーペットを拭いたり、落ちたカップを片付け始めた。
「ゆりな、どうしたんだろ？」
「あらたよ、我が子ながら罪な男だな」
「へ？」
その時、父さんの言った事の意味はよく分からなかったけど、新年早々の波乱の幕開けとなったのは確かだった。

第十六話　「あおいの告白」

「あおいちゃ～ん、早よう行こ～！」
「走るとコケるでー。そんな急がんでも大丈夫や」
　先を行くあかりと離れぬよう落ち着かせるあおい。
「それにしてもむっちゃ寒いなぁ」
　高山に着いた次の日、年始早々観光客でも賑わう三町へと繰り出していた。
　今夜は平湯温泉で雪見露天を満喫する予定でもある。
「あおいちゃんあおいちゃん！お土産屋さんがあるで！」
　通りを歩いていると、あかりが私の袖を引っ張りお店の方を指差した。
「あらたくんやあき達にも買ってこ思うとったし、せっかくやから、寄っていこか」
　明日までこっちにいる事を考えれば、お土産を買うには早いような気もするが、ひとまず妹のリクエストに答えるとしよう。
「わーっ！和風の物がいっぱいやね、あおいちゃん」
　店内に入るとポーチや手拭い、簪やヘアピンなど和のアクセントの入った雑貨も多く並んでいた。
　食べ物もええけど、あらたくんには何か形に残る物も贈りたいんやけど。
「あ」
　すると、目に入ったのは飛騨高山で有名な「さるぼぼ」。
　その中から、交通安全と書かれた生地をつけている人形を手に取ってみる。
　あらたくん、バイクにも乗るしこれええかもな。
「何見とんのー？」
　横からひょこっとあかりが顔を出し、手の中を除いてくる。
「あっ、さるぼぼやん！でもそれ男の子っぽい色のやけど…あ！にーちゃんへのお土産～？」

何か言うまでもなく、自分や友達へのお土産ではなく、彼氏に対してのお土産だとあかりはすぐに気がついた。
「そういえば、ひかりちゃんから聞いたんやけど。従姉妹が遊びに来るみたいな事言うてたな」
「うん。ちょうど、うちらが帰る日までいるみたいや」
「へぇ～、私も会ってみたいわー！」
あかりの言う通り、タイミングが合えば挨拶するチャンスはあるかもしれない。
ゆりなちゃん。どんな子なんやろ。

◇◇◇◇

「え～っと、ゆりな…さん？」
何故か自分の部屋で正座をさせられている俺、小牧あらた。
正面には、いつも勉強やら宿題やらをする為に腰掛けている椅子に足を組んで座る従姉妹の姿があった。
「何故俺は座らされているのでしょう？」
昨夜、ゆりなが紅茶を溢してから、特に会話をしないまま次の日を迎えた。
そして、朝食を食べて少しした後、今こうして俺の部屋へと呼び出されたのだ。
ていうか、勝手に俺の部屋に入ったのかよ。
という発言をしようにも、この不穏な空気の中で言い出す勇気が俺にはなかった。
「私聞いてないんだけど」
「な、何が？」
張り詰めた空気のまま話しは進んでいく。
「彼女が出来たこと」
何となく予想はしていた。
確かに、その辺の話しをしてからゆりなの様子が変わった事は俺も感じていた。

「それは、そういう話しにならなかっただけで、第一俺らの連絡手段なんて家電くらいしかなかったじゃん？」
そう。俺もゆりなも今は当たり前のようにスマホを使ってはいるが、お互いに高校に入るまでは持っていなかったのだ。
そのため、自分の元にスマホが来たのも山梨に引っ越して来てからだし、特に家電以外でのやり取りもなかった。
「それに、何でわざわざ教えなきゃいけないんだ」
と、あらたがブツブツと言っていると、足を組み替えたゆりなが口を開く。
「それで？あおいちゃん？だっけ。どんな子なの？」
「どんなって」
「あらた。中学でも何度か告白された事あっても誰とも付き合わなかったじゃん」
「何で知ってるの」
「企業秘密」
お前はどこかの情報屋か何かか。
「まぁ、そうだな。……普通に可愛い、と思う」
言葉にしてみると、すこぶる恥ずかしいと感じた。
心の中で思っていても、こうして誰かに恋愛の感情を伝えるというのは、本人に伝えるよりも恥ずかしさは勝った。
「それだけ？」
「後は、一緒にいると安心する」
「他には？」
「何か困ってたりしたら、力になってあげたいなって思ったり……って、質問多くないか？」
正直に答えているうちに、何故本人にも言えてないような事を従姉妹に話さなくてはいけないのかと疑問を持った。
「ちっ」
え、今舌打ちしました？俺が悪いの？
もうこの空間怖すぎるんですけど。
「まぁいいや。それで、あらたはその子が好きなんだ？」

「そりゃそうだよ。付き合ってるんだから」
何を当たり前の事を、と思ったその瞬間。
「…ゆりな？」
「えっ？」
目の前のゆりなの瞳から一滴の涙が落ちた。
そして、その涙の量は時間と共に増えていく。
「あれ？何で、だろ……」
視界を悪くする涙を拭いながら、ゆりなはその疑問を口にした。
「だ、大丈夫。何でもない、目にゴミが入っただけ」
「大丈夫なわけないだろ」
俺は机にあったボックスティッシュをゆりなに差し出した。
それを受け取ったゆりなは、涙を拭き、鼻をかみ、目は赤いが、なんとか顔から流れる水分は全て拭き取った。
スンッ、と鼻を啜ってはいたが、顔を上げて俺に視線を合わせてくる。
「どっちから告白したの？」
「今それ聞くか？普通」
「いいから。どっち？」
「……俺だよ。俺から告白して、あっちも俺の事好きだって言ってくれて、それで付き合うようになった」
「ふーん」
「ふーんって、こんな事、ひかりにも親にも話した事ないんだぞ！」
それは本当だった。
大垣さんや各務原さんの女性グループにはあおいが話したそうなのだが、俺は自分からこの事を他の人に話した事はなかった。
「まぁ、確かに可愛いもんね。この子」
「は？」
そう言うゆりなの方を見ると、彼女間の手には俺のスマホがあった。
その画面に売っているのは、クリキャンであおいと2人で撮ったツーショット写真。

それは、俺のスマホのロック画面であった。
「おまっ、いつの間に俺のスマホ！」
俺は手を伸ばし、スマホを取り返そうとする。しかしそれは、ヒョイっと綺麗にかわされた。
「あらたが女の子と2人でこんなに笑顔でいるの、初めてみた」
もう一度その画面を見ながらゆりなは言った。
「あーっ！泣くつもりなんかなかったんだけどな！」
「まさかとは思ったけど、お前、俺の事…」
俺がその次の言葉を言おうとすると、ゆりなは深呼吸をしてから、
「うん、好きだった。子供の頃から、あらたの事」
「……」
「……」
しばらく沈黙が続く。
「ゆりな、俺は」
「分かってる。あらたが私の事を恋愛対象として見てくれない事は昔から知ってたよ」
俺が言おうとした言葉は、全て先にゆりなが言う。
「でも、そっかぁ。あらたには出来たんだ。1番好きな人」
「ごめん」
「何で謝るの？」
「その、子供の頃から、ずっと幼馴染として一緒にいて、全然気付かなかった」
「そんなの当たり前だよ。内緒にしてたんだもん」
「ごめん」
「だから何で謝るのw」
今の俺にはそれしか言えなかった。
だけど、
「俺、山梨に来て。あおいと出会って、人を好きになるって、こんな気持ちなんだって初めて知った。だから、ゆりなの今の気持ち、俺にも分かるよ」
もし、あおいが俺以外の男を好きになったら。

考えるだけでも、凄く怖い。胸が苦しい。
「でも、あおいじゃなきゃダメなんだ。俺が好きなのは、これからもずっとあおいだけ。だから、ゆりなの気持ちには応えられない」
そう言って、俺は頭を下げた。
俺の事は分かってると言っても、礼儀として自分の言葉でちゃんと応えないといけない。そう思った。
「うん、分かった。ありがとう、あらた」
顔を上げると、涙を浮かべながら笑顔で笑う、幼馴染の姿があった。

◇◇◇◇
「ね！そろそろ帰って来るの？あおいちゃん！」
「お前、本当に会う気なのか？わざわざ帰りの新幹線まで遅らせて」
次の日。
あおいからそろそろ家に着くとの連絡を受け、外に出た俺の横にはワクワクとした表情で共に帰りを待つゆりながいる。
ちょうど連絡が入ったのはつい先程。ゆりなを駅に送る直前だった。
連絡があった事をゆりなに話すと、せっかくだから会っていく。というのだ。
予定していた帰りの新幹線を遅らせてまで会いたいとは、どういう精神力なんだろう。
自分でも言うのもあれだが、好きな人の好きな人だぞ。
できればそういった相手には会いたくないものなのではないか？
「あっ」
そんな事を考えていると、遠くの方から見慣れた犬山家のファミリーカーがこちらへ向かって来るのが見えた。
そして、車は俺たちの前に停まる。
「あらたくん。ただいま～」
車からは、あおいだけが降り。車はバックしながら、犬山家の駐車場へと入っていった。
「おかえり。あおい、高山どうだった？」

「むっちゃ寒かったけど、楽しかったで！」
　そんな会話をしながら、あおいは俺の隣にいたゆりなへと視線を移した。
「あ、もしかして」
「初めまして！あらたの従姉妹の小牧ゆりなです！」
　ゆりなはバッとあおいに駆け寄ってよろしくと握手をした。
「初めまして。犬山あおいです」
　ゆりなは昔から誰かと仲良くなるのが早かった。
　今もこうしてすぐに他人との距離を縮めている。
「私、これから家に帰るんだけど、あおいちゃんに言いたい事があって待ってたんだ？」
「言いたい事？」
　あおいは、何だろうと首を傾げながら聞く。
　俺も話したいとは聞いたけど、実際挨拶くらいのものかと思ったが、どうやらそうではないらしい。
「ねー、あおいちゃん！私あらたの事もらってもいい？」
「へ？」
「はっ!?」
　予想だにしない発言に、俺もあおいも面食らう。
「何言ってだゆり、がっ!?」
　と、肩を組むような形でゆりなに口を塞がれ、何も話せなくなる。
（おいおいおいおい！何がどうなったらそんな話しになるんだよ!!）
　ガッチリとロックされた俺は反論するどころか、身動きすら取れない。
　こいつ、女子のくせしてめちゃくちゃ力強いんだよな。
　ぽかーんとしたあおいを前に、俺はもがくが何もできないまま、ゆりなが話しを進める。
「私、あらたに告白もしたんだ」
「えっ？」
　あおいは言葉を失いながらも、微かな反応を見せる。
「まさかあらたに彼女が出来てたなんて知らなかったし、言うつもり

は無かったんだけど、居ても立っても居られなくて。ごめんね？」
「ま、まって、えっ？」
笑みを見せながら事の経緯が、あおいに伝えられる。
あおいが戸惑うのも当然だ。
会って早々こんな話、困る以外の反応なんて出来るはずがない。
「でも、あらたはあおいちゃんがいるからって言うんだけど。あおいちゃんがＯＫなら別にいいよね？」
今まで聞いた事のない意地悪なセリフがゆりなの口から出る。
正直、俺も何で今こういう状況になっているのか検討もつかないでいた。
しかも、ゆりなは全然力を抜かず、未だに俺の口は塞がれたまま。
だが、そんな動けないままの俺の腕に、あおいが突然抱きついてくる。
「え…、ええわけないっ!!あらたくんは私の彼氏やっ！私のや!!」
あおいは今まで見せた事のなかった悲しい表情で、涙を浮かべながら言葉を続ける。
「相手が誰やろうと関係無いっ！私は、ゆりなちゃんみたいな幼馴染でもなければ、過ごした時間も短いかもしれへん！」
彼女の言葉に、あらたもゆりなも何も言わず、話を聞く。
「でも、あらたくんを好きって気持ちは負けへんもん！どんな人があらたくんを好きになっても、あらたくんの事が１番好きなのは、わたしやっ!!」
あおいは声を荒げながら激昂する。
力強い視線をゆりなに向けながら言い放った。
「だからっ、あらたくんは、絶対に譲れへん！」
その想いを、言葉を聞いて、自分の瞳からも無意識に涙が溢れる。
俺は、あおいと付き合い始めた日の事を思い出していた。
あの時、告白したのは俺からだけど、あおいはこんなにも俺の事想ってくれてたんだ。
「……分かった」
「へっ？」

「もー、降参！こんなに想い合ってる2人の中に入る度胸、私に無いもん」
いつもの軽いゆりなのセリフと同時に、俺の口元から手が離れる。
「ごめんねー、あおいちゃん。試すような事しちゃって」
未だ涙を浮かべるあおいに手を合わせて謝罪するゆりな。
「試すって？」
解放された俺がゆりなに聞いた。
「あおいちゃんの事。あらたから聞いたし、すごく良い子なんだろうなって思ってたんだけど、どうしても本人の言葉を聞いて確かめたかったんだ。だからちょっと、意地悪な事しちゃった」
「ほんとだよ…」
ゆりなの言葉を聞いてようやく納得したのと同時に全身の力が抜けた。
「本当にごめんね！あおいちゃん。まさかそんなに泣かせちゃうとは思ってなくて」
「ううん…」
あおいも急な展開について行けず、首を振るのがやっとの様子だ。
「これからもあらたの事よろしくね！あっ、でも何かあったら相談してね。これ私の番号」
そう言って、スマホの番号が書かれたメモ用紙が手渡される。
いつの間にそんなの準備してたんだ。
「それじゃ、私帰るから」
「あっ、おい！駅まで送ってくって」
「今は私とじゃなくて、あおいちゃんといてあげなよ。本当掻き回すような真似してごめん。でも、私の気持ち言えて良かったよ」
「お前なぁ…」
「じゃっ！そういう事だから、2人ともお幸せにね！」
「あっ、ゆりな！」
ゆりなは駅の方に向かって走って行く。
名前を呼んでも止まる事はなく、どんどんと彼女との距離が離れていった。

ピロン
ゆりなの姿が見えなくなって、スマホにメッセージが届く。
『たまには、東北にも帰ってきてね。それと、あおいちゃんに私嫌われちゃったかもしれないけど、いつか仲良くなれたらなって思うから、また遊びに行くね』
「……本人に直接言えよ」
そんな事を呟きながら振り返ると、あおいの目からは涙が溢れている。
「あおい、ごめんね。嫌な思いさせて」
俺はあおいに近づいて、彼女の頬を流れる涙を親指で拭ってやる。
「悪いやつじゃ無いんだけど、昔から急に突っ走る事多くってさ」
涙は止まったが、瞳はまだうるうるとしていた。
「俺も、あおいの事は誰にも負けないくらい好きだよ。だから、これからもずっと、あおいの側にいるか、らっ!?」
「あらたくんっ!」
再び、あおいの目からは涙が溢れ、俺の胸に飛び込んでくる。
「怖かったよっ!あらたくんが遠くに行ってしまう気して」
「だっ、大丈夫だよ。遠くになんて行かないから。ねっ?」
ぎゅーっ、と抱きしめられ、あおいは全然離れない。
俺は子供をあやすかのように、頭をぽんぽんと撫でてやる。
こんなに取り乱した彼女は、初めて見た。
「あらたくん…」
「!!」
上目遣いでこちらを見るあおいに、胸が高鳴った。
泣き止んだばかりの女の子に、こんな事思うのも変かもしれないけど、とても可愛く、愛おしく思った。
「……ッ!?」
俺は、不安そうに見つめてくる彼女の頬に、優しく口づけをした。
急な出来事に、あおいは顔を真っ赤にして、顔を隠すように俺の服に顔を埋めた。
「なんか…、そういうのずるいわ」

「えっ、何で？」
予想外の反応に俺は困惑する。
正直言って、俺も何故今そんな事をしてしまったのか分からなかったけど。
とりあえず、安心して欲しいという気持ちが、身体を自然と動かした。
気がつけば、日は沈み、辺りはだんだんと暗くなり始める。
街灯が点いていく中、俺たちはしばらく二人でそのままでいた。
通行人がいなかった事が、本当に幸いだったなと、二人は帰宅してから思った。

第3章　山中湖キャンプ
第十七話「次のキャンプ」

冬休みが終わって1週間。
正式に野クルに入部してから、何度目かの活動日にて。
「えっ、山中湖？」
「そうそう。あたしとイヌ子、それと恵那も行く予定なんだが、小牧も一緒に行かないか？」
落ち葉焚きの後始末をしながら話す、千明とあらた。
なでしことあおいは、使ったマグカップ等の食器類を洗いに水道へ行った所だ。
「次の休みに行こうって昨日から話しててさ。生憎、なでしことしまりんはバイトみたいなんだが、小牧はどうだ？」
野クルで唯一、バイトをしていなかった各務原さん。
だけど、年明けすぐに姉の桜さんが身延駅から近い蕎麦屋さんでバイト募集の張り紙を見つけてくれた事で、ようやくアルバイトに就ける事が決まったらしい。
そのため、今回企画されたキャンプには不参加のようだ。
「うーん、特に予定は無かったかな。今週はバイトも休みだし」
「ほんとか！」
「うん。お邪魔じゃなければ参加させてもらおうかな」
「邪魔な訳ないだろ。イヌ子も喜ぶぞ！それに小牧はもう野クルの正式なメンバーなんだから遠慮する事ないんだぞ！」
そう言って肩を叩きながら、にししと笑顔を見せる千明。
「それに、キャンプ場とかで、もしもイヌ子がナンパでもされたら、」
「俺も行く。いや、何が何でも一緒に行く」
「切り替えはえーな！（つっても、シーズン的にあたしら以外殆どキャンパーなんて居ないんだろうけど）」
大垣さんに乗せられていると分かっていながら、キャンプに行く事

自体に興味が湧いた。
　年末に行ったキャンプの事もあって、他の場所でのキャンプ。楽しみにせざるを得ない。
「んじゃ決まりな！おーい、今度の山中湖キャンプ、小牧も行くってよー！」
　と、カップを洗ってきたであろう、なでしことあおいに向かい聞こえるように千明は言った。
　それを聞いて、あおいが先にこちらへと駆けてくる。
「ほんまに！」
「うん。楽しそうだよね山中湖」
「せやねー。まぁ、具体的な場所とかはあきが決めてくれるみたいやから、当日まで何処に泊まるのかは内緒みたいやけど」
「いいなぁ～。私も行きたかったな山中湖」
　残念そうな顔でなでしこがあおいの後ろから近付きながら言う。
「アルバイトならしょうがないよ。始めたばかりなら急に休みも取れないだろうし」
「うん。でも、写真とかは一杯送ってね！みんなが楽しんだ気分を味わうから！」
　本当に各務原さんはキャンプが好きなんだな。
　キャンプと聞いたら犬のように駆け寄って行きそうな姿が目に浮かぶ。
「分かった。って言っても、あおいや大垣さんの写真が殆どになるだろうけど」
　野クルで唯一キャンプに来れない各務原さんのために俺も写真をグループトークにアップしようとは思うが、おそらく普段からよく写真をアップする女子達の方が多くなるだろうな。

◇◇◇◇

「そんじゃまた明日な！」
「うん。また学校で」

「またな～」
　電車を降りて家に帰ると、俺とあおいの家よりも先に、大垣さんの住むマンションに着く。
　野クルの活動日は、いつもこの流れで3人で帰っている。
「明日はなでしこちゃんがバイトやけど、恵那ちゃんが来るみたいや」
　マンションを後にし、自宅へと向けて歩いているとあおいが言った。
「そっか。せっかくなら、斉藤さんも野クルに入ればいいのにね」
「実は一度勧誘したことあるんよ」
「えっ、そうだったんだ」
　予定が空いていたとはいえ、当日まで1週間も無いと言うのにキャンプに参加すると言うのなら、斉藤さんも前回のクリキャンを通じてキャンプに興味を持っているような感じはしていた。
　だからこそ、このタイミングでの勧誘は効果的な気がしたのだが、すでにそれは実行されていたらしい。
「前のクリキャンで、あきと恵那ちゃんとお風呂に入ってる時にな～。でも、本人はまだしばらく帰宅部でいたい、って断られたんやけど」
「そういえば、そんな事言ってたね」
　俺が入部するとクリキャンの時に、皆の前で決断した際に、そんな風な事を本人が話していたのを思い出す。
「強要は出来へんし。それに今はこうしてたまに一緒にキャンプできるだけでも十分楽しいしな～」
「うん。そうだね」
　にっこりとあおいが笑顔を見せながら言う。
　俺もそれに笑顔で答えた。
「何より、今はあらたくんもいるし」
　そう、ボソッと付け足された言葉は、風の音であらたの耳には届かなかった。
「せや！あらたくんもうバイト代で何買うか決めたん？」
　あおいは、はっ、と思い出したように聞く。
「うーん、そうだな。これからもキャンプするなら、やっぱり志摩さん

が使ってたようなローチェアが欲しいかな」
　あおいの質問に答えながら、俺はある事を思い出す。
「そういえば、前のクリキャンの時にさ。あおいと一緒に椅子買おうって話したよね。あおいもまだ希望が変わってなかったら、」
「うん！私はそのつもりやったよ」
　俺が言葉を言い切る前にあおいが先に言う。
「よかった～。あらたくん覚えててくれたんやね」
　覚えてた、という訳ではないけれど、あおいが嬉しそうなので、とりあえずは良しとする。
「それじゃ、キャンプ地に行く途中とかで買えたらいいよね。山中湖周辺にもアウトドアのお店はあるだろうし」
「ほなそうしよか。あとで、あきにも寄ってもらえるよう連絡してみるな」
「うん。お願いね」
　未だシュラフしか持っていない、自分のギアが増える事に期待を膨らませながら、早くキャンプ当日にならないかと、あらたもあおいも心の中で思うのだった。

第十八話　「富士山駅」

電車に揺られてどのくらい経っただろうか。
外が寒かった事もあって、車内の暖房のおかげでだいぶ眠い。
俺たちは今、山中湖へ向かっていた。
野クルの部長である大垣さんの企画で決まった山中湖キャンプ。
今日は、そのキャンプ実施日なのだ。
「あらたくん、大丈夫？」
「ん、何とか」
かくん、と頭を揺らしたところで隣のあおいに声をかけられる。
「暖かくて少し眠くなっちゃっただけだから」
「大丈夫だぞ小牧」
２人で話していると、あおいの隣から大垣さんがひょこっと顔を出す。
「恵那はあっという間に、夢の中へと旅だったからな」
前に屈みながら一番端に座る斉藤さんを見ると、眼を瞑りスースーと、息をする彼女の姿があった。
「恵那ちゃんはマイペースやなぁ」
そんな話をしながら少しすると、目的地の駅に到着する。

「富士山駅…」
『ついたーっ!!』
駅を出てすぐの所で皆両手を挙げて天を仰ぐ。
「でっかい鳥居がシブいぜー」
前に出てスマホのカメラを向ける大垣さん。
入り口に聳え立つ大きな鳥居の前で、ちゃっかり俺も左右にいる斉藤さんとあおいと共にピースをしてシャッターに収まる。
そうして、俺たちは足を進めた。
「くしゅん!!」
あおいが横でくしゃみをする。

「ちゅうか、むっちゃ寒いなぁ」
「昨日また雪降ったみたいだし着込んで来て良かったね」
「あらたくんはそこまで寒くなさそうやけど」
「え、俺？」
　あおいの言う通り、あらたは他の三人に比べれば、そこまで苦な表情を浮かべてはいなかった。
「まぁ、もともと東北の方に住んでたし、それなりには我慢できるよ。それに、あおいから貰ったマフラーもあるし」
　俺は首元に巻いたマフラーに触れながら言った。
「あらたくん…」
「おーおー、朝からお熱いじゃねーか。お二人さん」
「こっちが照れてしまいますなー」
　２人を横目に千明と恵那はニヨニヨとした視線を送る。
「それはそうと、あきちゃん。ここからはどうするの？」
「おう。周遊バスが出てっからそれに乗っ…てぇっ!?」
　瞬間、前を歩く大垣さんが踏み潰した雪に、脚を取られる。
「むわっ!!」
　気づけば、ずるっ、と盛大に宙を舞い。
　がしっ。
「ふわっ!?」
「あおい!!?」
　上着の袖を掴まれたあおいが前に倒れそうになる。
　そんな彼女の腰の辺りを、俺が瞬時に掴んだ。
　だが、
「うおっ!?」
　助けに入ったあらただったが、彼もまた脚を取られ足腰に力が入り切らず、前のめりに倒れそうになる。
　ピタッ。
　どうにかこうにか、三人縦に並んだ形で身体は留まり、ケガに至ることは無かった。
　が、この体制はキツい。

「え、恵那。たすけてくれ」
「ふふっ」
カシャ。
唯一巻き込まれなかった斉藤さんは、そんな俺たちをシャッターに収めるのだった。
◇◇◇◇
「山中湖行きフリーパスでお願いします」
「はい。一人１３４０円ね」
千明の案内により、バスの乗車券を購入しに来た一行。
「へぇー、二日間乗り降り自由かぁ。キャンプ場行く前に山中湖観光できるやん」
「だね。俺、山中湖行くの初めてだからすごい楽しみ」
大垣さんから手渡されたパスには、あおいの言う通りお得な情報が記されていた。
「まてまて、時刻表を見てみろお前ら」
「えっ」
それを聞いて、窓口の横に張り出された時刻表を見る。
「山中湖右回りが４本。左回りが５本……」
「これ、ちょっと降りてフラフラしてたらすぐ最終バスだね」
「ゆっくり…ってわけには行かなそうだね」
「だろ？」
あまりにも予想に反するバスの本数に、少々不安を覚えた。
「まぁ、あたしに任せとけって。バッチリ決めて来てっから」
そんな俺たちとは裏腹に、大垣さんは余裕の表情で親指を立てる。
なんと頼りになる佇まい。
「さすが部長だね」
「そうだろうそうだろう。…ってもうバス来てんじゃん!?」
うん、ごめん。前言撤回だ。
窓から見えるバス停には、すでに俺たちが乗る予定のバスが停車していた。
「急げお前らっ!!あれに乗り遅れたら、一時間待ちだぞっ!!」

「今バッチリて言うたばっかりやーん」
なんとかダッシュでバスへと乗り込んで、一番後ろの席に四人で腰を下ろす。
「で、これからどうするの？」
「ああ」
落ち着いた所でバスは出発し、斉藤さんが今後の予定を大垣さんに尋ねる。
俺とあおいも斉藤さん同様、今後の予定をまだ聞かされてはいない。
「まずカリブー富士吉田に寄って、次に山中湖の温泉に行く。んでスーパーで買い出ししてキャンプ場に到着。明日は山中湖観光だ」
『おー』
バタバタしたキャンプの始まりだったが、聞かされた今後の予定は、どうやらしっかりとしているようだ。
個人的にも楽しみな観光が、最後にあるというのも、なんだか乙な感じがする。
「温泉を外さない所がナイスやで、あき！」
「あたぼうよ!!」
「けど、なでしこちゃんもリンちゃんもバイト。先生も用事で来れんなんてなぁ」
「働いてると休みが合わなくなるし、仕方ないよ」
「人が働いてる時にするキャンプほど、楽しいもんはねーぜ」
クックックッ、と悪い笑みを千明が浮かべる。
「キャンプ場着いたら写真送ってやろーwケケケケ」
「ほんま悪いヤツやで」
「うん悪いヤツや」
キャンプ好きの二人からしたら、それなりのダメージなんだろうなぁ。ほんと悪いヤツやな大垣さん。
「でも、バイト決まって良かったよね。なでしこちゃん」
「今度みんなで寄ってこか」
今日のキャンプの楽しみを胸に、おしゃべりをしながら俺たちは、

最初の目的地であるカリブー富士吉田店を目指した。

この時の俺たちは、まだ知らなかった。

こんなに楽しいキャンプが、まさかあんな事になるなんて、思っても見なかったんだ。

第十九話　「大きなカリブーとカリブーくん」

『次は富士山レーダードーム前ー』
　ピンポーン。
　バスに乗り、まったりとした時間を過ごし、最初の目的地へと辿り着く。
「うー、やっぱさみーなー」
「だねー。さすが避暑地」
　バスを降りると、冷たい空気が肌を撫でる。
「ここって、……道の駅？」
「みたいやね」
　降りて最初に目に入ったのは、横長の建物。
　周囲には大きな駐車場もあり、観光客や地元の人らしき人たちで賑わっていた。
「富士ビール館だって、先生喜びそー」
「よっし！土産に買っていってやろうぜー」
「いや、俺ら未成年だから」
　確かに鳥羽先生なら喜びそうだが、それは頂けないぞ大垣さん。
「まぁ冗談はさておき、着いたぞ」
　大垣さんを先頭にした俺たちの前には、一際大きな施設が出迎える。
「これはでかいな」
「身延のカリブーより広いんやない？」
「ああ。この辺で一番でかい直営店らしい」
　屋根には、見覚えのあるアルファベットの文字が掲げられている。
　野クルにとっては、馴染みのあるアウトドアショップだ。
「あっ、カリブーくんや!!」
「カリブーくん？」
　店内に入って出迎えてくれたのは、二足歩行の鹿を模したマスコットキャラクター、『カリブーくん』であった。

こんな等身大サイズのカリブーくんを見るのは俺も初めてだ。
なんとも言葉には言い表せないオーラのようなものを感じる。
斉藤さんはというと、初めて見るのか首を傾げている。
「あっ」
しかし、あおいはいち早く自身の足をカリブーくんの方へ向けた。
「はぁ～、もふもふやぁ～」
自身の体重を預けるように、あおいは両腕でひしっと、カリブーくんを抱きしめる。
「もふもふだね」
どうやら、斉藤さんも気に入ったようだ。
「お子様だなぁ。抱きつくなよ」
千明は呆れ口調で言う。
「え、ええやんか別にー」
あおいは千明の発言に口を窄ませる。
「まったく、しょうがないヤツだなぁ。お前もそう思わないか。小牧」
しかし、俺の耳には二人の会話は届いていなかった。
なぜなら、
「これは抱きつかざるをえない」
「せやろー」
俺もしっかりとカリブーくんのもふもふ具合を堪能していたからだ。
俺とあおいが抱きついても、まだ余裕のあるカリブーくん。皆さんもおひとつどうですか！（▪３６０，０００）
「お前もかよ…」
千明はあらたを見て、ため息をつく。
だが、当然そんな事は本人に届いていないわけで。
「恵那ちゃん！写真や写真!!」
「はーい。あっ、小牧くんも一緒に入ったら？」
「えっ！何これ写真とか撮っていいの!!」
目を輝かせるあらたに恵那は、うんうん、と笑顔でうなづいた。
「お前らテンション爆上がりじゃねーか」

夢にまで見た等身大カリブーくんをバックに、写真撮影を満喫する三人。しかし、千明はそれに流されず、いち早く店の奥へ行こうとしていた。
「ほら、いつまでもそんな事してないで、さっさといくぞ…」
が、そこで彼女の足が止まった。
(あ、足が動かない!?)
まるで金縛りにでもあったかのように、千明はその場で硬直をする。
(まさか!?)
どうにか動かせる視線だけを、事の原因であろうモノ(カリブーくん)に向けた。
(こいつの間合いに、入っているのか?)
すると、千明の身体は吸い寄せられるように、途端にカリブーくんの方へと距離を詰めていく。
(ダメだ!引き寄せられるっ!!)
ぼふっ!
「……結局抱きついとるやないかい」
カシャカシャ。
先程までカリブーくんに興味を示そうとしなかった大垣さん。
理由は分からないが、こちらの世界へ来た証拠として、俺と斉藤さんは逃さずシャッターを切った。
◇◇◇◇
アウトドア商品の売り場まで進んでいくと、どれも目を引く商品ばかりが並んでいた。
「富士山が近いせいか。登山グッズが充実しとるなぁ」
「あっ、これ俺たちが使ってるのと同じシュラフだ」
俺は壁際にさげられていた見覚えのあるシュラフに手を触れる。
「こっちは私のと同じシュラフだ」
偶然にも、斉藤さんが所有している高級シュラフも並んでいる。あおいの言う通り、確かに充実した商品ラインナップだ。
「いつか登山とかもしてみたいなぁ」

「それもええなぁ。でも登山はもうちょっと暖かくなってからの方がええんやない？」
「確かに、今の時期は大変かも」
　言われてみると、確かにこの時期の登山はどちらかと言うとベテランの人が行ってそうなイメージだ。
「そうだね。春とか夏になったら行ってみようかな。もう少しカジュアルなハイキングとか」
「遠足みたいやで楽しそうやね。それなら私お弁当作っていくわ」
　あおいちゃんのお弁当。
　キャンプごはんも美味しかったし。考えるだけでお腹が空いてくる。
「春になれば、ちくわも連れて行けそうだし私も行きたいかも」
「お前らもう先の話してるのかよー。キャンプはこれからだってのに。……まぁ、楽しそうではあるけど」
　今はキャンプ中だと言うのに、もう来年度の予定の話をしている事に、面白くなって皆で笑った。
　ここに各務原さんがいたら、『登山キャンプ!?やろうやろう!!』とか言いそうだな。

「なぁなぁ、これ良くないか？」
「ん？」
　しばらく店内を見て回っていると、大垣さんが何やら見つけたらしい。
「おー、オシャレ食器や」
　そこには、棚に吊り下げられている食器類が並んでいた。
　どれも木目調の自然を思わせるものばかりだ。
「北欧っぽい木皿だね」
「これさ、プラスチックみたいだよ」
「あっ、ホンマや」
　実際手に取ってみると、まずは軽さに驚いた。
　よく見ると、木製ではなくプラスチック製と書かれている。

「そうそう。だから手入れも楽そうだしいいよな」
「確かに、水にも強そうだね」
「だろー」
キャンプをする際にこういった物が一つでもあると、雰囲気がさらによくなりそうだ。
俺も一つくらい欲しいかも、と心の中で思う。
「あれ？この前の木皿はどうしたの？」
「うぐっ！」
「木皿？」
すると、斉藤さんが何か思い出したように言う。
「あきちゃん達がクリスマス前に、学校でシーズニング？してたんだよ」
「へぇー。じゃあ大垣さんはもう持ってるんだ？」
「せや、オイル塗ったのにクリキャンで使うてへんかったやん」
あおいも、そういえば、という表情で千明に問う。
「あーー、あれなー」
「色々あってな。今は元気にサボテンの鉢やってるよ」
？コンニチハ／
『??』
サボテン？何の事だろう。
「そ、そうだイヌ子。イスはどうすんだ？小牧と一緒に買うって言ってたろ？」
しかし、大垣さんはそれ以上の事は語ろうとはせず、別の話題を振る。
「あ、せやせや」
「せっかくだし、ここで買いたいよね」
俺も改めて店内を見渡し、キャンプ椅子のコーナーを見つける。
そう。今回のキャンプのもう一つの目的は、二人で新しいキャンプ椅子を買う事だ！